
魔法少女リリカルなのは～黒衣の騎士物語～

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 黒衣の騎士物語

【Nコード】

N5112U

【作者名】

将軍

【あらすじ】

これは、《黒衣の騎士》と呼ばれる青年の物語。

過去に管理局に所属しており、現在は管理外世界《地球》の極東《日本》で《便利屋》を営んでいた。

そんなある日、昔の知り合いから連絡が届く。

「子供を一人、魔導師として一人前に教育してくれないかしら？」

女性からの依頼を青年は承諾することとなる。

そして、青年は一人の少女と出会う。

この少女との出会いが、青年の止まった時を否応にも動かしていく。
過去に自らの力で、守れるものを守ろうと誓った青年は何を思い、
行動していくのか？

『魔法少女リリカルなのは〜黒衣の騎士物語〜』

はじまります。

プロローグ（前書き）

初めての投稿になります。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

ここは、第九七管理外世界《地球》である。

この地球の小さな島国である日本。

その日本、海鳴市から一人の青年の物語は始まる。

すっかり日が暮れてきた道を一人の男が歩いていた。

一八五cmはあろうかという長身であり、筋骨隆々というわけではないが、無駄の無い引き締まった体型をしている。さらに特徴的なのが、全身黒で統一された格好である。黒いズボンに黒いジャケットを着ており、唯一、首から下げられている剣を模したアクセサリだけが赤く光っていた。

男は黒髪短髪、瞳の色も黒く、典型的な日本人の容姿であった。

「今日の依頼主は報酬がよかったな。これで、当面の生活費にはな

るだろう」

青年はこの海鳴市を拠点に、《便利屋》を営んでいた。基本的に報酬さえ貰えればなんでも受けるのが、この《便利屋》である。

現在、青年は依頼を終えたので、家に帰っている最中であつた。

「しかし、最近は依頼の数も増えてきたな」

青年がこの海鳴市に住み始めてから、約半年以上が経つ。ここに住み始めてから最初の頃は、依頼の数も少なかったが、現在はそれなりの数の依頼が来るようになってきていた。

まあ、極端に依頼が増えたのは、ある事件を解決した時からなのだが……………

「地道にやってきてよかったな」

青年はそう呟き、家に向かうのであつた。

家に着き、ポストを確認していると、

「ん？ この手紙は……………」

一枚の手紙が入っていた。

「微かに魔力の反応があるな……………差出人は誰だ？」

青年は手紙の差出人の名前を見ると、顔色を変えた。

「……………」

青年は黙って、静かに手紙の差出人のことを考えていた。

そして部屋に戻り、手紙の内容を確認する。

「この人の依頼なら行かねばならないな……………」

明日から忙しくなりそうだなと、青年は口にした。

そして、青年はシャワーを浴びるために、机の上に手紙を置き、風呂場へと向かっていった。

机の上の手紙には、こう書かれていた。

☐

久しぶりね、元気かしら？ 長い間、連絡を取らなくてごめんなさい。

私は今まで、ある研究で手が離せなくて連絡できなかったの。

あなたが現在、仕事で《便利屋》をやっていると聞きました。

今回は《便利屋》であるあなたに、依頼をお願いしたいの。

依頼の内容は、子供が一人いるのだけど、その子を一人前の魔導師として育ててほしい。

もちろん報酬も払うし、多めに出そうと思ってるわ。

詳しい内容は、こちらで話しましょう。

同封してある紙でこちらに転移できるようにしておいたから、もし引き受けてくれる気があるのなら、それでこちらに来てちょうだい。

じゃあ、依頼を引き受けてくれることを願っているわ。

プレシア・テストロッサ

『

かつて管理局に所属し、《黒衣の騎士》と呼ばれた青年、
《黒沢^{くろさわ}祐二^{ゆういち}》は一人の少女と出会う。

この出会いが、止まっていた青年の時を動き出す。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでくれて、ありがとうございます。

頑張って書いていききたいと思います。

出会い（前書き）

連続投稿です。

どうぞ。

出会い

次の日の朝、俺は日課である早朝のトレーニングを行っている。軽いランニングから筋力トレーニング、次に仮想の相手を見立ててのシャドウボクシング、そして最後にイメージトレーニングを行った後、瞑想を行い終了だ。

「よし、これでいつものトレーニングは終了だな」

深呼吸しながら、俺は首に巻いていたタオルで汗を拭^{ぬぐ}った。

昨日、手紙を読んでからいろいろと考えていた。

プレシアさんは何故今まで、行方不明となっていたのか。あの事故からプレシアさんは一体、何の研究をしていたのか？

また、依頼の内容に子供とあったが誰のことなのか？

「いろいろ考えても答えが出る筈もないか……………」

俺は少し深く息を吐いた。

何にしてもプレシアさんに会って、直接聞くしかないと思い、思考を中断する。

そして、俺は時間を確認し、部屋に戻るために歩みを進めた。

「さて、これで必要な物は全部持ったか」

俺はいつも着ている黒のジャケットを羽織、剣形のアクセサリーを首に掛ける。

「もし、依頼を受けるとしたら子供の教育か……………」

俺は呟きながら、机の引き出しからデバイスを取り出した。俺がいつも好んで使用している汎用型のデバイスであり、待機状態はカード型となっている。俺はそれをポケットに仕舞った。

そして、机の上に置いていたプレシアさんから送られてきた紙を手を持ち念じる。

すると、魔方陣が地面に浮かび上がり、瞬きした間に周りの風景が一変した。

「ここは……………」

転移した場所は、都会の町並みの風景からは程遠い、自然に囲まれた場所だった。

俺が辺りを見回していると、建物が見えたのでそちらの方へ歩みを進めた。近づいて見てみると、かなりの人数が住めるくらいの大きな建物だった。

「ここにプレシアさんがいるのか？」

俺は辺りを見回しながら、建物の入り口に近づいていく。するとそこには、一人の女性が立っていた。

「黒沢祐一様ですね？」

その女性が俺の名前を呼んだ後に、一礼し、

「初めまして、プレシア・テストロッサの使い魔、リニスと申します」

女性、リニスさんが微笑みながら自己紹介をしてくれた。

俺は少しリニスさんを観察させてもらった。

とても綺麗な女性である。ほとんど見た目は人間であるのだが、注意して見てみれば尻尾が生えているのが確認できたので、使い魔というのは本当らしい。

また、流石はプレシアさんが主人ということもあるのか、かなりの魔力を持っているようだ。

「こちらこそ、初めまして」

俺も挨拶をしながら自己紹介をする。

「プレシアさんからの依頼で来ました、黒沢祐一と言います。よろしく願います」

そう言い、俺は右手を差し出しリニスさんと握手する。

「ええ、話は聞いています」

そう言いながらリニスさんが右手を離す。

「プレシアは客間で待っていますので、ご案内します」

そう言いながら扉を開けてくれる。

建物の中へ入り、俺はリニスさんの後について行く。

「リニスさんは、私が何の依頼で来たか知っているのですか？」

客間までの暇つぶしにと、俺はリニスさんと話しをしてみることにした。

「はい、大体はプレシアから聞いていおります。あと、黒沢様、話すときは敬語などは構いませんので、どうぞ気軽に話ください」

俺はリニスさんにそう言われたので、

「わかりま………わかった、俺と話するときも敬語も敬称も要らないから、気軽に話してくれ」

「わかりました」

軽くリニスと話していると、客間に着いたようだ。

「プレシア、黒沢祐一さんお見えになりました」

ノックをした後、リニスが呼びかける。

「ええ、入ってちょうだい」

中からプレシアさんの声が聞こえたので、俺は少し息を飲んだ。

そして、リニスが扉を開けてくれた。

「失礼します」

そして、俺はおよそ三年ぶりとなるプレシアさんと再会したのだ。
った。

今、俺の向かい側にはプレシアさんが腰掛けている。

リニスは気を利かせてくれたのか、退席している。

久しぶりに会ったプレシアさんを見た感想は、顔色があまり良くないと思った。

研究をしていると手紙に書いていたことから、その研究のためにあまり休んでいないのではないのだろうかと推測した。

俺もプレシアさんも、何も話さず沈黙が続いていた。

「……………お久しぶりですね、プレシアさん」

俺はそう言い、プレシアさんに頭を下げる。

「……………そうね、本当に久しぶりね、祐一君」

俺が頭を上げ、そして二人そろって苦笑する。

「とても、大きくなったわね、見違えたわよ」

「あの頃から、三年近く経っていますからね」

俺は苦笑しながら、そう返した。

「プレシアさん、顔色があまり良くないですが、体調は大丈夫なんですか？」

俺がそう言つと、

「このところ研究ばかりしていてね、あまり休んでる暇がなかったのよ。体調は特に問題ないわ」

プレシアさんはそう言っているが、明らかに嘘だということが分かった。だが、本人がそう言っているのだから、無理にこれ以上詮索するのはよくないだろう。

そして、俺はそろそろ聞きたかったことを、質問することにした。

「プレシアさん……………今まで何をやっていましたのですか？」

「……………」

プレシアさんはすぐには答えず、しばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「研究をしていたのよ……………」

「それは手紙にも書いていましたが、どんな研究をしていたんですか？」

研究をしていたのは、手紙にも書いていたので知っている。だが、俺は何の研究をしているのが気になっていた。そして、その研究に対して妙な胸騒ぎも感じているのだ。

俺が考えていると、プレシアさんがゆっくりと口を開いて言った。

「……………アリシアを生き返らせるための研究よ」

それを聞いた瞬間やはりか、と思ってしまった。

アリシアとは、プレシアさんの一人娘で、《アリシア・テストロ

ツタ》と言った。昔、俺がプレシアさんと知り合ったところに紹介され、そこから仲良くなりよく遊んでいた。

だが、アリシアと知り合ってから約一年が過ぎたとき、そのアリシアは魔導実験に巻き込まれて亡くなってしまったのだ。

その事故があつた魔導実験はプレシアさんの主導の下で行っていたらしい。その魔導実験の成果があまり出ていなかったせいなのか、管理局がいろいろと言ってきていたらしい。

そして、事故のあつた日はプレシアさんの意見を聞かず、管理局の命令により実験が強行され、あの事故が起こったと聞いた。

俺がいろいろ思考していると、プレシアさんが話出した。

「私はね、アリシアを生き返らせるためにいろんな研究をしてきたわ」

そこからプレシアさんは今まで、自分がどのような研究を行ってきたかを話してくれた。

アリシアを生き返らせるために、あの日死んだアリシアの肉体を回収し、保存していたこと。狂ったように研究を重ね、『使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究』プロジェクトF・A・T・E』を立ち上げたこと。その研究の成果物として人造生命からアリシアのクローンを生み出したこと。そして、そのクローンにアリシアの記憶を埋め込んだこと。

これらがプレシアさんが、アリシアを失ってから行っていた行為の全てだった。

「でもね？ 研究は完全に成功しているのに、アリシアの記憶も埋め込んだのにあの娘はアリシアではなかったわ！」

プレシアさんは感情が抑えられなくなってきたのか、次第に語気を強めていった。

「全てアリシアと同じものを使用しているのに！ 研究は完璧のはずなのに！」

俺は、プレシアさんの話を静かに聞いていた。

「だからね？ 考えたのよ」

プレシアさんは、一度息を吸い、

「『アリシアの代わり』になるものではなく、『アリシアを蘇らせる』しかない……ね？」

プレシアさんの言葉を静かに聞いていた俺は、そこで初めて驚愕した。

「プレシアさん、あなたは……まさか……」

俺の悪い予感が当たっているならば……

「そうよ。死者蘇生の秘術があると言われる、忘れられし都《アルハザード》を目指すわ」

プレシアさんはそう言った。俺の悪い予感は当たっていたようだ

……あまり当たってほしくはなかったがな。

正直、俺からしてみれば忘れられし都《アルハザード》など御伽おとぎば噺なでしかない。存在する可能性は0%に近いだろう。

だが、可能性がないわけではない。

プレシアさんほどの人がこれほど分の悪い賭けに出るか……
それほどまでにプレシアさんはアリシアを愛していたということだろう。

救いたいのだろう。

たった一人の娘なのだから……。

おそらく、現状では俺が何を言ってもプレシアさんはアルハザードを目指すだろう。

「プレシアさん、考え直すことは出来ないんですか？」

俺は無理を承知で聞いてみる。

「祐一くん、もう遅いのよ。それにアリシアのいないこの世界になんて、興味なんてないのよ」

そう言って、プレシアさんは寂しそうに笑った。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が流れる。

俺はどうするべきなのだろうか？ プレシアさんを無理にでも止める？ それともプレシアさんに協力する？ 何か別の方法を探す？

答えなど出よう筈もない。

「正直に言つと、俺はあなたの行動には賛成できません」

俺は静かに言う。

プレシアさんは無表情のまま俺を見ているが、少し悲しい顔をしていた。

「ただ……………」

プレシアさんの表情が、少し揺れたのを確認する。

「あなたの気持ちはよく分かっているつもりです」

少しだけ、自嘲的に笑い、

「出来る範囲のことなら手伝いますよ……………俺の数少ない友人の頼みですしね？」

俺はプレシアさんにそう答えた。

「ありがとう、祐一君」

プレシアさんは目に涙を浮かべながら、そう答えた。

リニスにお茶を持ってきてもらい、少し休憩した後、依頼の話を開始することにした。

「それでは、依頼の件の内容に移りましょうか？」

プレシアさんが紅茶を飲みながら、話を続けた。

「それで、教育をお願いしたい娘なのだけど」

プレシアさんは少し眉根を寄せながら言った。

「名前は《フエイト》よ」

「では、先ほどの話の？」

おそらく、先ほど話しに出てきたアリシアのクローンのことなのだろう。

「ええ、察しのとおりよ。教育の内容は任せるわ。リニスを補佐に

つけるから一緒に教育をお願いするわ」

俺はその言葉にわかりましたと答え、頷いた。

その後、細かい打ち合わせをプレシアさんとした後、

「とりあえずフェイトに紹介も兼ねて顔合わせをしないといけないわね。リニス、フェイトを呼んできてちょうだい」

「わかりました」

扉の近くに控えていたリニスが、フェイトを呼ぶため出て行った。

少しした後、扉がノックされる音が聞こえてきた。

「フェイトを連れて来ました」

「入きなさい」

扉が開いて、リニスが入ってくる。その後ろから、少し緊張している女の子が入ってきた。

（クローンとは先ほど聞いたが、これほど似ているとは……………）

俺は顔には出さなかったが、驚いていた。

今、俺の目の前に立っているのは、まさに亡きアリシア・テストロツサであった。綺麗な金の長い髪や体系まで細かな所まで、少なくとも見た目は、俺が最後に見たアリシアとそっくりだった。

「今日から、リニスと一緒にあなたの教育係りになる黒沢祐一さんよ」

プレシアが俺を紹介する。

「初めまして。紹介された黒沢祐一だ。よろしく頼む」

身長差がありすぎるため、屈んで少女と目線を合わせて、右手を差し出す。

「あ、えっと、は、はじめまして」

少女は緊張しながら、おずおずと右手を差し出し、そして――

「フェイト、フェイト・テストロッサです」

青年の右手に重なった。

それが、

《黒衣の騎士》と呼ばれた青年と一人の少女が初めて邂逅した瞬間だった。

出会い（後書き）

最後まで読んでくれて、ありがとうございます。

感謝です。

誤字脱字があれば、ご指摘をお願いします。

自分の役割（前書き）

ちょっと長かもしれませんが。

が、楽しんでいただけたら幸いです。

では、どうぞ。

自分の役割

side フェイト・テストロッサ

リニスに連れられて、母さんとお客さんが話をしている客間まで歩いている。その道中でリニスにお客さんについて質問してみた。

「ねえリニス、お客さんって母さんの知り合いなんだよね？ 母さんが私のために教育係りで呼ぶくらいだし」

私は母さんが呼んだ人に興味があったので、リニスに聞いてみることにした。

「そうらしいですよ？ 長く連絡も取ってなかったらしいですけど、昔からの知り合いだそうです」

母さんの昔からの知り合い———どんな人なんだろう？

「それって、男の人？ 女の人？」

正直、男の人だったら少し苦手だな。

昔からリニス達以外とあまり話したことないし、外にもそんなに出掛けたこともないから、男の人とも話なんてしたことないし。

「名前は黒沢祐一さんと言って、名前から分かると思いますけど、男の人ですよ」

黒沢祐一……………男の人なんだ。

うっ怖い感じの人だったらどうしよう。

「その黒沢祐一さんって、どんな感じの人だったの？」

私が少し、ビクビクしながらリニスに質問すると、リニスは少し笑いながら答えてくれた。

「祐一がどんな感じの人かですか？ それはまた、難しい質問ですね」

リニスが頬に手を当て、少し考える仕草をした後、

「見た目は、結構怖いかもしれませんね」

リニスがあっさりと言った。

怖い感じの人なんだ………と、私が緊張していると、リニスは笑みを深くしながら言った。

「ただ、内心はとても優しくそんな人だと感じましたよ？ 一緒にいると安心できる感じだとも思いました。まあ、まだそこまで話などしたわけではないですから、一概にそうとは言えませんがね」

リニスは、そう言いながらも笑っていた。

そうなんだ——それなら少し安心していいのかな？

「リニスがそう言うんなら、良い人なんだね。母さんのために、早く一人前の魔導師にならないといけないし、もし怖い人でも我慢し

ないと……………」

わざわざ母さんが呼んでくるような人だから、とても優秀な人なんだと思う。

そんな人からいろいろ学んでいけば、早く一人前の魔道師になれると思うし……………そうすれば、母さんに喜んでもらえる。母さんの役に立てるようになるんだ……………。

私は気付かない内に、手に力が入っていたようで、しっかりと手を握りこんでいた。

「ええ、頑張ってくださいね。私も祐一と一緒に今まで通り、フェイトの教育係りをやりますから」

リニスもこれまで通りにいろいろと教えてくれるんだ……………そう思ったら、嬉しくて少し笑ってしまった。

……………でも、リニスが少し寂しそうに笑ってる。なんでだろ？

「さて、着きましたよ。心の準備はいいですか？」

話をしているうちに着いたらしく、リニスが呼びかけてくる。

私は深呼吸して、

「うん。大丈夫」

私がそう言うと、リニスは扉をノックした。

「フェイトを連れてきました」

「入りなさい」

リニスがノックして言った後、母さんの声が聞こえた。母さんの声、久しぶりに聞いた気がする。

母さんは研究で忙しくて、めったに部屋からは出てこないし、廊下などで私と会っても、少しこちらを見るだけで声も掛けてくれないから……………。

だから、私は母さんのために早く一人前の魔導師になって、母さんに楽をさせてあげるんだ……………。

「失礼します」

私が少し考え事をしていると、リニスが扉を開けて、客間へと入っていくとこだったので、慌ててリニスの後を追った。

「し、失礼します」

私は少し緊張しながらも、リニスと同じように挨拶をしながら、客間へと足を踏み入れた。

すると、そこにはソファーに向かい合い座っている男女の姿があった。

母さんの顔を確認したので、私は母さんに微笑んだが、母さんは無表情のままこちらを見ているだけだった。

「今日から、リニスと一緒にあなたの教育係りになる黒沢祐一さんよ」

母さんが、男の人——黒沢祐一さんを紹介した。

母さんに紹介されると、黒沢さんが立ち上がってこちらに近づいてきた。

大きい………と私は思った。

座っていたときはあまりわからなかったけど、黒沢さんの身長は、私の頭がちょうど胸より少し下にくるぐらいの高さだった。たぶん、一八五cmぐらいあるんじゃないかな？

黒髪で短髪、目は鋭く光っていて、あまり感情が読めなさそうな人だと思った。男の人をあまり見たことがないから体格とかの基本は分からないけど、とても鍛えられていてガツリしているイメージだった。

私が緊張していると、黒沢さんが私の前で屈み、目線を合わせて挨拶をしてきてくれた。

「初めまして。紹介された黒沢祐一だ。よろしく頼む」

黒沢さんは、少し笑いながらそう言って、右手を差し出してきた。

あ、リニスが言っていたとおり見た目ほど怖い人じゃないかも、と思いつつ私は挨拶を返した。

「あ、えっと、は、はじめまして」

私は緊張しながら、

「フェイト、フェイト・テストロッサです」

これから教育係りをしてくれる、黒沢さんと握手した。

これが、私と祐一の初めての出会いだった。

side out

俺は握手しながら、フェイトを観察していた。

本当にアリシアが甦ったかのように思っぐらいに似ている。クロインなのだから当たり前だが……。

また、見た目はアリシアと瓜二つだが、アリシアとは異なり、かなりの魔力量を秘めているということが分かった。

これなら優秀な魔導師になるだろう。

「これから短い間かもしれないが、よろしくな頼む」

「は、はい！」

まだ少し緊張してはいるが、フェイトが笑顔で返事してくれた。

「祐一くん、依頼の件はお願いね。私は部屋に戻るから、後を頼むわ。リニスは、祐一くんを部屋に案内してあげなさい」

「わかりました」

プレシアさんはそうリニスに言うと、足早に自分の部屋へと戻っていった。

少し暗い顔でフェイトがプレシアさんを見ているが、どうもプレシアさんとフェイトの仲は良好とは言えない関係らしいな。

俺は少し考えた後、とりあえずこの件は保留だなと思い、この後の予定をリニスに伝えようと思った。

「俺は一度戻って、荷物など用意してから、またこちらに戻ってこようと思う」

「そうですか、わかりました」

俺が今からの行動をリニスに告げると、リニスは了承し頷いた。

「では、また後でな、リニス、フェイト」

俺がそう言うと、

「はい、お待ちしていますよ」

「い、いつてらっしゃい」

リニスが笑顔で、フェイトがまだ少し緊張しながらも、そう返してくれた。

俺は二人に背を向けて、客間から出て行った。

俺は一度家に帰り、持って行く荷物を整理してから、またプレシアさんの家に戻ってきた。戻ってきたのが分かっていたのか、玄関でリニスが待っていた。

「おかえりなさい、祐一」

「ああ、ただいま、リニス」

俺は返事を返す。リニスは、俺を部屋に案内するために待っていたらしい。

「それでは、部屋に案内しますね」

俺が頷くとリニスが先導して歩き出した。

「リニス、依頼の話なんだが、この後、今後のフェイトの教育方針や方法について話し合いたいんだが、どうだろうか？」

俺がそう言うと、リニスは、

「わかりました。祐一の荷物の整理などが終わったら、少し話をするということでもいいですか？」

「ああ」

そう言い、俺が頷いていると部屋に着いた。

「では、荷物の整理が終わったら呼んでください」

「ああ、わかった」

リニスが部屋を出て行ったのを確認してから、荷物の整理を始めた。

部屋の片付けが終わったので、リニスと今後の打ち合わせを行っていた。

「フェイトは、デバイスを持っているのか？」

やはりデバイスが無いと、一人前の魔導師になっただとしても限界もあるし、サポートなしでは流石にキツイので、デバイスは必須だと俺は思っている。

「フェイトのデバイスは私が現在、製作中です」

俺の質問にリニスがそう答えたので、俺は少し驚いた。

「リニスはデバイスも作成できるのか……………流石だな。なら、そこらはリニスに任せるとしよう」

俺がそう言うと、リニスはわかりましたと頷いた。

その後、俺がここに来るまでの間、リニスがフェイトの教育でやっていたことを聞いたり、今後の方針や教育方法について話し合った。

俺がここに来るまでも、リニスが魔法の基礎は教えていたということだったので、引き続きリニスには魔法の基礎から使用方法など、知識面での教育を主に担当してもらうことにした。

そして、俺がメインで教えるのは、主に戦闘方法や戦闘技術などをメインで教えていき、また、実践訓練なども俺がメインで担当す

ることにした。

リニスと二人で教育の内容を考えていると、途中でリニスが質問してきた。

「そういえば、祐一はどのくらい強いのですか？ プレシアが推薦するくらいだから、優秀だと思っているのですが……………」

そう聞いてくるので、俺は苦笑しながら答えた。

「自分ではそんなに優秀とは思っていないのだが——どれくらい強いのかは基準がないので、教えるににくいな」

俺がそう答えると、リニスがまた質問してきた。

「じゃあ、祐一の魔力量はどのくらいあるのですか？」

「俺の魔力量は、Aクラスがいいとこだな。リニスより少ないくらいだ」

リニスの質問に答えながら、俺は苦笑する。

嘘は言っていない……………が、真実も言っていない。

「そうなんですか？ まあ、魔力量が多いからといって、その人が強いとは限りませんしね」

リニスは少し納得いつていないようだが、そう締めくくった。

「ああ、少なくとも俺はそう思っている。魔力が少なくとも、上手

く戦えば勝てる戦いもあるさ。そういうところも、教育に生かしていこうかと思ってるしな」

リニスになるほど、という感じで頷いている。

「流石はプレシアが推薦する人ですね。考え方が歴戦の戦士のようなですね」

リニスが笑顔で褒めてくれたので、俺は軽くありがとう、と返しておいた。

「では、話はこの辺にしておこう。明日から教育を開始することでもいいな？」

リニスがわかりました、と頷く。

そして、時計を見たリニスが、

「そろそろ、晩御飯を作らないといけませんね」

そう言うので、時計を見たら、一九時になろうかという時間であった。確かにそろそろ晩御飯の時間だな。

「俺はどうしたらいい？ 少しは手伝おうか？」

俺もこれから、ここで世話になるので、それくらいしようかと思っている。

「祐一は料理できるんですか？」

「多少な。一人暮らしだから、最低限の料理なら出来る」

俺も一人暮らしをしているので、本当に最低限の料理なら可能だ。

ただ、可もなく不可もなくといった感じになってしまつから、食材を切るぐらいならやろうと、リニスに言ってみた。

「では、手伝ってもらいましょうかね？」

リニスは少し悩んだ後に、少し微笑みながらそう言った。

「了解した」

そう頷き、俺とリニスは食堂に向かうのであった。

料理も完成し、今はリニスがフェイトを呼びに行っているのですが、俺は食堂で待機している。プレシアさんは部屋で食べるらしいので、食堂には来ないということだった。

どうもプレシアさんは、フェイトのことを嫌っているようだ。プレシアさんもいろいろと、思うところがあるのだろうが……………そ

のうち、プレシアさんと話をしてみるか。

俺が一人で考えていると、食堂にやってきたリニスの姿が見えた。
「ごめんなさい、お待たせしました。さあ、二人共、早く座ってください。お客さんを待たせたら駄目ですからね」

リニスの後から入ってきたのは、一人は当然フェイトだが、もう一人の赤髪の女性は……………知らないな。

分かったことは、その赤髪の女性は尻尾と耳が生えているので、人間ではなく使い魔ということだ。身長はリニスよりも少し高いといったところで、女性らしい体つきをしている。

俺がフェイトの隣にいるもう一人の女性を眺めていると、リニスが俺の反応に気付いたらしく、

「あ、祐一は会うのは初めてでしたね。アルフ、祐一にちゃんと挨拶しなさい」

リニスが、赤髪の女性に言った。

「フェイトから話は聞いてるよ。あたしはフェイトの使い魔のアルフってんだ」

リニスと違い、なかなか豪快な性格みたいだな……………内心で苦笑し、俺も挨拶を返した。

「知っていると思うが、今日からフェイトの教育係りになった黒沢祐一だ。よろしく頼む。呼び方は好きに呼んでくれて構わん」

「ああ、よろしくね、祐一」

アルフはそう言うと、自分の席に座った。フェイトも自分の席に座り、リニスが全員着席したのを見てから、

「では、いただきましょうか」

各々、いただきます、と言って料理を食べ始めた。

料理を食べ終わった後、リニスが片付けを始めたので、俺も手伝おうと言ったのだが、

『アルフとフェイトの相手をしていてください』

リニスに笑顔でそう言われたので、今はフェイトとアルフの相手をしているところだ。

「祐一は母さんと知り合いなんだよね？　いつ知り合ったの？」

フェイトがプレシアさんの話に興味があるのか聞いてくる。

最初は緊張していたが、しばらく話をしていたら慣れてきたようで、呼び方も黒沢から祐一になっており、敬語もいらないうちでおいちた。

「確か、だいたひ三年前ぐらひだつたかな？」

フエイトがいろいろ質問してくるので答えていると、リニスが片付けを終えて戻つてきた。

少し教育の内容を話ておいち方がいいだらうなと思ひ、リニスが椅子に座るのを確認した後、俺は口を開いた。

「フエイトの教育だが、明日から始めようと思つ」

ここから、内容を皆（主にフエイト）に伝えていった。

フエイトは真面目に頷きながら聞いており、アルフもフエイトの話だからか、真面目に聞いている。

「以上が教育の内容になる。何か質問はあるか？」

「はいはい！」

手を上げたのはアルフだつた。

「なんだ？ アルフ？」

「私も魔法を習いたひんだけど駄目かい？」

アルフがそう言ってくる。

「何故、アルフも魔法を習いたいんだ？」

俺がそう聞くと、アルフは真面目な顔をして、俺を見ながらはっきりと言った。

「私もフェイトの役に立ちたいんだよ」

良い目をしている……………アルフは本当にフェイトのことを大事に思っているのだろう。

俺が少し考えていると、フェイトが話に加わってきた。

「べ、別にアルフも習う必要ないんだよ？ 私はアルフが居てくれるだけで嬉しいし……………それに、祐一もやること増えちゃうし迷惑だよ」

慌てたようにアルフに言っている。

フェイトはああ言っているが、アルフのあの表情から意思はかなり硬そうだな。俺としてはこういう奴になら、全然教育をしてやつてもいいと思っている。

たかが一人増えたぐらいでは、そんなに変わらんだろうと思い、

「別に構わん。アルフは身体能力が高そうだから、魔法での格闘戦をメインに教えてやる」

「ホントかい！？ ありがとっ、恩に着るよ！」

アルフは尻尾を振って喜んでいる。犬のようだな。

「いいんですか？」

フェイトがそう言ってくるが俺は、別に構わん、と告げた。

だが、まだ納得していないのかフェイトが申し訳なさそうに俺を見ていたので、

「別に構わんと言っているだろ？ ついでだしな。それに、アルフがフェイトのために魔法を習いたいと言っているんだ。アルフの気持ちを尊重してやったらいいんじゃないか？ お前は周囲に気を使いきすぎだ。少しぐらい頼れ。俺も依頼でこちらにいる間はいろいろ手伝ってやるから、少しぐらいは甘えておけ」

俺は少し笑みを浮かべながら言い、フェイトの頭を撫でてやった。

フェイトは少し驚いた後、顔を赤くして恥かしそうにしていたが、嫌ではないのか、じっとして撫でられていた。

俺はそんなフェイトに苦笑しつつ最後に、ぽんぽんと頭を軽く叩いてやり、

「よし。質問もないようだし、今日はこれくらいにして明日から開始するぞ」

話を切り上げた。

「はい！ 頑張りますー！」

「おうよ！」

「私も頑張りますよ」

フェイト、アルフ、リニスが順番に答え、今日はこれで解散となった。

俺は部屋に戻り、シャワーを浴びてベットに寝転んで考えていた。

母のためにと頑張ろうとする金の髪と《寂しげな目》をした少女、フェイト・テストロッサ。

フェイトは確実に遠くない未来、大きな障害や問題にぶつかるだろう。

そのとき、それを乗り越えられるように、今はあの少女が一人前になれるように俺が少しでも手を引いて歩いてやろう……………。

俺はそう誓い、明日からの英気を養うために、眠りについた。

自分の役割（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

誤字脱字などあれば、ご指摘をお願いします。

教育と真実（前書き）

読んでくださってる方、ありがとうございます。

拙い文章ですが、よろしく願います。

では、本編をどうぞ。

教育と真実

side フェイト・テストロッサ

今日は、いつもより早く目が覚めてしまった。

もう眠れそうになかったので、私は少し散歩がてら外を歩きに行くことにした。隣ではアルフが気持ちよさそうに寝ていたので、起こさないようにそっと、ベッドから抜け出し、服を着替えてから部屋を出て行った。

「こんなに早起したのは久しぶりだな」

私はそう思いながら、庭を歩いていた。朝早いから風が少し冷たいけど、起きたばかりの体にはとても気持ちよかった。

少し歩いていると、人影を発見した。

「あれ？ 向こうにいるのって………祐一？」

少し離れたところに、人影があったので目を凝らして見てみると、昨日から母さんに呼ばれて、私を一人前の魔導師にするためにやってきた祐一の姿があった。

祐一は昨日のようなジャケットなどは着ておらず、上下ともに動きやすい服装をしていた。

「なにしてるんだろう？ トレーニングでもするのかな？」

祐一は目を閉じ、そこに佇んでいるだけであつた。

私が疑問に思っていると祐一が目を開いて急に素早く動き出し、誰も居ない空間にパンチやキックを繰り出していった。

始めはゆっくり動いていたが、徐々にその速度を上げていき、私も目で追うのがやっとなぐらいの動きとなつていった。

祐一は、パンチやキックといった基本的な打撃技を見えない誰かに当てるかのように動いていた。一つの動きだけでなく、さまざまな攻撃を織り交ぜていた——まるで、誰かと戦っているように……………。

私はその動きを見て、とても綺麗だと思った。祐一の動きは私から見た感じだけど、無駄が全くなくて、とても洗練されている動きだと感じた。

その攻防を始めてから何分か経った後、トレーニングが終わったのか、祐一が体を止めて深呼吸をしていた。

私は祐一の動きを見ていて、私もいつかあんな風に戦えるのだろうかと思っていた。

「やっぱり、祐一は母さんに認められて、信頼されるぐらいすごい人なんだ」

私が、祐一を目標にしてさらに頑張っていこうと思いつていると、

「そんな所で見ていないで、こちらに来たらどうだ、フェイト？」

祐一はいつの間にかこちらを向いており、私を呼んでいたのび
つくりしてしまった。

「邪魔しちゃって、ごめんね？」

私はそう言いながら、祐一に近づいていった。

s i d e o u t

フェイトが少し遠くから見ていたのに気付いたので、声を掛けた
らこちらに近づいてきた。

「いつから私が見てるって気付いてたの？」

「厳密な時間はわからないが、俺がシャドウボクシングを始めた
きからだな。気配を感じたからな」

「気配で気付くなんて、すごいね祐一は……………」

フェイトが少し尊敬の眼差しで俺を見ていた。

俺は少し苦笑しながらそうでもないと答えた。

「それで、こんな朝早くからどうしたんだ？ 俺に何か用事でもあったのか？」

リニスから聞いていた時間より、フェイトが起きてくる時間が早かったので、質問をしてみると、

「今日は早く目が覚めちゃったから、目覚ましがてら散歩してたんだよ。そしたら、祐一の姿が見えたから、何してるんだろって気になっちゃって」

「なるほど、そういうことか」

フェイトがここにいる理由がわかったので、俺は頷いた。

「祐一はいつも朝はトレーニングしてるの？」

フェイトが小首を傾げながら聞いてきた。

「ああ、昔から続けているからな。日課のようなものだ」

するとフェイトが少し何かを考えた後、

「じゃあ、明日から祐一と一緒に朝からトレーニングしてもいい？」

そんなことを聞いてきた。

なるほど………確かにフェイトならすぐに考えそうなことだな。

だが、今日から魔法の訓練や勉強も始まる。それに加えて朝からのトレーニングは少し多いだろう。

「止めておけ。今日から魔法の訓練や勉強も始まるからな。それに加えて朝からのトレーニングは量的にも多いだろう」

一気に詰め込みすぎても、体を壊すことにしかならん。無理をせず、じっくり鍛えていったほうが良いに決まっているのだ。

「そっか……………ダメなんだ……………」

フェイトが残念そうに俯いてしまった。

なんだか、罪悪感を感じてしまうな……………。

俺はふう、と息を吐きながら、

「最初のうちは朝はランニングぐらいにしておけ」

俺がそう言うと、フェイトが顔を上げてこちらを見上げてきた。

「他のトレーニングは、しばらく経って俺の教育に慣れてきたら許可しよう。あと、別に俺のトレーニングを見に来るなとは言わないから、参考にしたいのなら見に来るといいだろ。参考になるかはわからないがな」

俺がそう言うと、フェイトはぱっと笑顔になって嬉しそうに頷いていた。

「じゃあ、明日から祐一のトレーニングを見学に来るよ。シャドウボクシングの動きなんかは参考になるかも知れないし」

俺はわかったと頷き、時間を確認した。

「そろそろ、朝食の時間だろ？ 部屋に戻るぞ。俺は部屋に戻ってシャワーを浴びてくるから」

俺はフェイトを伴い、屋敷の中に戻っていった。

朝食を食べ終わった後、俺がプレシア邸に来るまでの間、フェイトがリニスに教わったことを確認するために集まってもらった。

ちなみに集まっているのは、フェイト、アルフ、リニスの3人である。

「とりあえず、これまでフェイトがリニスに教えてもらったことを確認していききたいと思う。それに応じて、今後どういった内容を教えていくのかを決めようと思う」

皆が頷くのを確認した後、

「リニス、フェイトにはどれだけ魔法について教えたんだ？」

「はい。えっと……………ここまでは終わってますね。こっちは……………ここまで終わってます」

俺が聞くと、リニスは魔法の資料を出して、どこまでを教えたかを教えてくれた。

それを聞いた俺は素直に驚いていた。

正直、ここまでやっているとは思っていなかった。魔力量が高いのは確認したが、それ以外の才能も秀でているようだ。

普通だとこんな子供がここまでやるとは思えないが、この分だとフェイトはかなり飲み込みも早く、勉強も怠ってはいない努力家のだろう。

確実に将来、フェイトは素晴らしい魔導師になるだろうな。

ただ、こんな子供が朝から夜まで魔法の勉強や訓練だけというのは、本人の意思とはいえ、喜ぶべきなのか……………。

「えっと……………な、何？ 祐一？」

フェイトが落ち着かない感じで俺の名前を呼んでいた。

どうやら、俺は少し考え込みながら、黙ってフェイトを見ていたようだ。

「いや、正直ここまでやっているとは思わなかったからな。驚いていただけだ。流石はプレシアさんの娘だな。普通はここまでやるのに相当時間が掛かるんだが、これなら一人前になるのにそこまで時間はいらないうちかもしれない。」

俺が思っていたよりも才能があるようだ」

俺がフェイトを褒めると、フェイトは顔を赤くして恥ずかしそうにしていたが、嬉しそうにしていた。

「じゃあ、フェイトはこのままりニスに魔法を教わっていつてくれ。俺はその間、アルフに魔法を教えていこうと思う。それでいいか？」

俺がそう言うのと、3人共頷いていたので、分かれてそれぞれの作業に移っていった。

俺は今、アルフに魔法を教えている。

流石はフェイトの使い魔というだけあって、なかなかの素質を秘めている。見たところ、アルフは魔力量こそそこまで多くはないが、身体能力が高めであるので、それを上手く生かせるような魔法など

の使い方を教えていった。

まず、俺がアルフに教えたのは圧縮と防御魔法だ。圧縮魔法を教える利点は、右手で何かを殴るときなどのときに、圧縮魔法で右手に魔力を込めて純粹に打撃力が上がる。これを使用出来れば、身体能力が高いアルフと相まって良い効果が期待できるだろう。

後はフェイトのサポートなどが出来るように補助魔法などを覚えさせていけば、立派なサポート役になれるだろう。

「むむむ……………」

今はアルフが、圧縮魔法を覚えるのに苦戦中だ。大雑把な性格をしてはいるが、以外にも勤勉で助かる。

「だいぶコツが掴めてきたんじゃないか？ 最初に比べれば、かなり上達してるな」

なかなか、うまくなってきたと俺が褒めていると、

「ホントかい？ 嬉しいこと言ってくれるね」

アルフが手に魔力を込めながら言った。

ああ、と俺は頷き、

「本当だ。後は、地道に反復練習するしかないからな。ご主人様のために頑張れよ」

「当然！ フェイトの役に立つためなら何でもするからね！」

元気なことだ、と俺は少し苦笑した。

「では、夕方までは防御系の魔法を教えるからな」

「あいよ！」

アルフは俺の言葉に元気良く返事してきた。

さて、俺も気合いを入れて教えるか。

日も暮れてきたことだし、今日はここまでにしておくか。

「よし、今日はこれぐらいにしておくか」

「はあ、やっと終わった」

アルフが疲れたのか、地面に座り込んでいた。

「さて、そろそろフェイト達も作業を切り上げるだろう。アルフ、へばってないで早くフェイト達の所に戻るぞ」

アルフを立たせ、フェイト達の元に向かった。すると、フェイト達も終わっていたのかこちらに歩いてきているところだった。

「あ、祐一、アルフ、お疲れ様」

「お疲れ様です。祐一、アルフ」

「ああ。おつかれ、フェイト、リニス」

フェイトとリニスに挨拶を返した。

「あらあら、アルフはお疲れのようですね？」

リニスがアルフを見ながら笑いつつ、そう言ってきた。

「祐一が厳しくてさあゝ！ 疲れたよ」

「フェイトのために頑張っているから、俺なりの応援のつもりだったのだから？」

アルフの言葉に、俺は少し笑いながら言葉を返した。

「お疲れ様、アルフ。頑張ってるんだね、私も嬉しいよ」

フェイトがアルフにねぎらいの言葉をかけている。アルフはそれが嬉しかったのか尻尾を振って喜んでいる。

「では、そろそろ夕食にしましょうか」

リニスがそう言ったので、

「手伝おう」

「あ、私も手伝うよ」

「あたしは邪魔になりそうだから座ってる」

俺とフェイトが手伝うと言い、アルフはいつも通りだな。

そんなアルフにフェイトとリニスは笑っていた。

「では、食堂に行きしょうか」

リニスがそう言い、フェイトとアルフが並んで歩いていき、俺とリニスはその後を歩いていった。

夕食が終わった後、俺は部屋に戻り、シャワーを浴びてからリニ
スと会っていた。

フェイトとアルフは疲れたのか、もう寝てしまっていた。

「今日はプレシアさんの姿を見ていないが、プレシアさんは大丈夫なのか？」

俺はプレシアさんが心配だったので、リニスにそう聞いてみる。

リニスと集まったのは、リニスがプレシアさんに教育の状況などを知らせるので、俺もそれに同行することになった。

あと、今日はプレシアさんの姿を一度も見えていないので心配だったということもある。

「食べ物は出したら食べてくれるのですが、最近は調子が悪いのかあまり食べずに残しているということが多くなっていますね」

リニスはそう言って、悲しそうにしていた。

やはり、初めてここに来てプレシアさんを見たときに体調があまり良くないように見えたのは間違いではなかったようだ。

「そうか。とりあえず、プレシアさんに教育の報告がてら様子を見ておこう」

「そうですね」

俺はリニスと話しながら、プレシアさんの部屋に歩いていった。

リニスと話をしているうちに、プレシアさんの部屋に着いた。

「プレシアさん、祐一です。今日の教育の内容と進捗を報告しにき

ました」

俺がプレシアさんの部屋をノックしながら、呼びかける。

しかし、プレシアさんから返事がなかった。

おかしいと思ったので、今度は少し大きめの声で呼んでみた。

「プレシアさん？　いないんですか？」

そう呼んでも返事がないので、流石におかしいと思いリニスの方を見ると、リニスも眉を^{ひそ}顰めて、私も知らないと言を振っていた。

何か嫌な予感がする……………。

「プレシアさん、悪いですけど入りますよ？」

俺はそう言い、リニスを伴い部屋の中に足を踏み入れた。

しかし、どこにもプレシアさんは見当たらず、俺とリニスが部屋を見渡すと、奥へと続く扉が開いてることに気がついた。

「プレシアさんはどこにいるんだ？」

リニスと共に扉に近づいていくと、

「っ！？」

扉を越えたすぐ先に、プレシアさんが倒れていた。

俺とリニスは急いでプレシアさんに近づき、リニスがプレシアさんを抱き起こす。

「プレシア！？ 大丈夫ですか！？ プレシア！？」

リニスが顔を蒼白にしながら叫んだ。

リニスが動揺していたので、俺はプレシアさんの容態などを確認した。

よかった、気絶しているだけのようだ。

「リニス落ち着け、大丈夫だ。気絶しているだけで、命に別状はない」

俺がリニスの肩に手を置き、冷静に言ってやる。

すると、リニスも段々と落ち着きを取り戻してきた。

「すみません、祐一。取り乱してしまいました」

リニスが申し訳なさそうに言ったのを、気にするなと俺は返した。

プレシアさんの容態も確認したので、俺は気になっていた部屋の中を見回した。見回して確認したが、この部屋は研究室となっているみたいでかなり広く作られているようだ。

俺は研究室の奥を確認するために、目をそちらに向けた。そこで、俺は驚くべきものを発見した。

わかつてはいたが、実際に目にとするとキツいな……………これは…

そこには生体ポットがあり、中には現在のフェイトより若干小柄で、フェイトと瓜二つの少女が金の髪を漂わせ静かに眠っていた。

いや、眠っているように見えるだけだ。俺が知っているこの少女は、生きているはずがないのだから。

「こ、これはフェイト……………なんですか？　でも少し幼いような……………」

リニスも俺が見ているものに気がついたようで、驚き困惑していた。

どうやらリニスはプレシアさんから、真実を聞いてはいないようだ。

どりあえず、俺達はプレシアさんの容態も気になったので、俺がプレシアさんを抱え、リニスと共に寝室へと足を運んだ。

俺達はプレシアさんをベッドに寝かせた後、プレシアさんが目覚めるのを待っていた。

時間が少し経った後、プレシアさんが目を覚ました。

「具合はどうですか？ プレシアさん」

俺は目を覚ましたプレシアさんに声をかけた。

「……………うん？ ここは……………？ なぜ祐一くんがここにいるの？」

プレシアさんは目覚めたばかりで、現状を把握できていないようだった。

「俺とリニスでプレシアさんに今日の教育内容の報告に来たんですよ。扉をノックしても返事がなかったものですから、おかしいと思って部屋に入ってプレシアさんを探したら、奥の扉のところで倒れているを発見したんです」

状況を俺が話すと、プレシアさんが現状を把握したようだった。

「そうだったの。ごめんなさいね。世話をかけてしまって……………」

プレシアさんが少し申し訳なさそうに謝ってきた。

「いえ、そんなことはないですよ。無事でよかったです」

俺がプレシアさんの無事を確認した後、リニスと2人でプレシアさんの研究室を見てしまったことを話した。

「そう……………見たのね」

プレシアさんが抑揚の無い声で言った。

「ええ、あなたが今まで行ってきた研究と今、あなたが求めている技術について……………」

リニスが覚悟を決めたような顔でプレシアさんを見ていた。

「プレシア……………どんなに願っても、死者は生き返りません。それは失った時間も同じです」

リニスが苦しそうに話をしている。

俺はリニスの言ったことは、真実だと思うし、それが一番良い回答だと思う。

だが、それはあくまで他人が思うところの話であって、当事者の話ではない。リニスが言うように割り切れる人も中にはいるだろう。

だが、プレシアさんの中では未だに割り切れてはいないのだ。誰だって自分が愛していた人が死んだら悲しいのだ。それこそ、理不尽な事故で失うようなことがあればなおさら……………。

「アリシアのことは確かに悲しいですが……………プレシアには今はフェイトがいるじゃないですか！」

「黙りなさい！ フェイトがアリシアの代わりになるはずないじゃない！ 私が愛していたのはアリシアよ！ フェイトなんかではな

いわ！」

リニスがプレシアに告げるが、プレシアは感情を爆発させリニスに言い返した。

「あなたに何がわかるの！ いつも仕事ばかりで、アリシアには少しも優しくしてあげられなかった。研究が終われば、私の時間も優しさも何もかも全部アリシアにあげようと思っていた。なのに……フェイトに注ぐ愛情なんてあるわけない！ あるわけないじゃない………」

プレシアさんが涙を流しながら自分の感情を曝け出し、慟哭している。

リニスもプレシアさんの気持ちが伝わってきたのか、何も言い返せなくなっているようだ。

俺はそんな二人を静かに見つめていた……………。

「リニス、あなたの使い魔としての役割は、フェイトを一人前の魔導師に育て上げること。それが終わったら、あなたの役目はお終いよ。そして、祐一くん、あなたの依頼もフェイトを一人前の魔導師に育て上げること。それが終わったら、あなたも役目はお終いよ」

プレシアさんが涙を流しながら静かに言った。

「プレシア……………」

「……………」

リニスも少し目尻に涙を浮かべながら、何を言っべきなのかを考えているようだった。

俺は最早、プレシアさんに言う言葉が浮かんではこなかった。

何かを言ったところで、逆にプレシアさんを苦しめてしまう可能性すらある。

相変わらず、この世の中は理不尽に満ち溢れているようだな……。

「もう話はお終いよ。二人とも明日からもフェイトを頼むわ。私は疲れたから、今日はもう休むわ」

プレシアさんがこれ以上話すことはないというように、俺達に退出を促してきた。

「……………わかりました。おやすみなさい、プレシア」

「おやすみなさい、プレシアさん」

リニスと俺はプレシアさんに挨拶をしてから、部屋を出て行った。

俺とリニスはプレシアさんの部屋から出て行った後、無言のまま別れ、部屋に戻ってきた。

ベッドに横になりながら、今後のことを考える。

「おそらく、フェイトが一人前になるのは早くて一年といったところだろう。その間に、出来る限りプレシアさんの心の闇を取り除けたらいいのかな」

難しすぎる問題だな……………。

そもそも、自分の心に決着が着いていない男の言葉など、プレシアさんの心に光を取り戻すことなど出来ないだろう。

ならば、俺はプレシアさんの願いを少しでも叶えよう。

例えばそれが、最善ではなかったとしても……………少しでも心に光が灯るように。

この身は、守りたい人を守るためにあるのだから――

教育と真実（後書き）

最後まで、お読みいただきありがとうございます。

誤字脱字などありましたら、指摘をお願いします。

模擬戦（前書き）

今回は初の戦闘描写です。

かなり不安ですが、よろしくお願いします。

また、今回は独自解釈なども含まれていますので、そこもよろしくお願いします。

では、どうぞ。

模擬戦

プレシアさんが行っていた実験の真実がリニス知られてから、一年が経とうとしていた。

プレシアさんは未だに研究を続けている。体調も改善するどころか、悪くなる一方だとリニスが苦しそうに言っていた。

プレシアさんには、俺からも少しは休んだったらどうだと言っているのだが、言ったとき休むだけであまり成果は見られなかった。

……………結局、あれから状況は何も変わっていない。

プレシアさんは研究を続け、リニスはそんな主の姿を見て悲しそうな表情をしている。俺もやれることはないかと思っているのだが、打開策を思いつけないでいた。

逆にフェイトの教育は順調と言えるだろう。もともとのフェイト自身に素質もあったためということもあるが、本人が母親のために役に立ちたい一心から、血の滲むような努力も続けていた。それが功を奏し、フェイトはその才能を開花させていった。

また、フェイトの使い魔であるアルフも順調に力を付けていつている。

——そして、現在はそのフェイトとアルフとの模擬戦の最中である。

「フォトンランサー、ファイアー！」

フェイトが自分の得意技である、槍のような魔力弾を放ってくる。数は四つで、どれも魔力がしっかりと込められている。

このフォトンランサーはフェイトが最初に習得した魔法だ。なので、それだけに熟練しているので、フェイトがもっとも多用している魔法の一つだ。

また、教育の過程で知ったことだが、フェイトは魔力変換資質【電気】を有している。そのため、一発でも直撃すれば、流石の俺もかなりのダメージを受けるだろう。

「ソニックムーブ」

俺はそう呟き、素早く移動しながら攻撃をかわしていった……
…が、急に左腕を引っ張られるような感覚を覚えた。

「む？ バインドか」

どうやら、先ほどの攻撃は俺をこちらに誘導するために放ったものようだった。

俺が少し驚いていると、今度はアルフが上から拳に魔力を込めながら殴りかかってきた。

「うおおおおお!!」

セオリー通りの良い攻撃だ。バインドで敵の足を止め、そこを叩く。基本的だがもつとも効率の良い戦い方である。

——だが、そう簡単に攻撃をくらうほど俺は甘くはない。

「フレイムシューター」

周りに赤い魔力弾が表れる。俺はアルフの攻撃がくることを読んでいたので、あらかじめ自分の周りに魔力弾を四つほど生成していた。

「シュート」

その内の二つをアルフに放ち、残りをフェイトに向けて放った。

アルフは俺の予期せぬ反撃に驚いていたが、即座にプロテクションを張り、俺の攻撃を防いでいた。

フェイトは即座にフォトンランサーを生成し、迎撃していた。

俺はその隙にバインドを解除し、そのまま右手に魔力を込め、アルフに突撃する。

「なかなかやるな——だが、この一撃は受け止められるか？」

俺はそう言いながら、アルフに接近し、魔力を込めた右腕からの一撃を放った。

「くっ!？」

アルフは苦しそうにしながらも、さらにプロテクションに魔力を込め、俺の攻撃をしっかりと受け止めていた。

最初の頃は、俺の攻撃をくらった瞬間にプロテクションが破れていたが、この一年で見違えるほどに成長したな——教えている方としては嬉しい限りだ。

俺は少し口元に笑みを浮かべながら、アルフに言った。

「どうした、アルフ？ もう降参か？」

「誰が!!」

挑発すると、アルフが負けじと俺を押し返そうとしてきた。相変わらず直情的だな、と俺は思いながら、アルフと押し合っていた右手の力を緩めた。

「わわっ!？」

急に俺が力を抜いたことにより、アルフの体勢が崩れたので、俺はそのまま右足に魔力を込めながら後ろ回し蹴りを放った。

「ぐわっ!？」

アルフは咄嗟に右腕を上げてブロックしたが、そのまま勢いよく樹に激突した。

「アルフ!？」

フェイトが叫んで、俺にフォトンランサーを打ち込んできた。

俺がその攻撃を回避しながら、

「さっきの攻撃はなかなか良かったが、バインドでの拘束が少し中途半端だ。もっと強固なバインドなら、もう少し状況が変わっていったかもしれないぞ? あと、アルフは挑発に乗りすぎだ。もう少し落ち着いて戦え」

俺が説明している間に、フェイトがアルフの傍に移動して、アルフも少し息が上がってはいるが立ち上がっていた。

上出来だな——俺は二人の姿を見ながら、また少し笑っていた。

「さて、もう一本いくか？」

俺がそう言うと、二人とも頷いた。やはり、二人とも格段に強くなっているなど、俺は思った。

先ほどアルフに放った攻撃も少し手加減をしたとはいえ、それを咄嗟に防御しダメージを軽減した。少し息は上がっているが、かなりの進歩といってもいいだろう。

すると、俺が考えている間に二人は戦闘モードに入ったようだ。

また、フェイトがフォトンランサーを用意しているのが見えた。アルフもまた、手に魔力を込めている。

「さあ……………来い」

俺がそう言ったと同時に、アルフが突撃してきた。間違いなくアルフは囷として、突撃してきたのだろうが———どういった攻撃をしてくる？

「はああああ！！！」

アルフが雄たけびを上げながら、俺に魔力を込めた拳を振るってくる。当たればかなりのダメージは必至だろうが、そんな攻撃に当たるほど俺は甘くはない。

俺はアルフの攻撃を捌き、がら空きになった体にボディープローを放つ。

「ふっ！」

「ぐっ！？」

アルフは辛うじて右腕でガードしていたが、先ほどの攻撃が効いていたのか、表情が苦痛に歪んだ。俺はさらに攻撃を行おうと思い、アルフに追撃を仕掛けようとしたところで、フェイトがフォトンランサーを俺に放ってきた。

「むっ？」

かなりきわどいタイミングで放ってきた攻撃を俺はプロテクション

ンで防いだ。俺がフェイトの攻撃を防いでいる間に、アルフが俺から距離を開けていた。

そのアルフが、フェイトの前まで移動して、フェイトを守るかのように俺の方を向いて構えた。

さて、次はどのような攻撃をしてくるかな？

「はあああああ！！！」

俺が考えていたら、アルフがまた手に魔力を込め、突撃してきた。

またか？ 流石に馬鹿の一つ覚えすぎじゃないか？ それとも何かを狙っているのか……………それなら乗ってやろうじゃないか。

そう考えながら、アルフの攻撃を捌こうと構えると、急にアルフが俺に手が届く前にしゃがみこんだ。

「む！？」

いきなりしゃがまれたため、俺は思わずアルフの方に意識が集中してしまう。そして、アルフがしゃがんだと同時に、フェイトが放ったであろうフォトンランサーがアルフの後方から頭上を抜け、俺に目掛けて迫ってきていた。

「くっ！？ プロテクション！」

俺は驚きながらも、プロテクションを張りフォトンランサーを防いだが、その隙にアルフが攻撃を仕掛けてきた。

アルフは一度しゃがんだ後、また俺に突進してきたのである。

「今度はもらったあああああ！」

アルフが俺に向けて拳を放ってきた。俺はフェイトの攻撃を防いだ後だったので、アルフの攻撃もプロテクションで防いだ。

だが、先ほどと違い焦ってプロテクションを生成してしまっただけ、強度が落ちている。また、アルフの攻撃力が上がっている。

「うおおおおお！！！」

アルフは俺のプロテクションも関係なく、力で押してきた——
すると、俺のプロテクションにひびが入った。

「ちっ！！！」

「ぐっ！？」

俺はたまらずアルフを蹴って後退した。

——が、どうやらそれが罠だったらしい。

「む！？ またバインドか！？」

俺が後退するの読んでいたのか、バインドが設置されていた。しかも、今回は片手両足という徹底ぶり、先ほどのバインドよりも強固に作られているようだ。

どう対処するかと、俺が逡巡していると、

「フエイト！ 今だよ！」

アルフの叫び声とともに聞こえてきたのは――

「アルカス・クルタス・エイギアス」

フエイトの澄んだ声だった。だが、この呪文は……………まさか！？

俺がフエイトの方に目を向けると、フエイトが目を瞑り呪文詠唱しており、その足元には巨大な魔方阵が現れているのが見えた。

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ」

やはり、フエイトには並外れた才能があるようだな。

まだ、この魔法を覚えるのは先になるかと思っていたが……………

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

フエイトの周囲に大量のフォトンランサーが現れてくる。

まさか、こんなに早くこの魔法を習得するとはな……………俺がフエイトに教えることはもうないようだな。

まったく……………素晴らしい教え子だな。

俺はそんなことを思いながら、笑っていた。

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー
！！」

そして、俺は金色の光に飲み込まれた。

side フェイト・テストロツサ

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー
！！」

私はありったけの魔力を込めて、バインドで拘束されている祐一
に目掛けて、一斉射撃を行った。

この魔法は呪文詠唱にそれなりの時間も掛かるし、魔力も膨大に
消費するから、必ず当たるような状況を作らなければならなかった。

正直、祐一にこの《フォトンランサー・ファランクスシフト》を
当てるのは至難の業だ。詠唱に入ってしまうえば、祐一は当然こちら
の意図に気付くだろうし、そうなってしまえば詠唱を完成させるこ
とさえ難しくなってしまう。

だから、今回はアルフに囷として、祐一の足を完全に止めてもらうために動いてもらった。そのために入念にアルフと作戦を立てて、そして祐一を追い込むことに成功して、こちらの攻撃を当てる事が出来た。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

もう私の体には魔力も体力もほとんど残っていない。だけど、もしこの攻撃に祐一が耐えていたとしても、かなりのダメージを与えているのは確かだと思う。そうなれば、まだ比較的元気なアルフがこちらにはいるから、勝敗は決したと言ってもいいと思う。

「やったね、フェイト！！ あの祐一に勝ったんだよ！！」

アルフが両手を挙げて、元氣良く喜んでいる姿を見て私も微笑んだ。

「待つて、アルフ。まだ勝ったかどうかわかんないよ。祐一の姿を確認しないと……………」

「大丈夫だよ。バインドでしっかり逃げられないようにしたし、祐一が当たるところまでは見えたんだからさ。というか、直撃だったけど大丈夫かな？」

確かに私も祐一が、フォトンランサーに飲み込まれていくのが見えた……………私、本気で射ったけど、祐一大丈夫かな？

今更ながらに、私は祐一のことを心配になってきた。

祐一なら絶対に無事だとは思っただけ———そんな話をしな

がら未だに、攻撃の余波で煙が立ち込めている場所を私とアルフは見る。

煙がだんだんと晴れてきた。おそらく祐一の姿を確認できると思
うんだけど……………

「あれ？ 祐一が……………いない？」

私は困惑しながら言った。煙が完全に晴れたのだが、祐一の姿がどこにも見えなかった。

「なんで！？ 威力が強すぎて、吹っ飛んでいったのかい？」

アルフは驚き声を上げながら、そんなことを言ってくる。

「そ、それはないと思うけど……………」

私とアルフが困惑して、祐一がいた場所を見ると……………

「今のはなかなか良い攻撃だったぞ？ 間違いなく、今までで最高の攻撃だった」

私達が立っている後方から、今まで探していた祐一の声が聞こえた。

「「っ！？」」

私とアルフが同時に後ろを振り返ると、服は所々破けたりしておりダメージも負っているようだが、そこにはいつもの調子の祐一が立っていた。

「な、なんでこっちにいるんだい！？ そもそも、あれだけの攻撃

を受けてなんで少ししかダメージがないんだよ!？」

「そ、そうだよ!　なんで無事なの!?　祐一!？」

私とアルフが驚きながら、祐一に向かって叫ぶ。

その叫びを聞きながら、祐一が「まあ、落ち着け」と言いながらこちらに近づいてきた。なんだかいつもより、どことなく嬉しそうな表情をしているような気がするけど……………。

私がそう考えていると、祐一が説明を始めた。

「あれは俺の稀少技能レアスキルを使用して、フェイト達の後方に回り込んだんだ」

祐一がしれっと、驚くべきことを口にしてきた。

「ゆ、祐一って稀少技能レアスキル持ってたの?」

今まで祐一に訓練してもらってきたのにそんなこと全然知らなかった……………少しショックだ。

私が少しショックを受けているのに気が付いたのか、祐一が私の頭を撫でてきた。

「黙っていたのは悪かったな。俺の奥の手のようなものだから、あまり知られたくはなかったんだ」

祐一が少し苦笑しながら、そう言ってきた。

「その祐一の稀少技能^{レアスキル}ってどういう能力なの？」

私は祐一が使用していた、稀少技能^{レアスキル}がどういう能力かがとても気になったので質問してみた。アルフもやっぱり気になっているようで、私の隣でうんうん頷いている。

祐一は少し困ったような顔をしたが、「二人になら教えても大丈夫か………」と言いながら説明をしてくれた。

「俺の稀少技能^{レアスキル}………【自己領域】と俺は呼んでいるが………能力は『自分の周囲の空間を自分にとって都合のいい時間や重力が支配する空間に改変する』というものだ」

そう祐一が説明してくれるが、私はあまり理解が出来なかったの
で少し首を傾げてしまった。アルフも理解出来なかったのか、私と
同じように首を傾げていた。

祐一は少し苦笑しながら、さらに説明してくれた。

「そつだな………例えば通常の時間だと三十秒掛かることが、【自己領域】を使用すればその半分の時間で可能になる。また、重力制御も可能だから自分の動きを速くすることが可能になる」

祐一が一呼吸置いてから、さらに説明してくれた。

「まあ、簡単に言えば相手からしてみると、俺が瞬間移動でもした
ような動きになるということだな。なんとなくは理解できたか？」

「「なんとなく………」」

私とアルフは、うんうん頷きながら祐一に理解したことを伝えた。

「まあ、この【自己領域】には欠点もあるのだが……………それはまたの機会に説明しよう。さて、今日の模擬戦はこれで終わりだ」

祐一が説明も終わったので、そう告げてきた。

「でも、結局今日も祐一に勝てなかったね。今日は勝つためにアルフとたくさん相談して作戦も練って、完成した魔法も使ったのに……………」

「そうだねえ。今日こそ祐一に勝ってやろうと思ったのにさ」

私とアルフが残念そうな顔をしていると、

「いや、今日の勝負はどちらかという俺の負けだろう」

と、祐一が私達に驚くようなことを言ってきた。

「俺は【自己領域】を使うつもりはなかったんだが、最後の攻撃に当たらないために使用してしまったからな……………ようするに、お前達はそこまで俺を追い詰めたと言うことだ。使用するつもりがなかった【自己領域】を俺に使わせたから、この勝負は俺の負けというわけだ」

私達がポカンとして、祐一の言っていることを聞いていると、祐一が私とアルフの頭に手を置いてさらに言った。

「何度も言うが、お前達は俺が【自己領域】を使用するまで強くなつたということだ……………それは誇ってもいいことだ」

祐一が私とアルフの頭を撫でながら、優しく言ってきた。祐一に褒められたことが嬉しくて、私はアルフと顔を見合わせて笑い合っていた。

「それに、最後にフェイトが使用した魔法だが、俺はもつと習得するのに時間が掛かると思っていたんだが………まさか、フェイトがもう習得しているなんて思ってたから俺としては嬉しかったよ」

祐一はそう言いながらさらに頭を優しく撫でてくれた。私は少し恥ずかしかったけど、嬉しくて笑っていた。

「もちろんアルフも近接戦闘もかなり習熟してきているし、バインドを含めたサポートの魔法も精度が上がってきている。アルフもよくやっているよ」

アルフも祐一に撫でられながら、嬉しそうに笑っていた。

私達が笑い合っていると、ふいに祐一が少しだけ………ほんの少しだけ悲しそうな表情をした。

祐一はあまり表情を変えないため、感情を読むのが難しい。そんな祐一がこんな表情を一瞬でもしたのはとても珍しかった。

「どうしたの？ 祐一？」

私がそう言うと、祐一はなんでもないと首を振った。

ほんとにどうしたんだろ？

「さて、話はこれぐらいにしてそろそろ戻るか。リニスも待っているだろうし、シャワーでも浴びてさっぱりしてこよう」

祐一はそう言うと、屋敷に向かって歩いて行った。

さっきの祐一の表情がなんだかとても引かかる。屋敷に向かって歩いていく祐一の大きな背中を見ながら、私は妙な胸騒ぎを感じていた。

すぐに祐一の後を追いつく、追いつくと私はこの胸のモヤモヤから祐一の服の裾を掴んでいた。

祐一は少し驚いた顔をしていたけど、少し笑った後、いつものように私の頭を優しく撫でてくれた。

それだけで嬉しくなつて、さっきまでの胸騒ぎも落ち着き、祐一もそんな私を見てまた歩き出した。

さっきの胸騒ぎはなんだったなろうと思ったけど、とりあえず置いておくことにした。

魔法の勉強も順調だし、今は祐一やリニスにアルフも居てくれる。母さんは研究が忙しくて、あまり部屋から出てこないから話も出来ないけど、私が早く魔導師として一人前になって、母さんに楽をさせてあげるんだ。

——だから、今はそのために頑張ろう。

私はそう決意し、アルフと共に祐一の後を追った。

その時の私は何も知らなかったし、気付かなかった。

このとき感じた胸騒ぎが、すぐそこまで迫ってきているという
こと。

祐一が何故、悲しそうな表情をしていたのかということに。

そう………このときの私は気付けなかったんだ。

s
i
d
e

o
u
t

模擬戦（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます。

誤字脱字など、指摘がございましたらよろしくお願いします。

interlude 1・1 (前書き)

幕間です。

ちょっと、やっつけてきな感じになっているかもしれません。

それでもよければ読んでください。

では、どうぞ。

interlude | 1・1

side リリス

プレシアの依頼で、祐一が《時の庭園》に来てからもう一年が経ちます。

今、祐一達は模擬戦を行っているため、私は皆がお腹を空かせて帰ってくるであろうと思ったので、現在は料理を作っている最中です。

おそらく模擬戦が終わったら、アルフが「お腹減った」とか言いながら帰ってくるでしょう。私はそんなアルフの姿を想像して、少し笑ってしまった。

最近では、もはや私ではフェイトに教えることはほとんどなくなってしまうている状況です。このことから分かるように、フェイトは魔導師としてはもはや一人前と言えるレベルにまで育ってきているということです。

そのことはとても嬉しい……………でも、フェイトが一人前になるということはすなわち、使い魔としての私の役目が終わるということ……………それはフェイト達との別れを意味しています。

私は涙が出そうになるのを何とか堪えて、料理を作ることに集中する。

「いけませんね、こんなことでは……………こんな顔をしていたら優しいフェイトには気付かれてしまいますね」

そう思うと、私は心が温かくなるのを感じると同時に、罪悪感に
も苛さいなまれます。

「私がこんな顔をしていたら、フェイトが悲しみますからね……
…あの娘の悲しい顔は見たくありません」

私はフェイトの悲しい顔を見ないためにも、元気を出さないと…

……

「さてと、皆が帰ってくるまでに頑張って料理を作りましょうか」

私はいつもの笑顔に戻ると、考え事で止まっていた料理の作成を
再開した。

（前から思っていましたけど、いつも料理は結構な量を作らないと足
りないですから、作る方は結構大変なんですよね）

私は料理を作りながら、息を吐き少し苦笑した。

（フェイトはそんなに食べませんが、アルフはいつもたくさん食べ
ますし、祐一もたくさん食べますしね）

そんな風に皆の顔を思い浮かべながら料理をしていると、嬉しい
気持ちになってきて自然と自分の表情が笑顔になることが自覚でき
た。

「祐一が来てからもう、一年が経つんですね」

祐一が来てからの一年間は、私がこの世に使い魔として生まれて

忘れることのできないような、とても充実した一年だったと思う。
悲しいことも多かったし、まだいろんな問題も解決していないけれど、それでも皆で過ごした一年はとても楽しいものだった。

フェイトも祐一が来てからの一年間で魔導師としても一人前になり、最近では自然な笑顔が増えてきているように感じている。もちろん、祐一が来る前までも自然な笑顔を見せてくれることはあったが、やはりプレシアのこともあり、たまに見せる寂しそうな表情が私にはとても辛かった。

フェイトがそのように魔導師として早く一人前になったことと、フェイトの笑顔が増えた要因となったのはやはり、祐一が存在が大きかったのだと思う。

プレシアの依頼でやってきた魔導師で、第九七管理外世界《地球》で《便利屋》を営んでいる男性。

正直な話、私は始めは外部の者に協力を申し出ることについては反対していた。それは、フェイトの教育係りは私だけでも十分であり、外部の者にフェイトを任せることが不安であると感じていたからだ。

でも、私の主人であるプレシアが、私だけではフェイトが一人前の魔導師になるのが遅くなってしまうということで、依頼として外部の優秀な魔導師を雇うと言い張ったのだ。私はプレシアの使い魔であるので、その命令に逆らうことは出来なかった。

ただ、あのプレシアにここまで言わせる人物に興味を覚えた。プレシアは使い魔の私から見てもとても優秀な魔導師であるので、滅多に人を褒めたりはしなかった。そのプレシアをして、優秀と言わ

れる人物に、私が興味を覚えるのに時間は掛からなかった。

黒沢祐一くろさわゆういち——それがフェイトの教育係りを任せる人物の名であつた。

始めは、プレシアが推薦する人物が、男性であることに驚いた。また、フェイトのことを考えると男性で大丈夫かという懸念もあった。

プレシアから渡されたプロフィールにはたいした情報は載つてはなかった。本人の容姿と保有魔力量、また現在行っている仕事に記載されているだけであつた。

明らかに何かを隠しているような感じはするが、プレシアが推薦する人物なのであまり考えないことにした。

私が祐一を初めて見た印象は、年齢の割りに頼れる男性という印象でした。体格は一般的な男性よりも大きく、身長一八五cm、体重七五kg、プロフィールを見て分かつていたのに、実際に会ってみるとさらに大きく見えました。このときは、祐一をフェイトに合わせても大丈夫かなと心配もしたりしましたね。威圧感でフェイトが泣いてしまわないかと心配でした。

祐一にフェイトを任せてもいいと感じたのは、祐一がとても優しくかったからでしょうか？確かに祐一は威圧感はかなりありますが、その瞳はとても優しくでした。それだけで判断したわけではないで

すが、私はなんとなくこの人ならフェイトを任せても大丈夫ではないか、と思うようになりました。

そして、実際に祐一とフェイトを会わせてみると、祐一がプレシアさんの友人ということもあったのですが、フェイトはすぐに祐一と打ち解けていました。アルフもフェイトが打ち解けていたことから、すぐに打ち解けていました。これを見て、私は祐一には人を引き付ける何かがあるのではないかと感じました。

また、フェイトの教育が始まったとき、アルフも本格的に魔法を習いたいと言ってきました。フェイトは遠慮していましたが祐一が許可を出したことにより、アルフもフェイトと共に魔法を習うことになりました。

そして、本格的にフェイト達の教育が始まりました。

祐一の教育には無駄が無く、とても理解しやすく教えており、フェイトもアルフも素晴らしい上達ぶりを見せていました。また祐一は戦闘技術、戦術理論ともに秀でており、ほとんどの魔法を習得していたことには驚きました。祐一曰く、「戦術の幅を広げるために全ての魔法を覚えておいたほうが都合が良かった」とのことでした。

フェイトもその優秀さを目の当たりにして感化されたのか、祐一と一緒に朝練までするようになっていました。

そういうこともあり、フェイトはさらに祐一を慕っていきました。フェイトが「祐一ってこんなことも出来るんだよ！　すごいよね！」と、嬉しそうに話してくれたりしました。

祐一が上手く教育を行っていたことと、フェイトが優秀で勤勉

であつたこともあつて、僅か一年足らずでフェイトは一人前になりました。

そしてなにより、祐一はフェイトを魔導師として一人前にするだけではなく、フェイトに多くの笑顔も与えてくれました。私とアルフの笑顔も増えたと感じましたし、嬉しかった。プレシアも祐一が来てから、少しだけ、ほんの少しだけ態度に変化が出てきているような気がします。

祐一が来たことによつて、私達に良い影響を与えたのは間違いないと思います。

本当に祐一に感謝しています。

願わくは、私が消えてしまつても、この状況を祐一が良い方向に持つていってくれることを信じています。

s i d e o u t

interlude | 1・1 (後書き)

読んでくださりありがとうございます。

誤字脱字などありましたら指摘をお願いします。

リニス（前書き）

投稿します。

今回も少し駆け足になっているかもしれませんが。

では、どうぞ。

リニス

俺達は模擬戦が終わった後、汚れを落としてから食事を済ませた。

フェイトとアルフは流石に疲れたようで、食事が終わったら、休むと言って部屋に戻っていった。

俺は現在、リニスと二人で話をしているところだ。

「そうですか……………もう私達がフェイトに教えることは、ほとんどないようですね」

「ああ、一通りの魔法も教えてあるし、勉強の方もリニスが上手く教えてくれたから本当に俺達が教えることはなさそうだ」

俺はリニスに今日の模擬戦の話と、それを踏まえた上でのフェイトの教育の話をしていた。

「本当にフェイトはすごいですね……………私達の予想を超えて、ここまで早く一人前になってしまっなんて……………」

「そうだな。本当にすごい娘だよ、フェイトは」

俺とリニスは笑いながらここにはいない、フェイトを褒め称えていた。

そんな中、リニスが少しづつ表情を曇らせていった。

「どうした、リニス？ 少し暗い表情をしているようだ？」

俺はそうリニスに問いかけたら、少し暗い表情で苦笑しながら答えた。

「本当はもつと喜ばないといけないんですけどね……………あ、嬉しくないわけじゃないんですよ？ フェイトが一人前になってくれて私はとても嬉しいです。ただ……………」

リニスはそこで言い淀んだが、一呼吸して言った。

「ただ……………フェイトが一人前になってしまったので、私はそろそろ消えなければいけません……………それが……………少し寂しいです」

リニスは苦笑していたが、それは今にも泣き出しそうな表情をしているように俺には見えた。

使い魔であるリニスは、プレシアさんとの契約により生み出された存在。その契約は《フェイトを一人前の魔導師に育てること》。その契約が完了すれば、リニスは使い魔としての役目を終えて、消えることになる。

その契約はまもなく完了の時を迎えようとしている。

使い魔だから役目が終わったら消えてしまうのは仕方ないと思う…………

……………だが、割り切れない部分もあるのだ。

俺がリニスの言葉に対して、何も言わずに黙っていると、

「まあ、契約なのでそれは仕方ありません。私がいるとプレシアへの負担も大きくなりますしね。フェイトのデバイスが完成したら私は消えようと思います」

リニスはやはり、少し寂しそうな表情で、そう言った。

「……………そうか……………それで、フェイトのデバイスはいつ頃完成するんだ？」

「明日には完成すると思います」

「そうか……………明日、リニスは消えてしまうということか……………
… 儘ままならないものだな。」

どうしようもないこととはいえ、俺はリニスに何もしてやれないことを悔いていた。

「そうか。とりあえず、今からプレシアさんにフェイトのことを報告しに行くか」

「そうですね」

俺達は連れ立って、プレシアさんの部屋に向かった。

その道中に、俺は思いついたことがあったのでリニスに言った。

「リニスは何か願いはないのか？ 欲しい物とか、やりたいこととかでも構わないが……………」

「願いですか？ 何で急にそんなこと聞いてくるんですか？」

リニスは俺の問いかけに疑問を持ったようで、質問してきた。

「ここまでフエイトを育て上げたんだ、何か願っても罰は当たらないと俺は思うが？ プレシアさんにも何か願いがあれば言ってみたらどうだ？ もちろん、俺にでも構わないぞ？」

俺がそう言うと、リニスはうーんと、顎に手を当てて何かを考えるような仕草をしていた。

「そうですね。確かに願いならありますね」

リニスは考えるのを止め、何かを思い付いたのか笑顔で俺を見ていた。

「今からプレシアに報告で会いますし、丁度いいですね。その時にプレシアに願いを言おうと思います」

「そうか。プレシアさんもリニスの最期の願いなら基本的に何でも叶えてくれるだろう」

「祐一への願いは考えていなかったなので、考えておきますね？」

リニスが笑顔で俺に言ってきたので、それに苦笑を返しておいた。そんな話をしている内に、プレシアさんの部屋に到着した。

「プレシア、リニスです。入ってもよろしいですか？」

「入りなさい」

リニスがプレシアさんの部屋の扉をノックしながら、話しかけると中からプレシアさんの声が聞こえてきた。

「失礼します」

リニスがプレシアさんの部屋に入ってしまったので、俺も後に続いた。

「失礼します、プレシアさん。教育の報告に来ました」

「ご苦労様……………で、フェイトの方はどうなの？」

プレシアさんがそう言うてきたので、俺とリニスは手短に内容を報告していった。

「正直、フェイトには驚かされますね。まさか、こんな短期間で一人前になってしまうとは思ってなかったですよ」

「そうですね。とても立派ですごくいいことだと思いますよ」

俺とリニスはプレシアさんにフェイトのことを話した。

「そう……………それはすごいわね」

プレシアさんは少しだけ反応したが、返事はそっけないものであった。だが、この反応があるだけでも最初の頃よりはマシになっているか……………。

俺が一人で考えていると、プレシアさんがリニスに質問していた。

「それで、フェイトのデバイスはいつ完成するの？」

「明日には完成しますよ」

プレシアさんがリニスの最期の仕事である、デバイスの作成の進捗具合を聞いていた。

「そう……………なら、早く完成させてしまいなさい……………そうすれば、あなたも消えて私の負担も軽くなるわ。あなたのような使い魔を維持するのも楽じゃないのよ」

プレシアさんがリニスにそう言った。内心はどう思っているのかは知らないが、少なくともリニスが消えてしまうことへの罪悪感は少しあるようだと言った。

「わかっています。ただ、最期に願い事を一つだけ叶えてもらってもいいでしょうか？」

「……………何？ 言ってみなさい。ただし、人間のままでいるというのは無理よ？」

リニスが言ったことに対して、プレシアさんは願いが何かを聞いてきた。また、叶えられない願いもリニスに言った。

「わかっていますよ……………私の願いはそんなに難しいことはありません。とても簡単なことです……………」

リニスが少し間を置いて、息を吸い込み言った。

「フェイトと一緒に食事をしてもらえないでしょうか？ よければ祐一やアルフも一緒に……………」

プレシアさんが驚いた表情をしていた。正直、プレシアさんだけでなく俺もこの時ばかりは驚きの表情を隠すことはできなかった。

本当にリニスの願いは何でもないようなことであつた。他にも願いはあつたかもしれないのに、自分のことではなく最期までフェイトのことを第一に考えた願いだつた。

「本当にそんな願いが、あなたの最期の願いで構わないの？」

「ええ、構いません。その願いが今の私にとっては、最も叶えて欲しい願いです」

驚きながら聞くプレシアさんとは対照的に、リニスは笑顔のまま表情を変えずに言った。

「……………そう、それなら構わないわ」

「では、明日の夕食のときにお願いします。祐一も構わないですよね？」

「ああ。俺は全く問題ない」

プレシアさんが、リニスの願いを承諾し、俺もリニスの言葉に頷きながら返事を返した。

「では、明日、夕食の前に呼びに来ますね？　楽しみにしててください」

「……………ええ、そうね。楽しみにしているわ」

プレシアさんは作業に戻りながら、興味がなさそうにリニスの言葉に答えた。リニスはその答えに満足したらしく、笑顔でプレシアさんの方を見ていた。

俺はそんな二人を見ながら、明日のことを考え、口元に笑みを浮かべるのであった。

——翌日

今日はフェイト達には昨日の間に、完全にトレーニングはなしと伝えているので、何事もなく一日が過ぎていった。

そして、夜になり、夕食の時間になった。

今はリニスがフェイト達を呼びに言っているところであり、俺とプレシアさんが席に座って待っているところだ。

テーブルにはいつもとは違い、リニスが腕によりをかけたであろう、おいしそうな料理がところ狭しと並べられていた。ちなみに、リニスだけでは大変であろうからと、俺も少し手伝っていたりする。

プレシアさんは特に表情も変えず、フェイト達が来るのを待っている。

フェイト達をただ黙って待っているのも退屈だったので、俺はプレシアさんに話しかけた。

「きっと、フェイトはプレシアさんとうやうやって夕食と一緒に食べることが出来てとても喜びますよ。プレシアさんはどうですか？」

「私は別に何も感じないわ……………リニスの最期の願いだから叶え

てあげているだけよ」

プレシアさんの態度は相変わらずであるので、俺は少し息を吐いた。

「一緒に食事するだけではなくて、ちゃんとフェイトと話をしてくださいよ？ それもリニスの願いに含まれているでしょうから」

「……………ええ、善処はするわ」

プレシアさんもりニスの願いの意味はわかっているようだったので、俺はそれで話を切り上げてフェイト達を待った。

数分後、フェイト達がやってくる気配を感じた。

さて、フェイトはどんな顔をするのだろうか？ 俺はフェイトの驚く顔を想像して、口元に笑みを浮かべた。

そして、フェイト達が食堂に入ってくるのが見えた――

私はフェイトを呼びに行き、「今日はちょっとびっくりな趣向があります。身だしなみを整えてから向かいましょう」と伝えた。

フェイトは私の言葉に首を傾げてはいたが、素直に言うことを聞いてくれた。

プレシア達が待っている食堂に着き、フェイトに「入ってください」と笑顔で言った。フェイトは首を傾げていたけど、素直に部屋に入った。

そして――フェイトは扉を開けた状態で固まっていた。

フェイトはプレシアがいることに嬉しいような、困惑しているような、いろいろな感情が混ざり合った表情をしていた。

フェイトが固まっているのを気にしたのか、していないのか、プレシアがフェイトに声をかけてきた。

「フェイト、久しぶりね」

「か、母さん……………」

プレシアの表情は相変わらず無表情であり、感情は読めないが、私との約束を守ってくれているので安心した。

「リニスと祐一くんから聞いたわ。課題を全てクリアしたって……………」

「は、はいっ」

フェイトはかなり緊張しているようで無意識に両手を握りこみ、プレシアが何を言うかを待っていた。

「今日はそのお祝い……………一緒に食事をしましょう」

プレシアがそう言うと、フェイトは緊張していた表情を崩し、満面の笑みに変わった。

「は、はいっ!!」

フェイトは返事をして、自分の席に着いた。私と祐一はそのやり取りを見て、二人で笑っていた。

「あの人も母親らしいところあるんだ」

アルフはプレシアの行動に驚き、私に聞こえるように静かにそう言ってきた。

「ええ、親子ですからね」

私はそのアルフの言葉に満面の笑みで答えた。

「邪魔しちゃ駄目ですよ、アルフ？」

「当たり前だよ。するもんか」

アルフもフェイトが笑顔なのを見て、笑顔でそう答えてくれた。

「最期の高位魔法習得まで、どれくらいかったの？」

「えっと、中級の術式接続で戸惑っちゃって……………でも、それが分かればすぐに」

「好きな魔法は？」

「えっと、ランサーとか射撃系は割りと得意かも……………です」

「そう……………」

なんだか親子の会話っぽくはないですが、仕方ないですかねと思
いながら私は苦笑していた。すると隣からアルフが、

「な〜んか、親子っぽくない会話だね」

私と思つてたことが一緒だったようで、さらに苦笑してしまった。

「一緒に食事なんて、私が産まれてから初めてですしね」

「まあ、あの人のことはどうでもいいけど……………フェイトが嬉し
そうだから、あたしはどうでもいいや」

アルフは相変わらずですね、と思い私は笑っていた。祐一も二人
の会話を聞きながら苦笑していた。

フェイトが本当に嬉しそうで良かったです。私はこんな風景が見
たかったんですね……………普通の家族ならなんでもない、この風
景が……………。

最期にフェイトの笑顔も見れて、この風景も見る事が出来て本
当に良かったです。

私はその風景を忘れてしまわないように、脳裏に深く刻んだ。

S i d e o u t

フェイトとプレシアさんの食事を穏やかな気持ちで眺めていると、リニスがアルフに何かを告げて食堂を出て行く姿が見えた。

俺はそろそろかと思い、プレシアさん達に「二人で食事を楽しんでくれ」と言い、リニスの後を追った。

リニスの部屋に着いたので、扉をノックした。

「リニス……………俺だ。入っても構わないか？」

「祐」ですか、どうぞ」

部屋に入ると、リニスが部屋のちょうど真ん中に立ち、こちらに背を向いて立っていた。

「いくのか？」

「はい。もう……………いきます」

俺がそう聞くと、リニスはこちらを向き、笑顔で答えた。

「私は……………私の成すべきことを全て終えました。気がかりや心残りは山ほどありますが、役目は終わってしまいましたから、素直に舞台から消えます」

そう言つと、少し寂しそうに笑った。

リニスはフェイトのために作成したデバイスを手を持ち、さらに言う。

「私は消えてしまいますけど、想いと意思はこの子に残していきます」

リニスがそう言つと、持っているデバイスが答えるように光った。

「《バルディッシュ》——闇を貫く雷神の槍、夜を切り裂く閃光の戦斧^{せんぶ}……………私の願いを込めた杖……………」

デバイス——《バルディッシュ》が金色に光っていた。

「ねえ、祐一？ 少しだけ、聞いてもらえますか？」

「ああ、なんだ？」

俺はリニスに話を続けるよう促した。

「実は私、プレシアに嫉妬していたんですよ？ フェイトが私の子供だったら良かったなって……………」

「そうか……………」

俺はリニスの言葉を聞きながら頷いた。

「そしたら、この手で抱きしめてあげて、うんと可愛がれたんです」

リニスは涙を流し……………さらに続けた。

「だけど、プレシアの使い魔でなかったらフェイトにもアルフにも出会えていなかった……………だから……………嫉妬より感謝の方がちよつとだけ多い……………」

リニスが涙を流しながらも笑顔を作っていた。

そして、リニスの体が少しづつ光に包まれていく。

「もう、そろそろいきますね？」

「そうか……………結局、何も役に立てなくてすまなかったな」

俺は意味のない謝罪をリニスに言い、頭を下げた。

リニスはそんな俺を見て少し笑い、

「大丈夫ですよ。祐一が来てから、フェイトは元気になったと思います……だから、何も役に立てなかったなんて言わないでください」

「……………そうか……………それなら救われる……………」

俺がそう言うと、リニスが思い出したように言ってきた。

「あ、私の祐一への願い事を言うのを忘れてましたね」

「ああ。何でも言ってくれ。今更だが、叶えられる願いなら聞こう」

すると、リニスが笑顔で言った。

「フェイト達を守ってあげてください。気持ちが折れてしまわないように、守ってあげてください」

最期まで当然のように、フェイト達のことを気にするのだな……
……リニスは。

「わかった。非才な身ではあるが、俺に出来る限りフェイト達を守ると誓おう」

「安心しました……………これで私はいけます」

リニスは満足したように、笑みを浮かべた。

「あ、それから……………」

リニスが何かを思い出したようにこちらに寄ってきて――

俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

「——んっ……………これは、今までのお礼です」

リニスは唇を離すと、頬を赤く染めこちらを見ていた。

俺はリニスの行為に驚いて声も出せず、恥ずかしさから普段は見せないような表情をしていたと思う。リニスはそんな俺の反応に満足したのか、満面の笑みを浮かべていた。

「……………まさか、最期にこんなサプライズがあるとはな」

「ふふ、私のファーストキスですよ？ 有り難く受け取ってください」

普段の大人びた表情のリニスと違い、普段は見せない、いたずらが成功した子供のような表情をするリニスがとても綺麗で可愛く見えた。

「では、お別れだな、リニス」

「ええ」

俺がそう言うのと、リニスが軽く返事を返してきた。

すると、リニスの周りの光がさらに強くなり、リニスがぼつぼつと話だした。

「辛いときもありましたけど、本当に楽しい時間をもらえて私は幸せでした」

リニスは涙を流しながらも、笑みを崩さずに話し続ける。

「おやすみなさい……………可愛いアルフ、愛しいフェイト……………」

リニスが少し息を吸い、

「さよなら……………私の意地悪で偏屈でちっとも優しくない、私のご主人様」

リニスはバルディツシュの方を向き、

「バルディツシュ、あの娘達をよろしくね？」

バルディツシュがリニスの言葉に答えるように光った。

「そして、最期に——祐一が来てから、フェイト達は本当に楽しそうにっていて、より多くの笑顔を見せるようになりました。もちろん私も楽しかったですし、フェイトの笑顔が増えて嬉しかったです……………本当にありがとうございました」

「……………ああ、俺もここに来てからの一年間はとても充実してい

たし、とても楽しかったよ。俺の方こそ……………礼を言う」

俺がリニスにお礼の言葉を返すと、リニスは笑顔で頷き――

「祐……………フェイト達のことを、よろしくお願いします」

リニスがそう告げたと同時に強い光を放ち、俺が少し瞬きをしたときにはリニスの姿は……………消えていた。

俺は最期のリニスの笑顔を思い浮かべながら、リニスが消えた場所を長い時間、じっと見つめていた。

リニス（後書き）

最期まで読んでくれて、ありがとうございます。

誤字脱字などありましたら、指摘をお願いします。

別れ、そして始まりへ（前書き）

投稿します。

楽しんでもらえれば幸いです。

では、どうぞ。

別れ、そして始まりへ

俺がリニスが消えた場所を無言で見据えていると、人が近づいてくる気配があった。

「……………リニスはいつてしまったのね？」

気配はプレシアさんであった。

「ええ、先ほど……………」

「そう……………」

プレシアさんは表情を読ませないようにするためか、俺の方は見ずにバルディッシュの方に歩いていった。

「これがあの娘の杖……………完成していたのね」

プレシアさんがバルディッシュを手に取りながら呟く。

「こん……………の……………かしら……………」

さらにプレシアさんが小声で何かを呟いたが、俺には上手く聞き取れなかった。

「そうなの？」

「うん、リニスからの贈り物なんだって」

すると、廊下からフェイトとアルフの声が聞こえてきた。どうやら、リニスがアルフに何かフェイトに伝言を頼んでおいたようだった。

フェイト達は誰も部屋にいないと思ったのか、ノックもせずに入ってきた。

「か、母さん……………」
「ごめんなさい」

「祐一？」

フェイトはプレシアさんがいるとは思わなかったようで、すぐに謝っていた。アルフは俺がここにいることに疑問を持っているようであった。

「ん？ 杖？」

アルフがプレシアさんが持っている杖に目がいったのか声を出していた。

そんなアルフには目もくれず、プレシアさんはフェイトを見据え、

「来なさい、フェイト」

「は、はい」

プレシアさんに呼ばれ、フェイトが少し緊張しながらも小走りでプレシアさんに近づく。

俺は傍観に徹することにし、腕を組み二人のやり取りを眺めていた。

「あなたの杖よ……………リニスが残したの……………手に取って」

「は、はい」

フェイトはプレシアさんからバルディッシュを受け取った。

「重い、だけど温かい……………」

「Get set」

フェイトが呟くと、バルディッシュが答えるように明滅していた。

「この子、私に合わせてくれる？」

「リニスが作ったものだもの」

フェイトが少し、驚いた表情で呟くと、プレシアさんがそう答えた。

「バルディッシュ——それがあなたの名前？」

「Device form set up」

「うん。よろしくね、バルディッシュ」

フェイトがバルディッシュを大事そうに抱える。

俺はその光景を見ながら、この二人は良いコンビになりそうだと思うった。

「いいこと、フェイト。その杖でもっと強くなって、あらゆる望みを叶える力をその手になさい……………あなたは私の娘なのだから」

「はい。頑張ります」

プレシアさんの言葉で、フェイトは決意を固めるような表情をしていた。

「祐一くん、フェイトに杖の扱いを教えてあげてくれるかしら？」

「ええ、わかりました」

プレシアさんの問い掛けに答え、フェイトを見ると、こちらを嬉しそうに眺めていた。

「杖の扱いに慣れたら、少しお使いに行ってもらつから……………いいわね？ フェイト？」

「はい！」

フェイトは元気良く返事を返していた。

そして、プレシアさんはそれだけ言つと部屋を出て行つた。

「さて、俺達も部屋に戻るか？」

俺がフェイトとアルフに問いかけると二人は頷いた。

「フェイト……………リニスがお前のために作ってくれたデバイスだ。大事にするんだぞ？」

俺はそう言いながら、フェイトの頭を撫でてやった。フェイトはくすぐったそうにしながらも嬉しそうに頷いていた。

——あれから一週間が経った。

この一週間、俺はプレシアさんに言われた通り、フェイトにデバイスの扱い方を教えてやった。

だが、それももう終わりだろうと感じていた。デバイスをリニスから受け取った時点で、フェイトは一人前の魔導師のレベルに育っている。そのフェイトがデバイスの扱いを覚えるのには、それほど時間を必要とはしなかった。

アルフも俺がフェイトにデバイスの扱いを教えている最中に、魔法の練習を欠かすことは無かった。それもあって、アルフも、もう立派なフェイトの使い魔となっていた。

そして、プレシアさんはリニスがいなくなつてからも研究を続けていた。いや……………むしろ、リニスがいなくなったことによって、前以上に研究に没頭しているようにも感じていた。それに伴い、プレシアさんの容態は日に日に悪化の一途を辿っているように見えた。

やはり、リニスがなくなった穴は大きかった。

フェイトとアルフには、「リニスはフェイトの教育が一段落したから、少し遠くへ出掛けていった」ということになっている。

だが、フェイトもアルフも様子がおかしいことに気付きだしていると思う。

それでもフェイト達は、そのことについて俺にも、ましてやプレシアさんにも聞いてくることはない。おそらく、それを口に出してしまつたら、本当にリニスが帰つてこないことを認めてしまうことになると思つているのだろう。

それでも無常にも時は過ぎていく……………俺もそろそろ、フェイトの教育を終えて、地球に帰ろうと思つている。実際に依頼はほぼ完了しているしな。

フェイトは俺がいなくなると言つたら、どんな顔をするだろうか？ 泣いてしまうのだろうか？ 優しいあの娘のことだ、おそらく泣いてしまうのだろう。

俺がここにいたら、フェイトを守ることが出来るが、それではフェイトが本当の意味での強さを得られないと、俺は思っている。

ここに残るべきかとも考えたが、俺は仕事でここに来ている面もあることから地球に帰る決意をした。

そして、今はその報告をするために、プレシアさんの元に向かっている。

「プレシアさん、祐一です。入ってもいいですか？」

「……………ええ。構わないわ」

俺は扉をノックし、プレシアさんに了承を得たので部屋に足を踏み入れた。

「失礼します」

扉をくぐり部屋を見渡すと、前に来た時よりも物が乱雑に散らかっていた。

プレシアさんは、俺が部屋に入ってきたので作業の手を止めこちらを向いた。プレシアさんは、少し顔色が悪いように見えた。

「何の用かしら？ フェイトの報告？」

「それもありますが、俺からの話もあります」

「いいわ。聞かせてちょうだい」

プレシアさんが俺に報告を促してきた。

「では、まずフェイトのことですが、デバイスの扱いに関して俺が教えることはもうないと思います。後は実戦経験を積んで、レベルアップしていくのが良いかと思います。また、現時点でのフェイトのレベルは管理局の魔導師ランクで言うと、おそらくはA A +程だと思います。ただの魔導師程度ならば、今のフェイトなら一蹴できるでしょう」

プレシアさんは俺の話を静かに聞いていた。

俺はそれを確認し、少し息を吐き話を続けた。

「以上のことから、俺の依頼はこれで完了だと思います。他に何かありますか？」

「いえ、特には無いわ。それで、いつここを出て行くつもり？」

「明日には出て行こうと思っています」

俺がそう言うと、プレシアさんは静かに頷き、

「今までご苦勞様……………あなたが来てくれたおかげで、フェイトが一人前になるのが早くなったわ。ありがとう、祐一くん」

「いえ、結局、俺はあまりたいしたことは教えていませんからね。フェイトの努力の結果だと、俺は思います」

プレシアさんがお礼を言ってきたが、俺は自分のおかげなどではなく、フェイトの努力の結果であることを強調した。

「むしろ、俺がお礼を言いたいくらいですけどね。ここで皆と暮らした一年間はとても有意義なものでした」

俺は笑みを浮かべながらそう言った。

久しぶりに本当に楽しかったと感じた。

まるで、あの時のように楽しい一時を過ごすことが出来た。そう、素直に感じられたのだ。

「……………昔のことを、思い出させてしまったかしら？」

「いえ、気にしないでください。昔は昔、今は今です。そう考えていないと、辛くなるだけですから……………それに」

俺は一度深呼吸してから、

「前を向いて歩いていないと、あいつに怒られますから」

俺は少し笑みを浮かべ、プレシアさんにそう言った。

プレシアさんは俺の心情を察したのか、沈黙していた。

——どのくらい黙っていたのか、俺は沈黙を破りプレシアさ

んに問いかける。

「……………確かに昔を思い出すと今でも辛いです。ですが、今という時間も大切だと俺は思います……………プレシアさん、それを良く考えてからこれからのことを決めてください」

「……………」

プレシアさんは黙ったまま、俺の話を聞いていた。

「すみません、こんな若造が少し言い過ぎました」

「……………ええ、少し言葉が過ぎるわね」

プレシアさんは俺から顔を背け呟いた。

「では、そろそろ行きます。荷物も少しは整理しないとイケないの
で」

「ええ、いろいろと本当にありがとう。また、何かあったらお願い
してもいいかしら？」

「俺は《便利屋》ですからね。依頼ならいつでも引き受けますよ」

「そう……………また、会いましょう」

「はい。では、また」

俺はプレシアさんと挨拶を交わし、プレシアさんの部屋を出て行くのであった。

荷物の整理を終えた俺は、今フェイト達と食堂で料理を食べているところだ。

ちなみに料理を作ったのは俺である。

「やっぱり、祐一の料理はリニスほどおしくないねえ」

「こら、アルフ、祐一がわざわざ料理してくれてるんだから、そんなこと言わないの」

アルフが俺の料理に対してケチをつけ、それを聞いたフェイトがアルフを叱っていた。

俺はそんな二人を見ながら、この後別れを告げなければならないことを考え、少し悲しい気持ちになった。

「？ どうしたの？ 祐一？」

「祐一、ごめんよ、もう祐一の料理を馬鹿にしたりしないからさあ」

俺が少し考え事していると、フェイトが俺の方を不思議そうに見ており、フェイトに叱られてアルフが俺に謝ってきていた。

「まあ俺の料理はリニスには格段に劣るからな」

苦笑しながら言うと、フェイトとアルフは慌てて、「そんなことないよ!」と口々に言い合っていた。

その後も俺達は話を続けながら、夕食を続けた。

片付けをフェイト達と終わらせ、俺は話を切り出した。

「フェイト達に言わなければならないことがあるから、少し聞いてくれるか?」

俺はフェイト達に席に座るよう促し、皆が席に着いたのを確認して話を始めた。

「実はな……………俺は明日、ここを出ようかと思っている」

そう言うと、フェイトとアルフは驚いた顔をして俺を見ていた。

「もうフェイトも一人前の魔導師として、一人でもやっていけるだろう………だから、お前達とも明日でお別れだ」

二人はそんな俺の言葉に驚き、何も言えずに黙っていたが、フェイトが静かに話し始めた。

「で、でも………まだ私、祐一に教えてもらってないことたくさんあるし、それに一人前っていつても祐一にはまだ全然追いついてないし………」

「そ、そうだよ！ そんな急にここからいなくなる必要ないじゃないか！」

黙っていたアルフもフェイトが話し出したことで、俺の言葉に反論してきた。

「急な話ではないんだ、アルフ。正直、前から決めていたことだ。それにフェイト。俺に追いつけるようになるのはまだまだ先のことだ。俺に追いつきたいのなら、もっと実戦経験を積まないといけない」

俺は少し息を吐き、話を続けた。

「それに俺はプレシアさんの依頼で来たんだ。その依頼が達成されたのなら、俺の仕事は完了したことになる………だから、俺はここを出て行くんだ」

「……………」

二人は俺の言葉に黙って俯いていた。

「嫌……………だよ」

そんな沈黙の中、フェイトが少し涙を流しながら話し出した。

「そんなの嫌だよ……………リニスも遠くに行っちゃったし、これで祐一もいなくなったら……………寂しいよ……………」

フェイトが俯き、涙を流しながら俺に語りかけてくる。アルフも悲しい顔でフェイトを見ていた。

俺はフェイトにそんなにも慕われていたことへの嬉しさと、それでも別れなければいけない悲しみがあつた。

俺は席を立ち、フェイトの傍まで行き、フェイトの横で膝立ちになり目線を合わせた。

フェイトがその涙で濡れた顔をこちらに向けてきた。俺はフェイトの涙をそっと拭ってやる。

「泣かないでくれ、フェイト……………何も二度と会えなくなるなんてことはないんだ……………必ずまた会える日がある」

「ほんとに……………また会えるの？」

「ああ、また会えるさ。指切りでもするか？」

俺がそう言いながら右手の小指を差し出すと、フェイトも右手を

出し俺の小指に自分の指を絡ませた。

「これでまた会えるさ」

指を離し、俺はフェイトの頭を優しくなでながらそう言った。

フェイトも完全に満足はしていないが、柔らかい笑みを見せるようにはなっていた。

「さて、もう遅いからそろそろフェイト達は寝ろ」

「うん。わかった。おやすみ、祐一」

「おやすみ、祐一」

フェイトとアルフが挨拶をして、部屋から出て行くのを確認し、俺も休むために自分の部屋へと戻った。

俺がシャワーを浴び、部屋で本を読んでいたら、扉をノックする音が聞こえた。

「フェイトですけど、祐一……………入ってもいいかな？」

「ああ、構わないぞ」

俺の返答を聞き、可愛らしいパジャマに着替えたフェイトが入ってきた。

「どうした？　こんな時間に」

俺はフェイトが来たことに少し驚いていたので聞いてみると、さらにフェイトから驚くことを聞かされた。

「えっと……………あのね？　今日は祐一と一緒に寝てもいいかな？」

「……………は？」

こんな間抜けな返事を返したのは久しぶりだな、と冷静に考えていた。だが、俺と一緒にフェイトが寝るだと？　何故だ？

「理由を聞いてもいいか？」

フェイトは少し頬を赤く染めながら、

「祐一は明日、ここを出て行っちゃうから……………だから、今日だけ長く一緒にいてお話ししようと思ったんだ。駄目……………かな？」

フェイトが少し寂しそうな表情で俺に問いかけてくる。

「なるほど」と俺は少し考えてから、溜息をついた。そんな俺を見ながらフェイトの表情は少しずつ暗くなっていた。

「……………そんな顔をしたら断れないだろ？　それに今日しかないからな……………特別だぞ」

フェイトに「了承」と言うと、さっきまでの暗かった表情は消え、嬉しそうに頷いていた。

そんなフェイトを見て、俺も自然と笑みを浮かべていた。

「さて、俺もそろそろ寝ようと思っていたからな。もう寝るから、フェイトも布団に入れ」

「うん！」

フェイトが布団に入っただのを確認してから、電気を消し、自分も布団に入った。

「しかし、初めてだな。フェイトがこんなことを言うてくるなんて」

「わ、私も普段はこんなこと言わないんだけど、祐一がいなくなるって聞いたから……………」

「そうか……………すまないな」

俺はそう言いながら、フェイトの頭を優しく撫でてやった。

「フェイトは、プレシアさんのことが好きか？」

「え？　うん。好きだけど……………何でそんなこと聞くの？」

俺の質問に首を傾げながらフェイトが聞いてきた。

「いや……………プレシアさんは研究で忙しくて、フェイトのことも放置しているからな。それをフェイトがどう思っているのかが気になっただけだ」

「そうなんだ。確かに、母さんは研究で忙しくて、私のことも全然相手にしてくれないけど……………それでも、私は母さんが大好きだよ」

フェイトは少し恥ずかしそうにしていたが、プレシアさんのことが大好きだと俺に言ってくれた。

「そうか……………その気持ちは大事にするんだぞ？」

「うん、わかった」

その後、フェイトと話をしていたらフェイトは寝てしまっていた。

「ようやく寝たか」

俺もそろそろ寝るかと思っていると、

「……………母さん……………私をちゃんと見てよ……………」

横で寝ているフェイトから小さな呟きが聞こえてきた。

しっかりしてはいるが、フェイトはまだ子供であることに変わりはない。表面上では平気な顔をしてはいるが、内心はとても寂しいのだろう。

俺はフェイトの涙で濡れた頬を拭い、優しく頭を撫でてやった。

「大丈夫だ。プレシアさんは、きっとお前のことを想っているさ」

そう静かに呟くとフェイトは少し安心したのか、小さな寝息を立てている。

フェイトの寝顔を確認し、俺も眠りにつくのであった。

俺は寝ていたフェイトを起こし自分の部屋に返した後、着替えて地球に帰る準備を済ませた。荷物は前日に用意してあったので、今日は着替えて持ち物の確認をするだけで事足りた。

そして、今は俺を見送るために出てきたフェイトとアルフと話をしているところだ。

「じゃあ、元気でね、祐一」

「体に気をつけるんだよ」

「お前は俺の母親か？ アルフ」

ふざけたことを言っているアルフを小突く。

「湿っぱいのは苦手なんだよ」

アルフは照れたように、頬を掻きながら言った。

俺はそんなアルフに苦笑しつつ、フェイトの方を向いた。

「フェイト。俺からプレゼントがあるんだが、受け取ってくれるか？」

「え？ そんなものあるの？」

フェイトが少し驚いている中で、俺は予めポケットに忍ばせていたプレゼントを取り出し、フェイトに渡した。

俺がフェイトにプレゼントしたのは、硝子細工で出来た鳥の形の

ネックレスである。

フェイトは俺からのプレゼントを見て、目を輝かせていた。

「綺麗……………ありがとう、祐一。大事にするよ」

満足のいった答えが聞けたので、俺は頷いた。

「では、そろそろ行くよ」

そう言つと、フェイトとアルフは静かに頷いていた。

「アルフ、フェイトのことを頼むぞ？」

「うん、わかったよ」

「フェイト、あまり無茶ばかりするんじゃないぞ？」

「うん、わかってるよ」

アルフとフェイトの返事に満足し、俺は二人に背を向けて歩き出す。

「祐一！！ また会おうね！！」

フェイトの叫び声を聞き、俺は口元に笑みを浮かべながらそちらを振り返り、

「ああ、また会おう」

そして、俺は転移魔法を使用して、地球へと帰還した。

青年は金色の少女と一時の別れを告げる。

この一年後に新たな物語は始まる。

舞台は第九七管理外世界《地球》、そこで後に「PT事件」と呼ばれる事件が起こる。

そして――《黒衣の騎士》と呼ばれた青年の新たな物語が始まる。

別れ、そして始まりへ（後書き）

最期まで読んで頂いて、ありがとうございます。

やっと、プロローグ編（教育編？）が終わりました。

次からは本編の方に入っていきます……………たぶん。

誤字脱字などがありましたら、ご指摘をお願いします。

interlude | 1・2 (前書き)

本編ではないですが、楽しんでいただけたら幸いです。

では、どうぞ。

interlude | 1・2

side フェイト

祐一が依頼を終えて、いなくなってから半年が経った。

祐一がいなくなつてすぐの頃は、寂しくて泣いちゃう時もあったけど、今では現状の生活にも慣れてきた。

祐一とリニスはいなくなつてしまつたけど、アルフは変わらず私の傍に居てくれて、私が無茶をしそうになったり、した時は助けてくれたし、持ち前の明るさで私を励ましてくれたり、元気にしてくれる。

本当にアルフが、もしいなかったらと思うとゾツとしてしまう。

この半年間は、母さんに時々頼まれるお使いに行くようになっていた。あるときは実験の材料、あるときは書物や文献……そのお使いに行つて帰つてきたときでも、母さんはほとんど口を利いてはくれなかった。

祐一がいなくなつてから、母さんはほとんど部屋から出てくることはなくなつていた。以前からも、ほとんど部屋から出てこなかったのに、それに拍車を掛けて研究に没頭するようになっていた。

実験と研究が行き詰るごとに、母さんは苛立ちや怒りを隠さなくなつて、リニスや祐一がいたときに比べて、私達の家は………なんだか………暗くなつていった。

「なんだよ、もう！　言われた通りの物を探してきたってのに！」

さっき、母さんに頼まれてお使いに行ってきたけど、それが母さんの必要としている物ではなかったみたいで、私は怒られてしまった。

アルフはそんな母さんの理不尽さに怒ってる……………私のために怒ってくれている。

「仕方がないよ。母さんが見たいことが載ってなかったんだから……………」

「だからって！　あんなに怒ることないじゃないか！　あたし達は頼まれただけで、フエイトは何も悪いことしてないんだから！」

いつだってアルフは私の味方でいてくれて、私の心配をしてくれる。

「あゝもう！　こんなときにリニスか祐一がいてくれたら……………
リニスならあの鬼ばばを叱ってくれるだろうし。祐一なら^{たしな}宥めてくれるのにさー！」

「アルフ、汚い言葉を使わないで」

アルフが母さんを悪く言ったので、私は少し語気を強め言った。

「……………へい」

祐一は依頼が達成したから、自分の故郷に戻っただけだけど、リニスは半年経っても戻ってくることはなく、私とアルフはなんとなく、あの日何が起こったか、どうしてリニスがいなくなったのかに気付いたけど、それを口に出すことはしなかった。

《庭園》は祐一とリニスがいたときの場所から移動を始めている……………祐一とリニスと一緒に過ごした場所からの移動は、少し寂しかった。

私は最近、ここを去る前に祐一からもらった鳥の形をしたネックレスをよく眺めるようになっていた。

とても精巧に作られた綺麗なネックレス——そして、私が初めて祐一からもらったプレゼント。

「祐一、今は何してるんだろう………」

「さあ？ 《便利屋》 っていう仕事をしてたから、相変わらずあの仏頂面でいろんな人の頼みごとを解決してるんじゃない？」

私が呟いた言葉にアルフが反応し、笑いながら祐一の話をしている。

そんなアルフの言葉に私は笑みを浮かべた。

「仏頂面は言いすぎだよ、アルフ？ 祐一はああ見えて、結構表情が豊かなんだよ？」

「そうかなあ？」

「そうだよ」

アルフと二人で祐一の話をしながらかつていた。

私が初めて祐一と会ったのは、母さんの依頼で祐一がリニスと一緒に私の教育係りになったときだった。

あの時、私は初めて母さん達以外の人と会うことになって、とても緊張していた。そして、初めて祐一と会ったとき、正直な話、少し怖かった。

祐一はとても大きくて、それに初めて会う男の人だったこともあり、私が何も言えなくなっていたら、祐一は私に視線を合わせてくれて優しく微笑み掛けてくれて握手してくれた。

今でも、そのときの祐一の手の温もりと大きさは忘れられない。

そして、祐一が教育係りとして仕事を始めてくれて、勉強や魔法を教えている最中はとても厳しかったけど、分かりやすく丁寧に教えてくれた。私が上手く出来たときなどは、「良くやったな」と私を優しく撫でて、褒めてくれた。

私は祐一に褒められたり、撫でられたりするのが大好きだった。恥ずかしいときもたまにあるけど、それでも心が温かくなっていくのを感じていた。

だから、私は祐一のようになくて、やっていることを真似したりするようにしていた。祐一が朝からトレーニングをしているのを目撃してから、早起きして祐一と一緒にトレーニングしたり、眺めているのが日課になっていた。

祐一は「まったく……」と、よく溜息をついていたけど、最終的には苦笑しながら許してくれた。

模擬戦も、私は一度も祐一に勝ったことがなかった。それを悔しいと祐一に言ったら、「そんなに簡単に負けられるか」と言いながら私にデコピンしてきたりもした。

祐一はとても強くて、一度だけ、アルフと一緒に戦ったときだけは勝てると思ったけど、それでも祐一には届かなかった。それだけ

じゃなくて、祐一はこちらにいる間、デバイスを全く使用しなかった。それは私がまだ、祐一と戦うにはデバイスなしで十分と判断されたようでとても悔しかった。私はいつか必ず、祐一と並び立てるような立派な魔導師になりたいと思っている。

まだ、半年しか経っていないのに、祐一がいたのがもうずいぶんと昔のことのように感じていた。

祐一が来てからの一年間はとても楽しくて、大切な時間だったんだなと最近とても感じるようになった。

母さんは研究を続けており、これからもお使いなどが増えていくんだと思う。

確かに今は、研究が忙しくて全然私に構ってはくれないけど、きっとそれが終われば、また昔の優しい母さんに戻ってくれるはずなんだ。

祐一、リニス、私、頑張るから………祐一やリニスが自慢出来るくらいに頑張るから。

「だから、応援しててね？ 祐一、リニス」

私は祐一からもらった、ネックレスを見ながらそう呟いた。

s
i
d
e

o
u
t

このときの少女はまだ何も知らなかった。

自分が今後、大きな出来事に遭遇することになるとは。

《黒衣の青年》を想う少女は何も知らなかった――

interlude 1・2（後書き）

最後まで、読んでいただいております。

誤字脱字などありましたら、ご指摘をお願いします。

主人公設定1（前書き）

掲載しようか迷ったんですが、主人公の設定を載せておこうと思います。

話が進むにつれて、追加していきたいと思います。

主人公設定1

名前

黒沢くろさわ
祐一ゆういち

年齢

18才（無印編開始時）

性別

男

身長

185cm

体重

80kg

容姿

ウィザーズ・ブレインの黒沢祐一

性格

怒ることはほとんどなく基本的に温厚

ただし、怒るときは怒る

昔から寡黙で冷静沈着であり、あまり感情を表に出さない

魔術術式

???

魔力光

赤

魔力変換資質

炎熱

稀少能力^{レアスキル}

【自己領域】

自分の周囲の空間を「自分にとって都合のいい時間や重力が支配する空間」に改変する能力

魔力量

Aクラス

デバイス

???

人物説明

この作品の主人公

過去に何をしていたかは今のところ不明。現在は地球で《便利屋》を営んでいる

プレシアとは昔の知り合いで、その関係でフェイトの教育係りを行うことになった

魔力量はAクラスとさほど多くはないが、戦闘技術、戦術の面で他を圧倒する力を有しており、デバイスなし状態で、フェイト（デバイスなし）とアルフの二人を相手にし、勝利することが可能

また、意外に世話焼きでもあり、比較的女性に甘い

主人公設定1（後書き）

ありがとうございます。

誤字、脱字などあれば指摘をお願いします。

新たな出会い、始まりの序章（前書き）

お盆休みのため、更新が大幅に遅れました。

久しぶりの更新です。

では、どうぞ。

新たなる出会い、始まりの序章

Side 三人称

第九七管理外世界《地球》

—— 海鳴市内墓所 ——

この晴天の中、墓所を一人の青年が歩いていった。

青年は誰かの墓に向かっている最中なのか、右手には活けるための花が、左手にはバケツと柄杓ひしゃくが持たれていた。

青年は墓参りということもあつてか、全身が黒を基調とした格好となっており、掛けているサングラスが太陽の光を反射していた。身長は一八五cmを越す長身であり、無駄なものなどない引き締まった体躯をしている。

ただ一つ、全身黒一色である中で、赤い剣を模したネックレスが一つのアクセントとなっており、青年が歩みを進める度にそれが揺れていた。

青年——黒沢祐一は目当ての墓まで来ると、手馴れた手付きで墓の掃除を始めた。

祐一は墓の周りを綺麗に掃除し、持ってきた花を活け、バケツに汲んできた水を柄杓で掬い墓に掛け、最後に線香に火を着けた。

墓の手入れが終わると、祐一は墓の前に立ち、掛けていたサングラスをはずして胸ポケットにしまい、手を合わせて目を瞑った。

そして、しばらく経った後、祐一は目を開いた。

「去年は墓参りに来れなくて、すまなかったな」

祐一は申し訳なさそうにしながら、誰かに話しかけるように喋りだした。

「急な依頼が入ってな？ 一年間、地球とは違う場所に行ってたんだ。その依頼人なんだが……俺達がお世話になったプレシアさんだったんだ。覚えてるか？」

祐一は少し懐かしそうにしながら、ゆっくりと話す。

「そこでアリシアとは違うんだが、母親が大好きで、綺麗で長い金の髪の女の子と会ってな？ その娘の名前は『フェイト・テストロツサ』と言って、依頼内容がその女の子を一人前の魔導師に育てることだったんだ」

そこで少し間を置き、祐一は話を続けた。

「その娘はとても魔導師としての才能があつてな、たったの一年で俺が教えることはなくなってしまったよ——そのうち、俺なんかよりも強くなるだろうな」

そう自嘲気味に祐一は話すと、少し息を吐いた。

「……………さて、そろそろ俺は帰るよ」

祐一はそう言うと、胸ポケットに閉まっていたサングラスを掛けた墓前に背を向けた。

「じゃあ、また来年来るよ……………雪」

祐一はそう呟くと歩き出した。

墓の名前にはこう刻まれていた——《七瀬家》と——

side out

フェイトの教育が終わり、地球に帰ってきてから一年が過ぎた。

俺はあれから特に変わったことなく、いたって平穏な生活をしていた。あれからも俺がメインで行っている仕事である便利屋稼業も順調である。

……ただ、少し気掛かりであるのは、プレシアさん達のことだ。あれから何も連絡を取っていないので、あちらがどういう状況なのかもわかっていない状態であった。

「皆、無理をしていなければいいんだがな……………」

そう口に出しながら、皆のことを考える。

アルフはドッグフードばかり食べていないだろうか？ ……………
まあ、ほとんど犬のようだから構わないが。ちゃんとフェイトを支えてやっているんだろうか？

プレシアさんは研究漬けの日々を送っていないだろうか？ 少しはフェイトとの距離を縮めているんだろうか？

そして、最後に——フェイトは無理をせずにやっているんだろうか？ おそらく母親であるプレシアさんのために頑張っているのだろうが、無茶はしていないだろうか？

俺は少し頭を振り、考えても仕方のないことだと思い、思考を止めた。

そして、俺がしばらく道を歩いていると、

「祐一お兄さん！！」

「ん？ この声は……………」

俺が思考を止め、家へと歩みを進めていると、後ろから女の子の声が聞こえてきた。振り返ると、少し離れた所に、見知った三人の小学生ぐらいの女の子が並んで歩いていた。

「こんにちは。祐一お兄さん」

「こんにちは。祐一さん」

「こ、こんにちは。祐一さん」

「ああ、こんにちは。三人共、学校の帰りか？」

俺は三人が制服であつたのを確認して、聞いてみた。

「うん。今から三人で塾に行くところなの。祐一お兄さんはどこに行ってたの？」

俺の質問に三人を代表して答えてくれたのが、亜麻色の髪を耳より上の位置で左右ともにリボンで結び、ツインテールにしている女の子で名前を《高町たかまちなのは》と言う。

なのはとは俺が《便利屋》を開業して間もないころに会って、その頃からなのはが懐いてくれるようになり、それをきっかけに《高町家》とも懇意にさせてもらっている。便利屋稼業が上手くいっていなかった時にはとてもお世話になってしまった。

「そうか。俺は少し墓参りに行ってたんだ」

「そうなんですか。全く、なのはったら祐一さんの姿を見つけるなり走り出すんだから……………」

「ふふ。なのはちゃん、祐一さんを見つけたらとても嬉しそうだったもんね？」

俺がなのはの質問に答えていると、なのはをからかうように少し笑いながら話しているのが、少し気が強そうな感じの女の子で、少しウェーブが掛かった長い金髪が特徴的な女の子が《アリサ・バニングス》、笑いながらアリサと同じように話しているのが、アリサとは逆に少し気が弱そうな感じの女の子で、長い紫髪の女の子が《月村つきむら すすか》と言う。

アリサとすすかの二人は《便利屋》の仕事絡みで知り合いになった。

三人共性格や見た目は違えど、同じ年頃の女の子と比べても、可愛い女の子達であると俺は思っている。

「ふええ！？　な、何てこと言うの！　すずかちゃん！　アリサちゃん！」

なのはが顔を真っ赤にしながら、両手を伸ばし、ブンブンと風を切るぐらいの勢いで上下に振りながら二人に言っていた。

「二人とも、あんまりなのはをからかってくれるなよ？」

俺は苦笑しながら言うと、二人とも笑いながらではあるが、「はあゝい」と返事をしてくれた。そんな二人を見ながら、なのはは未だに顔を赤くして唸っていた。

それからしばらく四人で世間話をした後、三人は塾に行く途中だったので、塾に向かうことにした。俺も三人の付き添いというわけではないが、道も同じだったこともあり、塾の前まで着いていくことにした。

俺は三人が仲良く話しながら前を歩いている少し後ろを歩きながら、なのは達が振ってくる質問に答えながら公園を歩いていた。

しばらく歩いていると、アリサが思い出したように俺に話しかけてきた。

「そうだ！ 祐一さん聞いてくれます？ 今日の授業で言われたことなんですけど、自分が将来やりたい仕事ことについて聞かれたんですけど、なのはがやりたい仕事ことが決まってないからって、自分のことを過小評価するんですよ！」

「過小評価？ そうなのか、なのは？」

アリサの質問に対し、俺はなのはに真意を聞いてみた。

「だ、だって、なのは文系苦手だし、体育も苦手だし……………そう考えると特技や取柄とりえも特に無いのかなって思ってた」

なのはは、バツが悪そうに頬を掻きながら苦笑していた。

「それに、私はアリサちゃんやすずかちゃんみたいに、将来やりたい仕事ことっていうのもまだ見つかってないし……………」

「……………確かに将来やりたい仕事ことを見つけるのは重要なことだが、そんなに焦って見つける必要もないだろう。そういうものはそのうち見つかるし、なのはにしか出来ないことがきつとあるさ」

俺がそう言うと、少し不安そうにしているなのはの頭をポンポンと、優しく叩いてやった。

励ましが効いたのか、なのはは笑顔を見せ、「うん！」と頷いた。そんななのはを見ながら、アリサはやれやれという感じで首を振りながら、すずかは嬉しそうに笑っていた。

しばらく歩いていると、アリサがＴ字路に差し掛かったところで、皆に話しかけてきた。

「あ、こっちこっち！　ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

アリサが指を指した方向を見ると、そこは木が生い茂っており、少し道がでこぼこしていた。

「え、そうなの？」

「ちょっと道悪いけどね」

さすがが少し不安そうにしていたが、アリサが先導して歩いていたので皆でアリサに付いて行くことにした。

皆で歩いていると、なのはが周りをきよろきよろ見ながら歩き、急に立ち止まった。

「？　どうしたんだ、なのは？」

「どうしたの？」

「なのは？」

俺に続き、なのはが立ち止まったことに気付いた、すずかとアリ

サも不思議そうになのはを見ていた。

「あ、ううん！ なんでもない！ ごめん、ごめん」

「大丈夫？」

「じゃあ、行こう」

なのはは少し首を振り、小走りで前を歩いていた二人に追いついた。二人はそんなのはを見ながら、しきりに首を傾げていたが歩き出した。

またしばらく歩いていると、俺は微量ながら魔力の反応を感じた。ここまで、反応がなかったということはその魔力の主が、かなり弱っているということなのだろう。

（どうする？ 流石に放置したままは後味が悪すぎるが……………）

俺がその魔力の主をどうするかと思考していると、

『助けて』

頭の中に直接響いてくる声が聞こえてきた。どうやら、念話に反応してくれる人に直接助けを求めているようだ。

（これはまずい状況になったな。近くにいるのが俺だけならいざ知

らず、今は俺の他にもう一人、念話が聞こえる人物がいる」

俺がそう考えていると、思っていた通り、念話が聞こえる人物が足を止めていた。

「なのは？」

アリサが足を止めた人物——高町なのはに声をかけた。

「今、何か聞こえなかった？」

「何か？」

なのはがそう言ったが、すずかはわからないようで、少し首を傾げていた。

「何か、声みたいなの………」

「別に………」

「聞こえなかったかな？」

なのはの答えに対し、アリサとすずかは困惑の表情を浮かべていた。

「祐一お兄さんも何も聞こえなかった？」

「………いや、何も聞こえなかったが？」

なのはに嘘をつくのは躊躇ためらわれたが、聞こえていないフリをした。

なのは達があたりをきよろきよろと見回していると、

『助けて！』

今度はさらに大きな声で聞こえてきた。

「っ！？」

「なのは！？」

「なのはちゃん！？」

なのはは声がした方向へと駆け出した。それに驚いたアリサとすずかが名前を呼ぶが、聞こえていないのか向こうの方へ走っていった。

「二人とも、とりあえずなのはを追うぞ」

「わかりました！」

「あ、は、はい！」

俺がそう言うと、二人ともなのはを追って駆け出したので、俺も二人の後を着いて行った。

俺達がなのはを見つけたら、なのはは地面に座り込み、動物を大事そうに抱えていた。

「どうしたのよ、なのは！ 急に走り出して」

「あ！ 見て、動物？ 怪我してるみたい」

「あ、う、うん。どうしよう？」

なのはを発見したアリサが理由を聞くために詰め寄るが、さすが、なのはが大事そうに抱えている動物を発見し、その動物が怪我をしていたこともあり心配した顔で眺めている。

「とりあえず、怪我をしているから獣医さんに見てもらった方がいいだろうな」

「そ、そうだね！ この近くに獣医さんってあったっけ？」

俺がそう進めると、なのはが思い出したように言ってきた。

俺達がいっしょにいる中で、なのはが抱えている動物——フ
エレット（？）が俺達を見回していた。

「この辺で一番近いのは、確か《榎原動物病院》があったはずだ。
そこに連れて行くぞ。ある程度の場所は記憶しているから、着いて
来い」

「う、うん！ わかった！ 急ごう！」

なのはの返事を聞いてから、俺は病院の場所に向かって歩き出した。
た。

三人が着いて来ているのを確認してから、俺は速度を上げた。

俺達は《まきはら榎原動物病院》に着いた後、この動物病院の院長である
《あい榎原 愛》さんに治療をお願いした。院長の腕が良かったため、
比較的早くに治療が完了した。

「怪我はそんなに深くはないけど、ずいぶん衰弱してるみたいね？
きっと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな？」

「院長先生ありがとうございます！」

「「ありがとうございます！」」

院長がフェレット（？）の治療を終えて、容態を説明すると、な
のは達が院長にお礼を言っていた。

「榎原先生、お忙しい中、ありがとうございます」

俺も院長にお礼を言い、頭を下げた。

「いいえ、どういたしまして」

そんな俺達を見ながら、院長は優しく笑みを浮かべていた。

なのは達は治療が終わったフェレットを見ていた。

「先生、これってフェレットですよ？　どこかのペットなんでしょうか？」

「フェレット……………なのかな？　変わった種類だけど、それにこの首輪に付いてるのは、宝石なのかな？」

アリサが院長に確認しているが、院長にもわからない様子で、院長が首輪に付いている宝石に手を伸ばしたら、フェレットが起き上がった。

「あ、起きた」

「あら？」

さすがにフェレットが起きたことが嬉しかったのか、目をきらきらさせながら見ていた。院長もフェレットが起きたことに驚いていた。

（あの首輪に付いている宝石……………まさか、デバイスか？）

俺がそう考えていると、フェレットはこの状況に驚いたのか、回りをきよろきよろと見回していた。

俺とも少し目を合わせた後、すぐに目を離した。

だが、なのはと目が合うとフェレットはなのはのことをじっと見つめていた。おそらく、なのはから感じる魔力に反応しているのだ

ろう。俺は今魔力を魔法で隠匿しているので、じかに触れられない限り魔導師だということはばれないだろう。

「見てる？」

「なのは、見られてる」

さすがが不思議そうに言い、アリサがなのはにそう告げていた。

「あ、うん。えっと………えっと」

なのはが戸惑うようにフェレットにおずおずと、指を伸ばしていくと、フェレットは少しなのはの指の匂いを嗅いだ後、少しだけなのはの指を舐めた。

フェレットに指を舐められたのが嬉しかったのか、なのははとても喜んでいたが、フェレットはその動作で体力の限界だったのか、そのまま倒れるように眠ってしまった。

「しばらく安静にしたほうがよさそうだから、とりあえず明日まで預かっておこうか？」

院長がそう言うのと、三人は嬉しそうに顔を見合わせ、

「……はい！　お願いしま〜す！……」

声を合わせてお礼を言っていた。

（とりあえず、今日のところは様子見だな……………明日、また様子を見に来るか）

俺がそう考えていると、

「あ、やば！ 塾の時間！」

「あ、ほんとだ！」

「じゃあ、院長先生、すみません！ また明日来ます！」

アリサが塾のことを思い出したのか、焦りながら言うと、すずかも時間を確認して同じように焦っていた。なのは、院長に明日来ることを伝えて、二人と一緒に病院を出て行った。

「じゃあ、槇原先生、後はよろしくお願いします」

「はいはい、わかりましたよ」

俺が院長にそう言うと、笑顔で手を振りつつそう返してくれた。それを確認して、俺も早足で三人の後を追った。

それから急いで、皆で塾に向かい、ぎりぎり開講時間には間に合ったようだった。

「じゃあな、三人共勉強頑張れよ？」

「うん！ じゃあね、祐一お兄さん！」

「さようなら、祐一さん！」

「付き添いありがとうございました！」

俺の言葉に三人共笑顔で返事し、塾に入ってしまった。

三人の姿が見えなくなったのを確認し、俺は家へと歩みを進めた。

「しかし、あのフェレット……………どうしたものか。今のところ害はないようだ……………とりあえず明日、確認しに行ってみるか」

俺はそう一人で呟きながら、歩くスピードを速めた。

このときの俺は、まさかこの出会いが大きな事件への序章だと知る由も無かった。

この日の夜、俺は魔法少女の誕生を目撃するのであった。

新たなる出会い、始まりの序章（後書き）

最後まで、読んでくれてありがとうございます。

誤字脱字があれば指摘をお願いします。

頑張って早めに投稿していきたいと思います。

魔法少女誕生（前書き）

更新しました。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

では、どうぞ。

魔法少女誕生

なのは達を塾に送った後、俺はそのまま帰宅した。

そして、俺が自宅で趣味の一つである読書を楽しんでいる時――
――頭の中に直接響くように、少年のような声が聞こえてきた。

『聞こえますか？ ……僕の声が聞こえますか？』

聞こえてきた声の主は、昼間に聞いた声と同一人物であり、おそらくあのフレットだろう。

「明日までは動けないかとも思っていたが、どうやら何か焦っているようだな」

俺が現在の状況を分析していると、続けて声が聞こえてきた。

『聞いてください……僕の声が聞こえるあなた。お願いします！ 僕に少しだけ力を貸してください！』

声は懇願するように響いている。

『お願い！ 僕のところへ！ 時間が……危険が……もう……』

すると、念話もするほど魔力が無くなったのか、声が聞こえなくなつた。

時間？ 危険？ あのフェレットは何をしようとしているんだ？

誰でもいいから助けてくれとは………それほどまでに状況が切迫しているということか？

「どうやら俺が思っているよりも、状況が芳しくないようだな」

俺はそう言い、少し息を吐き考える。

おそらく、この時間に寝ていなければ、なのはにはこの声が聞こえてしまっている。人一倍正義感の強い、あの娘のことだ。おそらく、困っている人を見過ごすことなどできないだろう。そしてきつと、声が聞こえる場所に向かってしまっただろうな。

「なのはが絡んでしまう可能性がある以上、あまり長く傍観しているわけにもいかないようだな」

俺は黒いジャケットに腕を通し、急いで家を後にした。

side 高町なのは

私は声が聞こえなくなってからすぐに、寝間着だったのを着替えて声が聞こえた方向——あのフェレットを預けた動物病院の方へ走っていた。

「はぁ……はぁ……」

動物病院に着いたので、足を止め、息を整えながら動物病院に足を踏み入れようとすると——先ほどと同じように、頭に直接響いてくる何かを感じた。

「うつ……また……この音……」

私は頭に直接響いてくる何かに冷や汗を掻きながらも、頭を押さえ、目を瞑り少しの痛みに耐えた。

そして、頭の痛さがなくなったので私が目を開くと、

「グルルル………」

この辺り一体の感じが変化していて、しかも動物病院の方から何か獣の呻き声のようなものが聞こえてきた。

私は病院の中にいるであろうフェレットのことが心配になったの

で、中に入ろうと急いだんだけど——私の横を今、探しているフェレットが横切った。

「あれは!?!」

私が声を上げ、フェレットの方を見ると、その後ろをすごい速さで突っ込んでいく黒い魔物がいた。

そして、その黒い魔物はそのままフェレットに突進するように木に突っ込んだ。

「あ!?!」

フェレットは黒い魔物の突進を上手く避けたけど、突進してきたその余波でフェレットは宙に舞い上がっていた。

宙に舞い上がっていたフェレットが私の声に気付き、こちらを見た。それを見て、私が腕を広げるとフェレットはこちらに向かって飛んできた。

「きゃ!?!」

私は尻餅をついたけど、なんとかフェレットを優しく受け止めることに成功した。

「なに、なに!?! いったい、なに!?!」

さっきまではフェレットを助けることに集中していて声を上げる暇なんてなかったけど、私は動揺から大きな声を上げてしまった。木の方を見ると、大きな黒い魔物が壁に突っ込んで動けないのかも

がいていた。

そして、私がそちらを見て驚いている状況をさらに驚かされることになった。

「来て……くれたの？」

あれ？ フェレットが私の方を向いて、何か言ったように聞こえたんだけど………って、

「しゃ、喋った!？」

私は最初は驚いたが、現在は驚いている場合ではないと思い、深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「っ!！」

そうこうしている間に、黒い魔物の目がこちらを向いてきたので、私はフェレットを抱いたまま逃げ出した。

私はフェレットを抱いたまま病院の敷地を出て、今は走って逃げている。

「そ、その、なにがなんだかよくわかんないけど、一体なんなの？
なにが起きてるの!？」

フェレットが喋れるというのは驚きだけど、私は聞かずにはいられなかったので、焦りながら質問というか状況を聞いた。

「君には資質がある……お願い、僕に少しだけ力を貸して!!」

「し、資質？」

私は何かなんとか分からなかったので、そのまま聞いた。

「僕はある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では想いを遂げられないかもしれない………だから、迷惑だと分かっているんですが、資質を持った人に協力してほしいくて……」

フェレットは私の腕の中から降りて、さらに話を続けた。

「お礼はします！ 必ずします！ 僕の持っている力を、あなたに使ってほしいんです…… 僕の力を魔法の力を！」

「ま、魔法？」

フェレットがそう言うてきたけど、私には何かなんとかわからずに呆けた顔をして、また聞き返してしまった。

すると、先ほどの黒い魔物が空から襲い掛かってるのが見えた。

「っ!？」

私は間一髪のところ、フェレットを抱え電柱に隠れることで、黒い魔物の攻撃をやり過ごした。

「お礼は必ずしますから！」

「お、お礼とかそんな場合じゃないでしょ！？」

フェレットがそう言うてくるけど、今はそれどころじゃないと思
った。私が黒い魔物を確認すると、攻撃の勢いが強すぎたのか地面
にめり込んでいた。

「ど、どうすればいいの！？」

私が悲鳴を上げるように言うと、

「これを！」

フェレットが首輪に付いていた赤い宝石を口に咥えて渡してきた
ので、私はそれを手に取った。

「温かい……」

「それを手に、目を閉じ、心を澄ませて、僕の言つとおりに繰り返
して」

私はわけがわからなかったけど、フェレットの言つとおりにする
ことにした。

「いい？　いくよ……」

「……うん」

フェレットは私が頷くのを確認すると、言葉を紡ぎだした――

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「ええと、契約のもと、その力を解き放て」

私は自分が握り締めている赤い宝石が脈動しているのを感じた。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

さらに宝石が脈動する――

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

そして、私達の声が重なった――

「この胸に！」

「この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by ready set up』

すると、私が掲げて持っている宝石から桃色の光が立ち上った。

「なんて、魔力だ……」

フェレットが何かを呟いているが、私はそれどころではなかった。

「ふえ〜！ どうすればいいの!？」

「落ち着いてイメージして！ 君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！ そして、君の身を守る強い衣服の姿を！」

「そ、そんな……急に言われても……えっと……えっと」

急に言われて困ったけど、私は脳内で杖と衣服をイメージした。

「とりあえずこれで！」

すると、私が次に目を開けたらイメージしていた衣服を着ており、手にはこれまた、自分がイメージした杖が握られていた。

「成功だ」

「え？ え!？ 嘘!？ほんとにいろいろ変わってる!？」

私は未だに状況が飲み込めずにオロオロしてしまっていた。

しかし、私がオロオロしていると、黒い魔物がこちらを向いていた。私は怖くなって、思わず後ずさりしてしまい、壁に背を預ける

形となつてしまった。

「これなに！？　どういう状況！？」

「来ます！！」

この状況のわけのわからなさに声を上げていると、黒い魔物がこちらに襲い掛かってきた。

「きゃ！」

私は目を瞑り、両手を交差し、来るべき衝撃に身を硬くした。

しかし、いつまでたってもその衝撃はやってこなかった。

その代わりに聞こえてきたのは、私が良く知っている男の人の声だった。

「全く……………どういう状況だ？　これは」

私が目を開けると、そこには全身を黒い服で身を包んだ長身の男性が私の前に立ち、右手を黒い魔物の方に突き出しており、その手には黒い魔物を通さないように障壁のようなものが張られていた。

「あ……………」

私が驚き、その男性を見つめっていると、

「どうやら無事なようだな、なのは」

その男性——祐一お兄さんは右手はそのまま、こちらを見ながら少しほっとした表情をしていた。

私は祐一お兄さんを見て、少し泣きそうになってしまった。

（祐一お兄さんはいつもそうだ……………いつも、私が困ったら手を差し伸べてくれるし、何かに迷ってるときも背中を押してくれる）

私は涙を拭き、祐一お兄さんに笑顔を見せると、祐一お兄さんも笑ってくれた。

「さて、まずはこいつをどうにかしないと……………そのフェレット」

「は、はい！」

「こいつを封印するんだろ？ 悪いが今の俺では封印は出来ん。なのはに頼むのは個人的には気が引けるが、今はそれしか方法がない。

俺はこいつを抑えておくから、お前はなのはに封印の仕方を教えてやってくれるか？」

祐一お兄さんが呆けていたフェレットに声を掛け、私に封印の仕方を教えてくれと頼んでいた。

「わ、わかりました！」

「よし。出来るか、なのは？」

私の気持ちは決まっている——祐一お兄さんがいてくれるなら、何でも出来る気がするから。

「うん！ やってみる！」

「よし。では、頼むぞ？」

祐一お兄さんは私の返事に微笑み、黒い魔物の方を向いた。

私も出来ることをしなくちゃ！

「で、どうすればいいの？」

「はい、攻撃や防御の基本魔法は心に念じるだけで使用出来ますが、より大きな力を必要とする魔法は呪文が必要なんです」

「呪文？」

「心を澄ませて。心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

私は目を瞑り心を澄ませた。

（私の呪文……………）

そうしていると、私の頭の中に自然と呪文が浮かんできた。

「うん。いける！　これなら……………祐一お兄さん！」

私は黒い魔物を抑えている祐一お兄さんに声を掛けた。

すると、祐一お兄さんはわかったとばかりに黒い魔物から距離を取り、

「フレイムケージ」

そう呟くと、黒い魔物の周りから炎が噴出し、まるでその炎が獣を捕まえる檻のように黒い魔物を捕らえた。

「やれ。なのは」

私は頷き呪文を唱える。

「リリカルマジカル」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！！」

『Sealing mode set up』

すると、杖の形状が変化した。

『Stand by ready』

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル???……封印!」

『Sealing』

私が叫ぶと、杖から桃色の光が発射され、黒い魔物に直撃した。

そして、黒い魔物は消え去り、後に残ったのは綺麗な青い宝石だけになった。

「これが、さっき言っていた《ジュエルシード》か?」

近づいてきた祐一お兄さんがフェレットに聞いていた。

「そうです。これが《ジュエルシード》です。レイジングハートで触れて」

「こ、こっつ」

私が杖を近づけると、ジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれた。

『No.???』

ジュエルシードを封印すると、私の格好も私服に戻り、レイジングハートも小さな宝石に戻った。

「終わったの？」

「のようだな」

私が呟くと、祐一お兄さんが横でふうと、息を吐いていた。

「あなた方のおかげで無事に封印できました。ありがとうございます……
ごさい………ます」

「ちょ、ちょっと大丈夫！？　ねえ！」

フレットは疲れが限界になったのか、安心したら倒れてしまった。息はしているので、死んではないようだったのだほっとした。

「なのは、とりあえず、この場は逃げたほうがいいかもしれんぞ？」

「え？　なんで？」

「周りをよく見てみる」

そう言われ、周りを見渡してみると、先ほどの戦闘（というか、黒い魔物が暴れたおかげ）でコンクリートに穴が開いていたり、電柱が倒れ、電線が切れていたりという事になっていた。

「もしかして、私、ここにいたら大変あれなのでは？」

「まあ、間違いなく警察沙汰だな……サイレンの音も聞こえているし」

私が冷や汗を掻いていると、祐一お兄さんがしれっと言ってきた。

「とりあえず……ごめんなさい！」

私はフェレットを抱え、そう言いながら走って逃げ、祐一お兄さんはやれやれといった感じで溜息を吐きながら、私の横を悠々と付いてきたのだった。

s i d e o u t

俺達は騒ぎが大きくなる前に公園へと移動した。

「はぁ、はぁ」

俺の横には、走って疲れたなのはがベンチに座っていた。その膝の上には、この状況の原因であるフェレットが乗せられていた。

（なのはは運動は全般的に得意ではないからな）

そんなことを考えていると、

「すみません」

さきほどの騒ぎで気がついたのか、フェレットが起きていた。

「あ、起こしちゃった？ ごめんね、乱暴で……怪我、痛くない？」

「怪我は平気です。ほとんど治ってるから」

フェレットはそう言うと、包帯をはずして体をなのはに見せていた。

「あ、ほんとだ。怪我がなくなってる」

「あなた方が助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」

「よくわかんないけど、そうなんだ……ねえ、自己紹介していい？」

「あ、うん」

なのはが少し偉そうに胸を張り、自己紹介を始めた。

「えへん……私、高町なのは。小学校三年生、家族とか仲良しの友達なのはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

笑顔で自己紹介するなのはに、フェレットも笑顔(?)で答えていた。

「ユーノくんか可愛い名前だね」

俺が黙って二人の自己紹介を眺めていると、なのはが俺の方を見て言ってきた。

「ほら、祐一お兄さんも自己紹介しないと」

俺は少し息を吐き、自己紹介した。

「俺の名前は黒沢祐一だ。名前は好きに呼んでくれて構わん」

「あ、ユーノ・スクライアです。助けてくれて、ありがとうございます」

「構わん。なのはも危なかったからな。そのついでに助けたようなものだ」

そう言つと、「それでも、ありがとうございます」と言ってきた。この少年、案外しっかり者のようだな。

俺が少年——ユーノの評価をしていると、ユーノがなのはに頭を下げた。

「？」

「すみません……………あなたを……………」

なのはは始めはキョトンとしていたが、ユーノがそう言つと笑顔でユーノを抱え上げ、

「なのはだよ」

「……なのはさんを巻き込んでしまいました」

「あ、その……たぶん、私平気！」

ユーノの苦しそうな表情を見て、なのはは笑顔でそう言った。

（まあ、概ね俺が予想していた展開だな。なのはは優しい娘だからな）

俺は笑顔のはのはの頭に手を載せて、二回ほどポンポンと軽く叩いてやった。

すると、なのはは俺の行動に始めは驚いていたが、すぐに笑顔になった。

「さて、今日はもう遅い。そろそろ帰ったほうがいいと思うぞ？」

「あ！ そうだね。ユーノくんも怪我してるんだし、私の家にいこう。後のことはそれから」

俺の言葉に、なのはは同意すると、俺達は高町家に向かった。

そして、俺達は高町家に着いたが、玄関前にはなのはの兄である
《高町 恭也》たかまち きょうやさんと姉の《高町 美由希》たかまち みゆきさんがなのはの帰りを

待っていた。

その後、恭也さんに「こんな時間まで何をしていたんだ？」と聞かれたが、俺がなんとか話を誤魔化して事なきを得た。

恭也さんは怪しそうな目で俺を見ていたが、それは無視することにした。美由希さんも何やら笑顔でこちらを見ていたが、これも同じく無視した。

夜も遅かったので俺は帰ることを伝え、美由希さんに「晩御飯、食べていかない？」と聞かれたが、今回は断らせてもらった。

そして、なのは達に「また、明日な」と告げ、俺は高町家を後にした。

こうして、怒涛のような一日が終わりを告げた。

ユーノと出会い、なのはが魔導師となったこの日から、また新たな物語が始まるうとしていた。

魔法少女誕生（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

誤字脱字がありましたら指摘をお願いします。

やるべきこと（前書き）

投稿します。

ほんのりとオリジナルな展開になってきたかも（？）しれません。

では、どうぞ。

やるべきこと

—— 数日後

俺はいつもの早朝の鍛錬を行った後、俺は本を読みながらこれらのことを考えていた。

まだ、きちんと説明は聞いていないが、おそらくユーノは《ジュエル・シード》を集めるために地球に来たのだろう。おそらくは昨日回収した物だけで、終わりということはないはずだ。その《ジュエル・シード》があまりにも危険な物ならば、俺も回収を手伝おうと思っている。

ただ問題なのは、昨晚、紆余曲折から魔導師となってしまった俺のはの存在だ。

おそらく、なのはの性格から考えて、ユーノのことを手伝おうとするのは目に見えている。

無理にでも止めさせるか？ いや……なのははあれで、意外と頑固な性格をしている。止めると言っても、余計に首を突っ込んでくる可能性が高い。そうになると、素人のなのはがさらに危険な目に会う確率が高くなってしまふ。ならば、いつそのこと魔導師としてユーノの手伝いをさせてみる方が得策か？

俺がそんなことを考えていると、ユーノから念話が聞こえてきた。

『祐一さん、なのは、聞こえてますか？』

『うん。聞こえてるよ？ 祐一お兄さんも聞こえてる？』

『ああ。聞こえてるぞ？』

『じゃあ、まずはジュエル・シードについて説明するね』

ユーノの説明をまとめると、《ジュエル・シード》とは、ユーノの世界——つまり、魔法世界で見つけた物らしい。

それは本来、手にした者の願いを叶える魔法の石だが、力の発現が不安定であり、それにより、昨晚のように単体で暴走し、使用者を求めて周囲に危害を加える可能性がある。さらに、たまたま《ジュエル・シード》を見つけた人や動物が間違って使用してしまつて、それを取り込んで暴走することもあるそうだ。

『そんな危ない物が何で家のご近所にあるの？』

なのはがそう質問すると、ユーノは少し黙り、

『僕のせいなんだ……』

苦しそうに言った。

ユーノは故郷で遺跡発掘の仕事をしているそうだ。

そしてある日、古い遺跡の中で《ジュエル・シード》を発見した。

そして、それを運んでいた時空間船が事故か何らかの人為的災害に合い、全部で二一個ある《ジュエル・シード》がこの地球に散らばってしまったらしい。

『今までに見つかったのは、たった二つ……』

『あと、十九個かあ』

二人が残りの《ジュエル・シード》の数に溜息をつく。

『……ユーノ、これは俺の意見なのだが、話を聞く限りではジュエル・シードが散らばった件はお前のせいではないのではないか？』

『あ、確かに……ユーノくん全然関係ないんじゃないの？』

『そうかもしれません……ですけど、あれを見つけてしまったのは僕だから……全部見つけて、あるべき場所に返さないと駄目だから』

ユーノの返答になるほど、と俺は思ったと同時に少し溜息を吐いてしまった。

『なのはも祐一さんも巻き込んだじゃって、本当に申し訳ないと思ってる。だから、一週間……いや、五日もあれば僕の魔力も戻るから、その間だけ休ませて欲しいんだ』

ユーノの言葉に俺は黙って耳を傾けていた。

『戻ったら、どうするの？』

なのはが穏やかな口調でユーノに質問した。

『……また一人でジュエル・シードを探しに出るよ』

『……それは駄目』

『だ、駄目って……』

ユーノの言葉をなのはがぱつぱつと切って捨てた。

ユーノはなのはの言葉に動揺しているようだが、俺はなのはの言葉を聞き、笑みを濃くした。

『私、学校や塾の時間以外なら手伝えるから……』

『だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ?』

ユーノが心配そうになのはに言った。

その言葉を聞くと、なのはは笑いながら答えた。

『ふふ。だって、もう私はユーノさんと知り合っちゃったし、話も聞いちゃったし、ほっとけないよ』

『なのは……』

『それにユーノくん、一人ぼっちで頑張ってたんでしょ? 一人ぼっちが辛いのはよくわかるから……それは悲しいことだよ』

ユーノはなのはの言葉を黙って、静かに聞いていた。

『困っている人がいて、その人を助ける力が自分にあるなら、迷わずにその力を使えって……これ、家のお父さんの教え』

なのははさらに話を続けた。

『ユーノくんが困ってて、私はユーノくんの力になってあげられる魔法の力があるんだよね？』

『……うん』

『私、ちゃんと魔法使いになれるかあんまり自信ないんだけど』

『いや、なのははもう魔法使いだし、僕なんかよりもとても素晴らしい才能を秘めているよ』

『え、そうなの？ 自分ではあんまりわかんないから……祐一お兄さんもそう思ってるの？』

『ああ。なのはは魔導師として、素晴らしい才能を秘めていると俺も感じている』

俺がそう言うと、なのはは「にやはは」と、照れているのかそんな言葉を口にしていた。

『とにかく！ ユーノくに祐一お兄さん、私に魔法のことかいろいろ教えて？ 私、ユーノくんのお手伝い頑張るから！』

『うん……ありがとう』

『ああ、わかったよ。俺も出来る限りサポート出来るように努力しよう』

俺がそう言うと、「ありがとう！ 祐一お兄さん！」と、なのはが元気いっぱいに答えた。

そして、三人で話をしていると、「あ！」っとなのはが急に声を上げた。

『どうしたの？ なのは？』

『なんだか、展開が急すぎて忘れてたんだけど……祐一お兄さんも魔導師なんだよね？』

『ああ、そうだ。地球では隠していたが……俺はれっきとした魔導師だな』

俺がそう言うと、「全然、知らなかったよ」と、なのはが驚いていた。

『祐一さんはこの地球出身ですよ？ いつから魔法が使えるようになったんですか？』

『俺が本格的に魔法を覚えていったのは、確か俺が小学校六年生ぐらいのときだったな……いろいろあって、魔導師を目指したんだよ』

二人が声をそろえて、「へえ〜」と言っていた。

俺が魔導師になったときのことを、二人に話していると、魔力の反応があった。

『っ！？ ユーノくん……祐一お兄さん……今のって』

『ああ。おそらく、新しいジュエル・シードが発動しているな……
反応は近いが、どうする？』

俺がそう質問すると、ユーノが答えた。

『向かいましょう！ 二人とも手伝って！』

『うん！ わかった！』

『了解した』

俺はそう言った後、《ジュエル・シード》が発動した場所に向かった。

俺が現地に到着すると、なのはとユーノがおそらく、現地の犬が《ジュエル・シード》を取り込んだと思われる黒い大きな犬（以下、魔物と呼ぶ）と対峙しており、その中間に、その犬の飼い主だと思われる女性が倒れていた。

俺は二人と連絡を取るため、再び念話を送った。

『なのは、ユーノ、聞こえるか？』

『はい。聞こえます！』

『祐一お兄さん？ どこにいるの？』

『俺は今、上空からお前達を見ている。いいか、なのは？ 俺は倒れている人を助ける。だから、お前はユーノと一緒にジュエル・シードを封印しろ』

『う、うん。でも……だ、大丈夫かな？』

なのはが不安そうに答える。

『大丈夫だ、なのは。俺が付いているし、ユーノが傍にいてサポートしてくれる。自信を持って……さもないければ、ジュエル・シードを集めることなど出来ないぞ？』

俺がそう言うと、なのはは深呼吸をした。

『うん。大丈夫！ やってみる！』

俺は返事を聞くと、

『よし。では、いくぞ』

開始の合図を出した。

「自己領域展開」

俺は自分のスキルである【自己領域】を展開した。その瞬間、周りの全てのものの動きが遅くなり、俺は倒れている女性の下へと移動した。

そして、女性の近くへ降り立つと、瞬時に【自己領域】の展開を止めた。

「え！？ いつの間に!？」

なのは達が驚いているが、俺はそれを無視し、女性を抱え上げ、

「ソニックムーブ」

瞬時に害を及ぼさない場所まで移動した。

女性を寝かせ、なのは達の方を見ると、魔物がなのはに突っ込んでいくところであった。すると、なのはが持っていたのだらう、レイジングハートが光出し、その手に杖が握られていた。

（ほう。パスワードもなしにデバイスを起動したか）

俺が少し驚いていると、一瞬、光で動揺していた魔物が、そのままなのはに向かって突進していった。だが、間一髪でなのははバリアジャケットを展開しており、全くのノーダメージだった。

すると、再度、魔物がなのはに突進していった。だが、最早、バリアジャケットを展開し、防御力が上がってしまったなのはにはそ

の攻撃は無意味だった。

『Protection』

なのはがレイジングハートを突き出すと防御魔法を張り、軽々と魔物を吹き飛ばした。

（あの魔物の攻撃を全くのノーダメージか……やはり、なのはは素晴らしい才能の持ち主のようだな）

俺がそう考えていると、決着が付こうとしていた。

『Stand by ready』

「リリカルマジカル、ジュエル・シードシリアル？？？……封印！
！」

『Sealing』

なのはとレイジングハートがそう言うと、ジュエル・シードの封印が完了した。

「ふう〜これでいいのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに」

ユーノがそう言うと、なのはは嬉しそうに笑っていた。

「やるじゃないか、なのは」

「あ、祐一お兄さん！ えへへ、ありがとう！」

俺はなのはに近づき、褒めながら頭を撫でてやった。なのはは俺に笑顔を向け、少し頬を赤く染めていた。

その後、女性と《ジュエル・シード》で変化していた犬を見送り、俺達は帰路についた。

なのはを家まで送り、俺が家に帰宅すると、

「ん？ 手紙か？ ……………このやり取りには覚えがあるような気がするが」

ポストを確認していたら、手紙が入っていた。

そして、その手紙から微かな魔力を感じた。

「まさか……………」

俺は手紙の封を解き、中身を取り出し、差出人の名前を確認した。

そこにはこう書かれてあった――

差出人《プレシア・テストロッサ》と――

なのはの魔導師としての初めての作業が幕を閉じたと同時に――

俺は新たな問題に直面したのだ
た

やるべきこと（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございます。

楽しんでいただけたなら幸いです。

誤字脱字などありましたら指摘をお願いします。

なのはの決意、プレシアの気持ち（前書き）

更新します。

少々、オリジナル展開ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。
では、どうぞ。

なのはの決意、プレシアの気持ち

なのはが魔導師になり、ジュエル・シードを集めるようになってから一週間が経った。

元からの強大な魔力量の恩恵もあってか、なのはが現在まで集めたジュエル・シードの数は五つとなっていた。

だが、まだまだ素人であるので、先ほど携帯でなのはから「ユーノくんと相談したのですが、今日のジュエル・シード集めはお休みにします。祐一お兄さんもしっかり休んでね!」というメールが届いた。おそらく、連日のジュエル・シード探しで体力がなくなってしまったのだろう。

メールの続きを読むと、どうやら今日はアリサやすずかとの約束もあるようだ。

俺は「了解したよ。皆で楽しんでくるといい」という文面を打ち、メールを送信した。

なのは達がジュエル・シード集めをしないのなら、俺も他のことが出来ると、内心でそんなことを考えていた。

ジュエル・シードの問題とは別に、俺の方で新たな問題が起ころうな兆しが——いや、もう起こっているであろう問題がある。

俺は机の方へと移動し、封を解かれた手紙を手取る。

差出人——《プレシア・テストロッサ》——

俺の昔の知り合いで、少なからず俺の過去を知っている人物であり、一年前に娘の教育を俺に依頼してきた人物である。

このような直接の手紙のやり取りは、一年前にプレシアさんの娘——《フェイト・テストロッサ》の教育を依頼されて以来の連絡となる。

俺は約一年ぶりのプレシアさんからの手紙を嬉しく感じたと同時に、急なプレシアさんからの連絡に違和感も感じていた。

手紙には簡単にこう書かれていた。

久しぶりね、祐一くん。あれから元気にしてるかしら？

今回はお願いしたいことがあって、連絡をさせてもらったわ

今回は依頼ではなくお願いよ

手紙で話せる内容ではないから、直接会って話がしたいわ

もし、話を聞く気があるのなら、《時の庭園》まで来てちょうだい
前回と同じように、今回も来てくれることを願ってるわ

プレシア・テスト

ロッサ

俺はプレシアさんからの手紙に再度目を通し、少し息を吐いた。

また、プレシアさんが何かを考えているようだが………一体、
何を考えているんだ？

一年前に会ったプレシアさんは、一人娘であり、事故で死んでしまった《アリシア・テストロッサ》を甦らせるため、研究を死に物狂いで行っていた。

おそらく、それに関係のある話だと思うのだが——他にも何かあるのだろうか？

「まあ、結局、行かないという選択肢は俺にはないんだがな」

俺は自嘲気味に笑みを浮かべた。

そして、いつものジャケットに腕を通した。

「さて……では、プレシアさんの今の気持ちと目的を聞きに行くか……判断はそれからだ」

全て後手に回っているな……と、思いながら俺は《時の庭園》へと向かうのであった。

俺は約一年ぶりに《時の庭園》にやってきた。

「ここに来るのも一年ぶりか……フェイト達は元気にやっているのだろうか」

前回、ここに来たときはいろいろなことがあった。

フェイトとの初めての出会い、リニスとアルフとの出会い、プレシアさんとの再会とその目的。

ここで一年間過ごしてきたことは俺にとって、とても有意義で楽しい時間であった。

それでも、最後には別れがあり、リニスが役目を終えて消えた。

そして、俺も依頼を終えて帰らなくてはなくなり、フェイト達に別れを告げた。

「あの時のフェイトの泣き顔は未だに忘れられない」

俺が別れを告げたとき、フェイトは「行かないで……」と言いな
がら、ポロポロと涙を零しながら泣いていた。

最初に会ったときの印象では物静かな娘かと思っていたが、一緒に暮らして教育をしていくうちに、とても感受性が豊かな娘であるということがわかった。

そして、とても心優しい少女であるということも——そのフェイトと別れて約一年——

「もし会ったらどのような反応を見せてくれるのだろうか」

俺は少し顔に笑みを浮かべながら、プレシアさんの元へと足を向けた。

勝手知ったる我が家というわけではないが、迷うこともなくプレシアさんの部屋に着いた。

出掛けているのか、屋敷内にフェイトとアルフの気配はない。

俺は少し扉の前で逡巡し、意を決して扉をノックした。

「祐一です……プレシアさん、入ってもいいですか？」

「……ええ、入ってちょうだい」

「失礼します」

扉を開け、中に入るとプレシアさんが椅子に座って待っていた。俺はそのままプレシアさんの対面まで移動し挨拶を交わす。

「お久しぶりです、プレシアさん。今度は一年ぶりですか？」

「ええ、そうね。久しぶりね、祐一くん。変わりはなくて？」

プレシアさんと挨拶を交わしながら、俺はプレシアさんを観察していた。

前回のときよりも、さらに体調が悪そうに見え、少しやつれているのではないかと感じた。

「体調が悪そうに見えますが、大丈夫なんですか？」

「……そのことも含めて、祐一くんに話があったから呼んだのよ。悪かったけどね」

そう言いながら、プレシアさんは自嘲的な笑みを浮かべた。

「まずは私の体調から話さないといけないわね……」

プレシアさんはそう言うと、自分の体のことについて話してくれた。

「正直なところね……私の命はもうすぐ尽きるわ。実を言うとね、アリシアが死んでしまったあの事故から少しづつだけれど症状は出ているのよ。それでも、私はアリシアを甦らせるために研究を止めることが出来なかった。そして、現在の私の調子の悪さは、その研究を行い続けてきた代償というわけよ」

何でもないことのようにプレシアさんは言った。

「……医者には行ったのですか？ ミッドチルダあたりの技術力なら、治せないことはないんじゃないですか？」

「行っただけ……でも、治る見込みはないそうよ。もう少し早く医者の診てもらっていれば、また違う結果になったのかもしれないけれどね」

「……………」

プレシアさんの言葉を聞き、「ああ、やはりか」とも思っている自分がいた。一年前もプレシアさんは倒れていたではないか。

何を驚くことがある……と、俺の頭は冷静に思考していた。仕方のないことだと、自分にやれることなど何もなかったと——俺はそう考えていた。

それが——

その自分の考え方が——

腹が立つ――

長い時間黙っていたのか、それとも一瞬の思考だったのか、俺はいつのまにか組んでいた両手が真っ赤になるぐらいに力を入れていた。

すると、プレシアさんが言った。

「ありがとう、祐一くん」

俺は頭を上げプレシアさんを見た。

「……なぜ、俺に礼など言うのですか？　俺はあなた達の役には何も立っていない……なのに……」

「いいえ、それは違うわ。一年前に私の依頼を受けてこちらに来てから、祐一くんはとてもよくやってくれたわ。それに……」

そこで、プレシアさんは少し息を吸い、こう言った。

「フェイト達があなたと一緒にいるとあんなに笑顔になるんですもの」

あのプレシアさんがフェイト達のことを言いながら笑っていた。

「だから、自信を持ちなさい……黒沢祐一」

「……ありがとうございます」

俺はプレシアに頭を下げながら、その言葉を噛み締めていた。

「……今から話すことは祐一くんにしか手伝ってもらえないと思ってる。でも、もし私の話を聞いて手伝えないと判断したらいつでも断ってちょうだい」

プレシアさんの言葉に俺は無言で頷いた。

そんな俺を見てから、プレシアさんは話を始めた。

「さきほども言った通り、私はもう少しで死んでしまう……けど、ただ死ぬわけにはいかないの……私にはやらなければならないことがあるから」

俺は黙ってプレシアさんの話を聞いていた。

「まず一つ目は、忘れられし都《アルハザード》を目指すために必

要な、《ジュエル・シード》という青い宝石を集めること」

俺はその言葉を聞き、表情を変えた。

「ジュエル・シードですか？ 地球に散らばっていると聞きました
が」

「そうよ？ よく知ってるわね？」

「ええ。そのジュエル・シードを回収にきた少年と会って、その時に話を聞いたんですよ」

俺がそう言つと、「なるほど」とプレシアさんは呟いた。

「ジュエル・シードは、すでにフェイトに頼んでいるから、祐くんにはフェイトのサポートをお願い」

「……わかりました」

俺が少し苦い顔をしていると、プレシアさんが言ってきた。

「祐くんはあくまでサポートだから、基本的には見てるだけでいいわ。例えジュエル・シードが相手に取られても無視して構わない」

「？ 何故です？ ジュエル・シードが必要ではないのですか？」

プレシアさんの言い方が気になったので質問した。

「確かにジュエル・シードはいくつかは必要だけど、全……必要ないわけではないわ」

俺が未だに困惑していると、プレシアさんは話を続けた。

「そして、二つ目……まあ、これで私の願いは終わりなのだけれど……」

プレシアさんは長く沈黙し——二つ目の願いとその方法を俺に語った——

俺はプレシアさんの二つ目の願いを聞き、驚愕を隠せなかった。

「……そうですか、それがプレシアさんの願いだったんですね。ですが、それではプレシアさんが……」

プレシアさんを見ながら俺はそう呟く。

「いいのよ、祐一くん。どうせ私は長く生きられない……だから、この方法が一番だと、私は思ったのよ」

プレシアさんは笑いながらそう言った。

「私は確かに、最初はその娘をただの道具としか見てはいなかった……だけど、祐一くんが来てリニスにもいろいろ言われて……そして、祐一さんとリニスがいなくなってからこの一年間でわかったわ」

プレシアさんはそこで一度話を止め、俺に向かってこう言った。

「あの娘——フェイトも私の大事な娘なんだ………とね」

俺はプレシアさんのその言葉を聞き、不覚にも涙を流してしまいそうになってしまった。

リニスよ………見ているか？ 二人はやはり親子だったよ………お前がプレシアさんに言ったことは無駄ではなかったんだ。

プレシアさんは不器用で、その願いとそれに至るための方法も完璧ではないかもしれない………だが、それでも二人はお互いを想って

いたんだ。

「だから、私は悪役を演じ続けなければいけない。フェイトには辛い想いをさせてしまいかもしれないけれど……これが私の最善だと思うから」

プレシアさんの決意を聞き、俺はしばらく黙っていた。

本当に最善の方法なのか？ まだまだ、他にも方法があるんじゃないのか？

だが、プレシアさんの方法が最善でないにしても、その決意を無^む碍^げにすることは俺には出来ない。

ならば、プレシアさんがそれを望むのなら、俺はその方法に従い出来ることをやるだけだ。

「わかりました。本当にその方法が最善かはわかりませんが、俺もプレシアさんの手伝いを出来る限りはしたいと思います」

「ありがとう………祐一くん」

そう言つと、プレシアさんは笑みを浮かべていた。

俺はプレシアさんと今後のことについて対策をした後、地球に戻ると、もう日が傾きかけている時間であった。

そして、俺が海鳴に帰ってきて見たものは………破壊された町並みであつた。

「どうしたんだ……？　まさか、ジュエル・シードが発動してしまつたのか？　この規模の破壊だと……発動元は人間か……」

俺はそのまま、破壊された町並みを歩きながら怪我人などがいな
いかを探して歩いた。

だが、幸いにも死人が出る最悪の事態にはならなかつたようだ。

（大事には至らなかつたようだが……なのはは大丈夫だったろうか？）

俺はそんなことを考えながら、うろつろと歩いていた。

そして、俺の家の近くまで帰つてくると——なのはがいた。
そして、その傍にはユーノもいた。

おそらく、俺と同じように街の様子を見ていたのだろう。なのは
の表情は、とても悲しそうであつた。

「なのは」

「あ……祐一お兄さん……」

俺が名前を呼ぶと、いつもの元気がなく覇気のない声で答えた。

俺はそんなのはに近づき話かけた。

「俺がこちらにいない間にジュエル・シードが発動してしまったのか？」

「……うん……」

なのはは今回のジュエル・シードの発動の経緯を俺に説明してくれた。

また、何故なのはがそこまで悲しそうな表情をしているのかも話してくれた。

「そうか。そんなことがあったのか」

俺は顎に手を当てながら言った。

「僕が何を言っても聞いてくれなくて……」

ユーノもなのはの隣で頭を垂れながら言った。ユーノも責任を感じているのだろう。

（だが、これは良い機会かもしれんな……）

俺は内心でそんなことを考えがらなのはに言った。

「ふむ……じゃあ、ジュエル・シード集めは止めるか？」

「え……？」

俺はそう言うと、なのはは困惑したように俺を見上げた。

「別にジュエル・シードを回収することならば俺でも出来る。ユーノも手伝ってくれるだろうし、少なくともなのはよりは俺の方が経験も豊富だ。ユーノが一人で集めるよりは早く集められるだろう」

「で、でも……」

「総合的に見ても俺とユーノだけで集めても問題はないだろう……そういう視点から見たら、そこまでの必要ではないということだ」

なのはが何か言おうとしたがそれを遮り、一気に言った。俺の言葉を聞き、なのははその瞳に涙を浮かべ少し俯いた。

（こういう所は昔から変わらないな）

俺は少し苦笑した。

「ただ……」

「え……？」

「それはあくまで俺の言い分だ。だからあえて問おう。なのは、お前は……どうしたい？」

side 高町なのは

「総合的に見ても俺とユーノだけで集めても問題はないだろう……
そういう視点から見たら、そこまでなのは必要ではないということ
とだ」

祐一お兄さんにジュエル・シード集めを止めるかと言われた。

また、ジュエル・シード集めでは私は必要ではないと言われて愕
然としてしまった……。

私が誰かの役に立てることが、祐一お兄さんやユーノくんのお手
伝いが出ることが嬉しかった……だが、現実には上手いかなかった。
た。

結局、私は誰の役にも立てないの？ ……そんな自分が悔しくて、
私は俯き涙を堪えていた。

すると、祐一お兄さんが「だが……」と話を続けた。

「それはあくまで俺の言い分だ。だからあえて問おう。なのは、お
前はどうしたい？」

私は俯いていた顔を上げ、少し驚きながら祐一お兄さんに言った。

「え？ 祐一お兄さんは私にジュエル・シード集めを止めろって言

ってるんじゃないの……？」

「俺は止めるとは一言も言っていない。俺はあくまでなのは意思を尊重するつもりだ」

祐一お兄さんは少し息を吐き、さらに言った。

「だから、言っているんだ。なのは、お前は……どうしたい？ ユーノの手伝いが出来ればいいのか？」

「わ、私は……」

祐一お兄さんはあくまで、私に考えさせて全てを自分で決めさせるつもりなんだ……決して、強制させることなく自分の意思で……。

(そういえば、昔から祐一お兄さんはこんな感じだった気がするな)

思えば出会ったときから、祐一お兄さんはこんな感じだった。

普段は背が高く、ちょっと怖いけど優しいお兄さん。だけど、私が困っていたり、悩みを抱えていたら助言などはしてくれる。

でも、最後は自分で決めろという感じがほとんどだった。

(そつだ……だから私は……)

私は自分の考えを決め、決意の灯った瞳で祐一お兄さんを見上げた。祐一お兄さんも私を見ており、その漆黒の瞳が私を捉えていた。

「自分のせいで周りの人に迷惑を掛けることはとても辛いから……

だから私はユーノくんのお手伝いをしようと思ったの……」

私は少し息を吸い、

「でも……今回、魔法使いになって初めての失敗をして思った……自分なりの精一杯じゃなく、本当の全力で……ユーノくんのお手伝いではなく、自分の意思でジュエル・シード集めをしようって……」

祐一お兄さんから目を逸らさず言った。

「だから、私は魔法使いを止めない！　もう絶対、こんなことにならないようにって思ったから……！」

私が言い切った後も祐一お兄さんはしばらく何も話さず、じっと私を見ていた。

すると、さっきまで無表情だった祐一お兄さんが笑顔になり、大きな手で私の頭を力強く撫でた。

「そうだ。それでいい……俺はお前の気持ちが聞きたかったんだ。その気持ちを忘れるな？」

「ん……」

私が祐一お兄さんに撫でられながら目を細めていると、

「その自分の意思は大事にするんだぞ？ 今回の失敗も忘れずに次の糧にしたらいい。それでも、自分の力が足りないときは……俺やユーノを頼るといい」

ぼんぽんと、私の頭を優しく叩くと祐一お兄さんは手を離れた。

「ユーノもなのはのサポートを頼むぞ。今日のように俺がいないときでも対処できるようにいろいろと助けてやってくれ」

「わかりました。祐一さん」

「ああ……さて、暗くなってきたからそろそろ帰るぞ。送っていいこう」

私は「うん！」と、頷くと祐一お兄さんの横に並び歩き出した。ユーノくんも私の横を歩いている。

「祐一お兄さん……ありがとね？」

「俺は何もしてはいない……なのはが自分の意思で決めたことだ」

「それでも……だよ？ 祐一お兄さんがそう言ってくれたから、私は自分の意思で決めることが出来たんだ」

そう言つと、「そうか……」と祐一お兄さんは言った。

私は祐一お兄さんの変わらない返事に笑みを浮かた。

ふと見ると、横を歩いている祐一お兄さんの手が空いていたので、私は祐一お兄さんの大きな手をぎゅっと握った。

祐一お兄さんは少し驚いた表情をした後、困ったような笑みを浮かべたが、私の手を振り払うことはなく、そのままにしてくれた。

それが私は嬉しくて、祐一お兄さんの手をさらにぎゅっと握り、顔に笑みを浮かべながら帰路についた。

握った祐一お兄さんの手の温もりが、私にはとても心地よかった。

s i d e o u t

母親は覚悟を決め――

少女は自分の意思を示した――

そして、青年はこれからどのように未来を変えていくのか――

なのはの決意、プレシアの気持ち（後書き）

やってしまった感じがいなめませんが……。

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

誤字脱字などありましたら、指摘をお願いします。

再会（前書き）

投稿します。

楽しんでいただけたら幸いです。

では、どうぞ。

再会

プレシアさんの気持ちとなのはの決意を聞いてから何日か経ったある日——俺はいつもの黒ずくめの格好ではなく、ラフな私服で目的地である月村家へと歩みを進めていた。

俺が月村家へ向かっている理由は、昨日、アリサから連絡があり、「明日、すずかの家でお茶会をするので祐一さんも来て下さい」と誘われたからだ。

だが、俺としては行ってもどうしたらいいのかわからなかったのだ。「俺が行かなくても三人で楽しんだらいいんじゃないか？」と言ったところ、「祐一さんが来たら、なのはが喜びますし、私も久しぶりに祐一さんとお話したいですから！」と言われてしまったので、俺はアリサに押し切られる形となり、参加を余儀なくされてしまったのだ。

「昔からそうだが、俺は女性の尻に敷かれすぎではないだろうか……いや、敷かれてはいないのか……？」

はあと俺は溜め息をつき、ゆっくりと月村家へと向かっていった。

「相変わらず大きな家……いや、屋敷だな」

月村家に着き、俺は一人で呟きながら玄関のインターホンを押した。すると、すぐにメイドの格好をした女性が扉を開けて現れた。

「いらっしやいませ、祐一様」

メイド服の女性――《ノエル・K・エアリヒカイト》が笑顔で挨拶してくれた。

「おじゃまするよ、ノエル」

俺もそう挨拶を返した。

ノエルはこの月村家のメイド長で、クールな容貌の綺麗な大人の女性だ。

「皆様、すでにいらっしやってますよ。祐一様も、どうぞこちらへ」

「ああ、ありがとう」

俺が礼を言うと、「いえ、これが仕事ですから」と笑顔で案内してくれた。

少し歩き、ノエルが案内してくれた部屋ではなのは達が座って談笑していた。

恭也さんも来ているとのことだったが姿が見えない。どうやら、忍さんと一緒に別の部屋で仲良くやっているのだろっ。

忍さんとは、ここの家の主である《月村 忍》^{つきむら いのぶ}のことで、俺もすずか経由ではあるが少しだけ面識のある人だ。

「すずかお嬢様、祐一様がいらっしやいました」

「お邪魔するよ、すずか」

「あ、祐一さん。いらっしやい」

「来てくれて良かったです」

「あ、あれ？　なんで祐一お兄さんがここに……？」

ノエルが声を掛けると、皆が挨拶を交わしてきた。ただ、なのはだけが俺が来るということを聞いていなかったようで、目を丸くしてこちらを見ていた。

「祐一様、お飲み物をお持ちしますので何にいたしましょう？」

「冷たいお茶でも頼むよ」

「かしこまりました」

ノエルはそう言うと、一礼すると部屋を出て行った。

「それで、何で祐一お兄さんがすずかちゃんのお家に来たの？」

「ふふん。それは、あたしが祐一さんと呼んだからよ！」

なのはがそう聞いてきたが、何故かアリサが偉そうに胸を張り威張っていた。

俺はそれを見ながら、はあと溜め息つきながら空いている椅子に腰掛けた。

「まあ聞いている通りアリサに呼ばれて来た……何故、呼ばれたかは不明だが……」

「そ、そうなんだ。駄目だよ、アリサちゃん。祐一お兄さんに無理言っちゃ」

「ふふん。なによ、なのは……祐一さんが来て嬉しいくせに……」

「にゃ！？　そ、そんなことないもん！！」

「ふふ」

なのはがそう嗜めるが、アリサは意に介さず口元に手を当てながら笑みを浮かべなのはをからかっていた。すずかはそんな二人のやり取りを笑顔で眺めている。

俺はそんな三人のやり取りを苦笑しながら眺めていた。

「相変わらず仲がいいな、お前達は」

「そうですか？」

「ああ」

すずかが俺の方を向き小首を傾げたが、俺が頷くと嬉しそうにしていた。

そんな感じで、アリサがなのはをからかったり、皆で世間話をしている、アリサがふいに真剣な顔をして話を始めた。

「今日は元気そうね？　なのは」

「え……？」

「なのはちゃん、最近、少し元気がなかったみたいだから……」

どうやらアリサとすずかはなのはが最近、元気がないのに気付いてたから心配してこのお茶会を開いたようだ……なのはは本当に良い友人に恵まれているな。

「もし、何か心配事があるなら話してくれないかなって……二人で話してたんだ」

「すずかちゃん……アリサちゃん……」

なのはは驚きと喜びがない交ぜになった表情をして、二人を交互に見つめていた。アリサも少し照れくさそうに、だがその目は心配するようになのはを見つめていた。

そんな感動のシーンを静かに見ていると、

「きゅーーーーー……！」

「……………」

俺が少しその声にイラッとしていると、見覚えのあるフェレットが一匹の猫とドッグファイト真っ最中であつた。

(……居たのか、ユーノ)

俺がそんなことを思っていると、

「お待たせいたしました〜イチゴミルクティーとクリームチーズクッキーとお茶をお持ちしました〜」

間が悪く、ノエルの妹である《ファリン・K・エアリヒカイト》がお盆にお菓子と飲み物を載せ運んできたところだった。

そして、その足元をユーノと猫がぐるぐると走り回り、

「わわ!?! わわわ!?!」

ふむ……このままではファリンが転んでしまうか。

ユーノと猫が足元を走り回っていることと、元来少しドジなところがあるファリンが動揺して転んでしまうのは目に見えていた。

「ゆ、ユーノくん!?!」

「アイ!?! 駄目だよ!?!」

なのはとすずかの二人が呼びかけるが、二匹は止まることはなく、

「きゅ〜」

ファリンが目を回し、後ろに倒れそうになっていた。

「ファリン！ あぶない！？」

「わわ！？」

慌ててなのはとずかの二人が駆け寄ろうとするが、俺は二人よりも早く移動しファリンの背後に回り、ファリンの手から離れたお盆を右手に持ち、倒れそうになったファリンを左腕で受け止めた。

「はぁ。全く、危なくて見ていられん」

俺がそうばやいていると、なのは達が歓声を上げた。

「よかった」

「さっすが祐一さん！」

「ありがとうございます、祐一さん！」

なのは、アリサ、ずずかがほつと安堵していた。

「はわわ〜！？ 祐一さん、ごめんなさ〜い！〜！」

目を覚ましたファリンが大きな声で俺に謝ってきた。

「今度からは気をつけろよ」

「はい〜ごめんなさい〜」

俺は再度、溜め息をついた。

この後、ファリンがノエルさんに説教されたのは言うまでもない。

一波乱（？）あつたが、その後、庭に出てお茶会をしながら、なのは達との会話に花を咲かせていた——その時だった。

（ん？ この魔力反応は……）

俺はこの近辺で魔力の反応を感じ取った。

『なのは、ユーノ』

『うん、すぐ近くだ』

『僕も感じました』

俺が念話で話すと、なのはとユーノも魔力の反応を感じ取りすぐに返事をした。

『どうしよっ？』

『さてな……流石にアリサとすずかにばれるわけにもいかないからな』

俺となのはが対応に悩んでいると、

『そうだ！』

ユーノが何かを思いついたのか、一人で森の中へ駆けていった。

なるほど……そういうことか。

なのはもユーノの意図に気付いたようだ。

「あれ？ ユーノ、どうしたの？」

「うん。何か見つけたのかも……ちょっと探してくるね！」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫、すぐに戻ってくるから待っててね」

なのははすずかにそう言うと、ユーノを追っていった。

『二人で大丈夫か？』

『うん、大丈夫！ 祐一お兄さんは何かあったときのために待機し
といて！』

『……そうか、無理はするな？』

『うん！ ありがとう！』

俺はなのはの返事を聞くと念話を終了した。

おそらく、あの二人ならジュエル・シードを集めるだけならば問題ないだろう。

そう考えながら、俺は残っていたお茶を飲み干した。

side 高町なのは

ジュエル・シードの反応があつたので、そこに向かったのですが……私とユーノくんは困ってます……。

「あ、あれは……？」

「た、たぶん、あの猫の大きくなりたいっていう願いが正確に叶えられたんじゃないかな……？」

そつかと、私は呟き、ジュエル・シードを取り込んでしまった、大きな猫を見た。

「にゃん」

「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さない」と

「そ、そうだね。流石にあのサイズだと、すずかちゃんも困っちゃうだろうし」

ユーノくんの言葉に返事をする。

「襲ってくる様子はなさそうだし、ささっと封印しよ……レイジンググハート……っ!？」

私がレイジンググハートを出して、準備をしようとしていた――
―そのとき、

私達の後方から金色の何かが猫に目掛けて放たれていた。

「にゃおーん!？」

猫はその攻撃にびっくりしたのか、表情を少しだけ歪めて、たたらを踏んでいた。

「っ!？」

私は金色の何かが放たれた方向を見た——するとそこには、金色の長髪をツインテールにし、黒を基調とした服に赤黒のマントを付けた、私と同じ年くらいの女の子が少し離れた電柱の上に立っていた。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃……」

その光景に驚いていると、その女の子が自身が持っている杖の先端を猫に向け、続けて魔法で猫に対して攻撃を開始した。

「な！？ 魔法の光……そんな……」

「っ！！ レイジングハート、お願い！！」

ユーノくんが驚いているが、このままではいけないと思い、レイジングハートに告げた。

『Stand by ready set up』

私はバリアジャケットを纏うと、すぐに猫の前に飛び出し、

「っ！！」

『Wide area protection』

私は猫を守るように広域防御魔法を張り、相手の攻撃をなんとか防ぐ。

「……魔導師？」

相手の女の子が飛び出してきた私に少し驚きつつも、私が防御出来ない範囲の猫の足元を狙って攻撃を繰り返してきた。

「にゃおくん!？」

「わわ……!？」

その攻撃で猫が倒れてしまった。

私はそれを気にしつつも相手から目を離さずに杖を構えた。相手も近づいて、木の枝に降り立った。

(な、なんなの……? この女の子……)

困惑していると、

「同系の魔導師……ロストログアの探索者か……」

その子が静かに呟いた。

「間違いない。僕と同じ世界の住人……そして、この子はジュエル・シードの正体を……」

ユーノくんがその子を見ながら、そう呟いていた。

相手はユーノくんを少し見たあと、レイジングハートへと目を向けた。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス……」

「ば、バルディッシュ……?」

「ロストロギア……ジュエル・シート……」

『Scythe form setup』

その子が呟くと、持っているデバイス——《バルディッシュ》が斧のような形状が変化し、その先端から金色の魔力光が出てきて、まるで鎌のように変化した……その姿はまるで、死神を彷彿とさせるような姿であった。

そしてその子は、両手でバルディッシュを正眼に構えて言った。

「申し訳ないけど……いただいています」

そう言ったと同時に、その子がこちらに接近し、持っている鎌を振りぬいてきた。

「っ!?!」

私は何とか飛行魔法でその攻撃を回避した。

だが、私がほっとする間もなく、その子は右手にバルディッシュを構え、

『Arc saber』

「ふっ……!」

思い切りスイングして振り抜いた。

すると、鎌のように先端から出ていた魔力光が放たれ、そのまま回転しながらこちらにすごい速度で迫ってきた。

「っ!？」

何とかプロテクションを張りやり過ぎた——と、私が思っている、これも予測済みだったのか相手はもうこちらに接近しており、上段から攻撃を繰り出してきた。

「きゃっ!？」

私は咄嗟にレイジングハートでそれをガードし、そのまま鏑迫り合いの形となった。

「な、なんで……なんで急にこんな……!!」

「……答えても……たぶん……意味がない」

私は相手を見つめ理由を問うが、返ってきた言葉は冷たいものだった。

「くっ……!!？」

何とか相手の攻撃を跳ね返して、距離を取り、瞬時にレイジングハートをシューティングモードに切り替えた。相手も鎌を仕舞うと、こちらと同じように杖を構えた。

そして、私は考える。

（きつと、私と同年くらい……綺麗な瞳と綺麗な髪……だけど、この子は……）

私がそう思考していると、倒れていた猫がその身を起こした。

私はそれに一瞬だけ気をとられた——それが、いけなかった

「——め——ね」

その子が何かを呟くとほぼ同時に、魔力弾が放たれて私を襲った。

その爆風で空へと舞い上がり、私はそこで意識を手放した。

side out

俺はフェイト達が戦闘を行っていた遥か上空から一部始終を見ていた。

「やはり、今のものではフェイトには歯が立たないか」

当然だな、と俺は思った。少なくともフェイトは魔導師となつてから経験がそれなりにある。いくらなのはが才能豊かで魔力量も多いとはいえ、一朝一夕で勝てるような相手ではない。

「さて、いくらフェイトが手加減していたとはいえ、なのはも怪我をしているだろうし、そろそろ行くか」

正直なところ俺が止めに入ればよかったんだろうが、それではユーノ達に俺とフェイトが知り合いだとばれてしまう可能性があった。

だが、今はまだユーノ達にそれを知られるわけにはいかない。

それに――

「なのはは一度、敗北を経験しておいたほうがいいだろうからな」

これは俺の狙いでもある。おそらく、これを機になのはがフェイトのことを気にかけるようになるだろう。そうすれば――

「きっと、良い方向に状況が動いてくれるはずだ。少なくともあの二人には……な」

俺はそう考えながら、なのは達のところに向かった。

その後、見ていたので知っていたが、俺はユーノから状況を聞い

た後、なのはを抱きかかえすずかの屋敷へと戻った。

アリサやすずか達からは、「何があっただんですか!？」と、迫られたが本当のことは言うわけにもいかなかったので、「ユーノを探しているときに転んで気絶してしまったようだ」と答えた。

皆は若干眉を顰^{ひそ}めていたが、すぐになのはが起きて俺の話に合わせてくれたので、納得してくれたようだった。

なのはは……皆に心配を掛けたことと、フェイトに会って何か感じたのだろう——終始悲しい表情を見せていた。

そんななのはを見て、俺はほんの少しだけ罪悪感に苛^{さい}まれた……

……。

その後、なのはが目を覚ましたことで解散となり、俺は皆と別れて夜の街を歩いていた——もう一人の魔法少女に会うために——

side フェイト・テストロツサ

私は今、アルフと一緒にこの《地球^{せかい}》にいる間だけ借りているマ
ンションに向かっている。

私達以外にもジュエル・シードを集めている人がいることには驚
いたけど、無事にジュエル・シードを確保することが出来た。

「少し邪魔が入ったけど、無事に手に入れることができたよ」

「さっすが私のご主人様だね！」

「ふふ、ありがと、アルフ」

私がそう言うと、アルフが笑顔で褒めてくれた。

そんなアルフに笑顔を見せながら言った。

「でも、いくつかはあの子が持つてるのかな……？」

「そうかもしれないねえ。ま、そのときはそいつからジュエル・
シードを奪えば済む話だからね！」

アルフが拳を振りながら言ってくる。

「出来れば戦いたくはないんだけど……でも、私は迷わないよ」

「フェイト……」

アルフが少し心配そうに私を見てくる。

私は大丈夫、とアルフに笑顔を見せる。それを見て、アルフも少し笑顔を見せてくれた。

「そういえば……この世界なんだよね……祐一が住んでる場所って」

「そう聞いているけどね……祐一に会いたいかい……フェイト？」

私は祐一からもらったネックレスをそっと触った後、アルフの言葉に首を横に振った。

「確かに会いたいけど、私達はジュエル・シード集めでこの世界に來てるし……それに」

私はいったんそこで区切り、

「早く母さんにジュエル・シードを届けてあげないといけないから……」

「フェイト……」

会えるのなら……私は祐一に会いたい。

祐一と別れてから一年が経つけど、ほんととはもつと長い時間会っていないんじゃないかって思えるくらいだ。

でも、母さんが待ってるから――

「大丈夫だよ。私、強いから」

「……うん、わかったよ」

アルフはそんな私の言葉に納得はしていないようだったけど、静かに頷いてくれた。

それから、アルフとこれからのジュエル・シード集めをどうするかについて話をしながらマンションの玄関口に差し掛かってきた。

「ん？ 誰か立ってるね？」

「え？ ……ほんとだ。誰だろ？」

アルフが見ている方向を見ると、玄関口の近くの壁に背を預けて長身の男の人が立っていた。その男の人は普通の私服姿であったが、もう夜だというのにサングラスを掛けていた。

男の人がこちらに気付き、壁から体を離しこちらに近寄ってきた。

すると、アルフが私を守るように前に出て言った。

「……どちら様か知らないけど、私達に何の用だい？」

「あ、アルフ……」

私を守ってくれるのは嬉しいけど、ちょっと好戦的すぎるんじゃないかな？

そんなことを思いながら、アルフの服を少しだけ引っ張る。

すると、その男の人はふっと苦笑し、こちらに話し掛けてきた。

「ふ、久しぶりの再開にしては好戦的だな——アルフ？」

「え……？」

アルフがその男の人の声を聞き、困惑していた。

この声——まさか——

「まあ、元気でやっているようだなによりだ」

その男の人は口元に笑みを浮かべながら話す。

ああ、そうだ——この声だ——

「約一年ぶりか——」

そう言つと、男の人はサングラスに手を掛け——それを外した。

私はこの人に——

「元気にしてたか——フェイト？」

そう言いながら、笑みを向けてきた。

会いたかったんだ――

私はその人――黒沢祐一の胸に飛び込んだ――

s i d e
o u t

再会（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

誤字脱字などがありましたら、指摘をお願いします。

現状説明（前書き）

投稿します。

だんだんと話の構成を考えるのが難しくなってきました。

では、どうぞ。

現状説明

フェイト達と無事に再会した後、俺達はフェイトが地球にいる間に借りているマンションを訪れていた。

久しぶりに会って動揺していたフェイトも今は少し落ち着いて椅子に座っており、アルフもその隣に座っていた。

「落ち着いたか、フェイト？」

そう聞くとフェイトは先ほどの自分の行動を思い出したのか、頬を赤く染めながらしきりに頷いていた。変わっていないなと思いつつ、俺は笑みを浮かべた。

あの後、フェイトが俺に抱きつき、ポロポロと涙を零しながら泣き始めてしまったのだ。

そしてなんとかフェイトを落ち着かせた後、流石に外ですつと話をするわけにもいかなかったのでマンションに帰ってきたというわけだ。

「う、ごめんね、祐一……迷惑かけちゃって……」

フェイトがそう言いながら申し訳なさそうに少し頭を下げた。

そんなフェイトに俺は笑みを浮かべつつ、

「気にするな。俺もフェイトに会えて嬉しかったからな」

頭を撫でてやると、フェイトは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「一応、私もいるんだけどねえ」

「ああ、もちろんアルフにも会えて嬉しいさ」

アルフが笑いながら言ってきたので、俺も同じように返事を返した。

「さて、フェイトも落ち着いてきたし、そろそろ本題に入ろうか？」

「うん」

「そうだね」

俺がそう言うと、フェイトとアルフも少し表情を引き締め、話を聞く体勢になった。

「俺がここへ来たのは、今、フェイト達が行っていることのサポートをするためだ」

「え？ ……ほんとに？ 祐一がいつしよに手伝ってくれるの？」

「ああ」

フェイトは俺がそう答えると、「そうなんだ……」と、嬉しそうに頷いていた。

すると、アルフが何か気になったのか質問してきた。

「でも、急にどうしたのさ……？　そもそも、祐一が何で私達がこの地球せかいにいることを知ってるんだい？」

「……サポートの件はプレシアさんに頼まれた。だから、お前達がこの地球せかいにいることも知ってたんだ」

「母さんに……？」

それを聞くと、アルフは少し眉を顰ひそめ、フェイトは困惑の表情を浮かべていた。

「そうだ。フェイトのサポートをしてくれと言われて、俺はお前達の下にやってきたというわけだ」

「そうなんだ……祐一にサポートをお願いするってことは、私だけだと頼りないってことなのかな……？」

「フェイト……」

俺がここに来た理由を聞くと、フェイトは少し寂しそうな表情をしながら言った。また、アルフもそんなフェイトを見ながら辛そうな表情をしていた。

やはりプレシアさんが辛く当たっているだけに、フェイトもナーバスになっているようだ。フェイトはプレシアさんの役に立てていないと思っているのだろう。

俺は少し思考した後、

「フェイト……確かに、お前はプレシアさんに頼りにされていないのかもしれない……」

「っ……！？」

「ちょ……！？ 祐一！？」

俺がそう言うと、フェイトは顔を俯かせ、アルフは少し怒りの籠った目で俺を見ている。

（最近はこのような役目ばかりだな……いや、昔……）

俺が苦笑していると、それを見たアルフが狐につままれたような顔をした。

「だが……そうではないかもしれん」

「え……？」

「俺が来ただけでは、プレシアさんがフェイトを頼りにしていない理由にはならん。まあ、実際にプレシアさんが何を考えているかは俺にもわからないが……」

フェイト達は少し驚きつつもしつかりと聞いていた。

「だから、フェイトが自信を無くす必要などない。それとも、この件は俺に全て任せるか？」

「そ、それはダメ……！ これは私が母さんのためにやらなくちゃいけないことだから……！」

フェイトは大きな声で俺の言葉を否定した。

その言葉に俺は笑みを浮かべて言った。

「わかっていないじゃないか……それでいいんだ。その自分の意思と気持ちで大事にしろ」

そう言いながら、またフェイトの頭を優しく撫でてやった。

「あ……うん……ありがとう、祐一」

フェイトは頬を赤く染め、はにかみながらも笑顔でお礼を言ってきた。

「構わんよ。また何かに迷ったり、問題があればいつでも言うといい——出来る範囲で力を貸そう」

俺がそう言うと、フェイトは「うん……！」と、元氣良く頷いた。

「で……実際、祐一はどれくらい手伝ってくれるんだい？」

少し場が落ち着いてきたので、アルフがそう聞いてきた。

「いや、言葉通りサポートだけだ。俺が出しゃばり過ぎるとフェイトのためにもならんしな……だから、あくまでメインはフェイト達

に任せる。余程のことがない限り、俺は手を出さん」

「なんだよ！全然、楽できないじゃんか！！」

「こら、アルフ……そんなこと言わないの。それに、祐一がいてくれるだけでも気持ちは全然楽になるんだから」

「そうかもしれないけどさあ」

アルフが俺に文句を言うてくるが、フェイトが窘めて少し大人しくなった。

（まあ、アルフがそう言うのも無理はないんだが……）

俺は少し溜め息をつき、少し話しを変えた。

「そういえば、今日フェイトが戦っているところを見ていたんだが……」

「え？ そうだったの？ 全然気が付かなかった……」

フェイトは少し驚いた。

「それで、フェイトと戦っていた魔導師の女の子がいただろう？」

「うん」

「フェイトから見て……その女の子は強かったか？」

フェイトは少しだけ考えた後、自分の考えを話し出した。

「そうだね……そんなに強いとは思わなかったけど……」

ただ、とフェイトは話を続ける。

「まだまだ素人だけど、魔力量も私と同じくらいだし、きっと……強くなると思う」

「そうか……」

フェイトもそう思っているか……やはり、なのはは魔導師として経験を積んできたらどんなに強くなっていくだろう。そして、おそらく今後もフェイトとぶつかる可能性が高い。

（きっと、なのはのことだからフェイトに何かしら感じるところがあったかもしれないな……これからのなのはの行動にも注意する必要がある……か……）

俺が顎に手を当てながら考えていると、フェイトが質問してきた。

「でも、何で急にそんなこと聞いてきたの？」

フェイトがそう聞いてきたので、俺は少し考えた後、フェイトに言った。

「実はな……あの子は俺の知り合いなんだ」

「……え？ ……そうだったんだ」

フェイトはそれを聞くと、驚いた後、少しだけ悲しい表情をした。

フェイトは優しい子だから、俺の知り合いであるのはと戦うことになることが心苦しいのだろう。

だが、なのはもジュエル・シードを集めている以上、どうやっても戦いを避けることは出来ないだろう。

「戦うな……と言いたところだが、俺はそれを言える立場ではないから……フェイトの思うようにやってくれて構わんよ」

「うん。私もジュエル・シードを集めて、母さんに届けないといけないから……だから、邪魔をするなら戦うよ」

フェイトは悲しい表情をしてはいるが、決意の籠った瞳を俺に向けて言った。

俺はフェイトの言葉に「そうか……」と、頷くことしか出来なかった。

その後もフェイト達が俺と別れてからの一年間をどのように過ごしていたかお互いに話した。

フェイト達は、プレシアさんの命令で研究に必要な資料や材料の調達などを行っていたようだ。たまに行った世界で魔物などと戦うこともあったそうだ。

だが、アルフ曰く、

「フェイトには並の魔物や魔導師では齒が立たないから楽勝だったね！ それにフェイトの使い魔である、私もいるしさ！」

と、それは自慢げに話してくれた。それを聞きながら、フェイトは少し恥ずかしそうに笑い、俺も笑みを浮かべていた。

すると、フェイトが俺に質問してきた。

「私が戦った女の子の話なんだけど、祐一は知り合いつて言ってたけど……どんな関係なの？」

「そうだな……俺が地球に来てから間もない頃に出会ったんだが、少しいろいろあつて話をしたのが切っ掛けで知り合いになったんだ。どんな関係と言われても困るが……少し手の掛かる妹みたいなものか？」

「そうなんだ……」

俺がそう言うと、フェイトは微妙な表情をしながら返事をした。

（ん？ 何だかフェイトの機嫌が微妙に悪くなったような気がするが……？）

俺が疑問に思っていると、アルフがにやにや笑いながら言った。

「フェイトは祐一が取られたみたいに感じてるんだよ」

「あ、アルフ！？ な、なに言ってるの！？」

「ん？ そうなのか？」

アルフがそう言うと、フェイトは顔を真っ赤にしながらアルフに言った。

俺はそんなフェイトとアルフのやり取りに笑みを浮かべながら、
「心配するな。フェイトも俺にとっては妹みたいなものだからな」
そう言いながらフェイトの頭を撫でてやると、顔をさらに赤くして小さな声で――

「……うん……ありがとう、祐一」

フェイトは嬉しそうにそう言った。

そんなフェイトを見ながら、俺はさらに笑みを深くしたのだった。

その後、流石に夜も遅くなってきたので、俺は帰ることにしたのだが――

「……え？ 祐一、帰っちゃうの……？」

と、フェイトが悲しい表情をしながら俺を見上げつつ言った。

俺はそんなフェイトに苦笑しながら、

「別に以前のように長く会えなくなるわけではないだろう？　だから、そんな顔をするな」

そう言いつつ、フェイトの頭を軽く叩いてやる。

フェイトはそれでも納得いかないのか、表情は変わらなかったが小さく頷きながら言った。

「そうだね。別に会えなくなるわけじゃないし……」

「ああ。何かあったら呼んでくれ。すぐに駆けつけよう」

「うん、ありがとう」

フェイトがやっと笑顔に戻ったことに安心しつつ、

「ではな。これからジュエル・シード集めのサポートに回るから、探すときは連絡してくれ」

「わかったよ」

「ああ……おやすみ、フェイト、アルフ」

「うん、おやすみ、祐一」

「またね、祐一」

俺はフェイト達と別れの挨拶を済まし、マンションを後にし、自宅へと向かった。

自宅へと帰って、しばらくすると、携帯電話のコールが鳴り響いた。

「誰だ？ ……なのはじゃないか」

俺がこんな時間に何の用事かと思いながら電話に出た。

「もしもし、どうしたんだ？ こんな時間に」

『あ、祐一お兄さん。ごめんね、こんな夜遅くに』

電話越しに、なのはが申し訳なさそうに言った。

「いや、別に構わないが……で、どうしたんだ？ 何か用事か？」

『そうそう、それで何で電話したかっていうと……』

なのはがそこで一呼吸し、

『今度、ちょっとした旅行で土日皆で温泉に行くんだけど、祐一お兄さんも一緒に行かない？』

「……は？ ……温泉？」

どうやら、まだまだイベントは終わらないようだ――

現状説明（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

楽しんでいただけたなら幸いです。

誤字脱字などがありましたら、指摘をお願いします。

海鳴温泉にて（前編）（前書き）

投稿します。

楽しんでいただけたら幸いです。

ただ、リアルが忙しくなってきたんで、更新が滞るかもしれません。

何とか時間を見つけて、書いていきたいと思っています。

報告が長くなりましたが、どうぞ。

海鳴温泉にて（前編）

なのはからの連絡があつてから数日が過ぎた。

現在、俺は高町家と月村家一行と共に海鳴温泉へと向かっている。

……正直、なのはから誘いの電話をもらったときは断ろうと思つていたんだが、電話越しから「祐一お兄さん……一緒に来てくれないの……？」というなのはの悲しそうな一言により、結局同行することになってしまった。

まあ俺としても温泉は好きなので、行くことに対しては何ら問題はないのだが……如何せんメンバーがメンバーだ。

皆、知り合いではあるのだが、どうしても俺だけはアウェーな感じがするので少し肩身が狭く感じるのだ。

だというのに、なのはは嬉々として俺をこの家族旅行（？）に誘ってきた。アリサやすずか達もいるので完全な家族旅行ではないのだが……。

そして、高町家の大黒柱であり、なのはの父である高町士郎さんたかまち しろうと母である高町桃子さんたかまち ももこも俺と一緒に連れて行くことに賛成したらしい……何だか俺の考え方が間違っているのではないだろうかとも感じてしまう……俺がおかしいのか……？

（まあ、ついてきてしまったことには変わらんしな……俺も今回は温

泉でゆつくりさせてもらおう……なのはにとっても、良い息抜きにもなるだろうしな)

そんなことを俺は海鳴温泉に向かう車の中で考えていた。

……だが、そんな考えが崩れ去ることになるなど、このときの俺は考えてもいなかった……

目的地である海鳴温泉に到着した。

そして部屋に荷物を置きに行った後、早速皆で温泉に入ることになった……のだが……

「……なのは、ユーノは女湯に連れて行くのか……？」

どうやら、なのは達女性陣はユーノを女湯の方に連れて行くつもりの方であった。

そんな俺の質問になのはは首を傾げながら聞いてきた。

「……？ そうだけど、何か問題あるの？」

「……………」

俺が無言でユーノの方を見ると、その顔から「助けてください！ 祐一さん！」と、言っているように感じた。

未だに俺もユーノの人間の姿を見たことがないからなんとも言えないのだが、間違いなく男であることには変わりはないので流石に問題だろう。

そう思ったので、ユーノに声を掛けた。

「ユーノ、俺といっしょに入るか？」

すると、ユーノは天の助けといわんばかりになのはの腕の中から飛び出し、俺の肩に移動した。

「あ、ユーノくん……」

なのはが声を上げたが、俺の肩でユーノは首を横にブンブンと振っていた。

そんな二人に苦笑しつつ、仲がいいのは良いことだなと思った。

「まあ、今回は男湯の方に入れてやってくれ。一応、ユーノの性別は男だからな」

「むっ」

なのは少し不服そうに頬を膨らましていたが、「仕方ないなあ」と今回は諦めてくれたようだった。

「じゃあ、今回はユーノくんをお願いね」

「ああ、わかった。なのはもアリサ達とゆっくりしてくるといい」

俺がそう言うと、「うん！」と笑顔で女湯の方へと向かっていった。そちらの方から、アリサ達がユーノがいないのを残念がる声も聞こえたが、今回は我慢してもらおう。

「ありがとうございます、祐一さん。一時はどうなることかと思いました……」

『気にするな』

ユーノが念話でお礼を言ってきたので、それに返事をしつつ俺達は男湯の方に入っていた。

俺とユーノは温泉を堪能した。

そして、ユーノは初めての温泉だったからかのぼせてしまったように先に出て行った。まあ、心配はないだろうと思い、俺は久しぶ

りの温泉を満喫させてもらった。

その後、これからどうするかと悩みながら通路を歩いていると、俺の良く知っている人物がなのは温泉から出て合流したと思われる、なのはの肩に乗ったユーノに絡んでいた。

その人物はこの旅館で借りたのであろう浴衣を着ており、見た目は綺麗な大人の女性であるのだが……

（……なんだ……この状況は……？　というか、何であいつがここにいるんだ……？）

俺は問題の人物——アルフを見ながら人知れず溜め息をついた。

（アルフがここにいるということは、フェイトもここに来ているということか……ということはジュエル・シードがこの近くにあるとみて、間違いないようだな）

そんなことを考えつつ、俺はなのは達のいる方へ歩いていった。

「何をやっているんだ？」

「あ、祐一お兄さん！」

俺が声を掛けると、なのは達はホツとしたように肩の力を抜き、アルフは露骨に「げっ……！？」と声を上げていた。

すると、アリサが俺に状況を説明してくれた。

「この女の人がなのはに絡んできたんです！　なのははこの人のこ

とを知らないって言ってるのに……!」

「ほう、そうなのか……?」

「……………」

俺はアリサの言葉に頷きながらアルフの方を見たが、俺に会うとは思ってもしなかったのか、アルフは黙ってダラダラと冷や汗を掻いていた。

すると、アルフは俺のプレッシャーに耐えられなくなったのか、

「あ、あはは……ご、ごめんごめん……人違いだったかなあ? 知ってる人によく似てたからさ……」

「な、なんだ、そうだったんですか……?」

アルフは頭を掻きながら謝罪し、なのははホッと肩を撫で下ろしていたのだが、

『今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ? 子供は良い子にして、お家で遊んでなさいね? おいたが過ぎるとがぶつといくよ……?』

『『ッ!?!?』』

なのはの横を通るとき念話で話しかけ、その言葉に二人は驚愕の表情を浮かべていた。

「さあ〜って、もうひとつ風呂行ってこよ〜」

アルフはそんなことを言いながら離れていった。

そんなアルフに俺が溜め息をついていると、

「なによ、あれ！！ 昼間っから酔っ払ってるんじゃないの！！」

アリサが憤りを隠せない様子で怒りの表情を浮かべていた。

それをなのはとすずかが宥めているのを横目で見つつ、俺はこの後の展開に頭を悩ませるのであった。

夜になり、土郎さん達と話などして盛り上がった後、「疲れたので、俺はもう寝ます」ということを伝え、俺は土郎さん達と別れた。

ちなみに、俺は一人で部屋を借りている。桃子さんが「なのは達と一緒に部屋でいいんじゃないか？」と言っていたが、流石に丁重にお断りさせてもらった。

おそらく状況が動くとしたら、皆が寝静まった夜中だろうと思っていたので部屋に帰り私服に着替えた。

しばらくして、なのは達から念話で連絡があった。

『祐一お兄さん、ユーノくん、起きてる？』

『ああ、起きてるぞ』

『うん』

『……それで話なんだけど、昼間の女の人はやっぱりこの間の子の関係者かな？』

やはりその話かと俺が思っていると、

『うん、たぶんね……祐一さんはどう思います？』

『言動から察するに、ほぼ間違いなく関係者だろうな』

ユーノが聞いてきたので、俺は全く知らないかのように質問に答えた。

すると、なのはが話し出した。

『また……この間みたいなことになっちゃうのかな……？』

『たぶん……』

『それで、どうする？ この間みたいなことになるのはほぼ間違いないだろう。止めるか……俺とユーノでやっても構わんが……？』

『……ううん、止めないよ』

俺の言葉になのはが静かに話す。

『ジュエル・シード集め、最初はユーノくんのお手伝いだっただけど……今はもう違う……私が自分でやりたいと思ってやってることだから……』

なのははさらに続けて話す。

『祐一お兄さんもユーノくんも止めるなんて言わないで……じゃないと、今度は怒るよ?』

そんななのはの言葉に俺は笑みを浮かべた。

『ふ、どうやら意思は固いようだな……それなら俺はもう何も言わん。自分が思う通りにやってみる。ユーノもそれでいいな?』

『はい、大丈夫です、祐一さん!』

『ありがとう、祐一お兄さん!』

俺の言葉に二人が元気良く返事をする。

『さて、おそらく事が起こるとすれば夜中だろう……二人共できるだけ寝て体力を温存しておけ』

『はい!』

二人の返事を聞いた後、俺は誰にも悟られることなく、静かに部屋を出て行った。

side フェイト・テストロッサ

私は今、暗い森の中の木の上でジュエル・シードを探している。

この周辺のどこかにあるのは間違いないと思うけど、反応が小さすぎて上手く見つけることが出来ずにいた。

結局、少しでもジュエル・シードの反応があるまで、私は休憩もかねて木の上からジュエル・シードの反応を待っている。

（歯がゆいな……）

ほんとにもっと早くジュエル・シードを見つけて、母さんのところに持って帰りたいけどそうもいかない状況となっている。

（祐一ならもっと上手く見つけられるのかな……？）

私はそんなことを思いながら祐一のことを考えた。

祐一はすごく強い魔導師で、私よりも魔力量が少ないのに、私は

一度も祐一に勝つことが出来なかった。

祐一から師事されるようになってからずっと、祐一は私の目標だ。私も祐一のような一流の魔導師になりたいと願っていた。

祐一から師事されるようになってから、私は祐一の背中ばかり見ていた。

だから、リニスがいなくなり、そして祐一が私の教育を終えていなくなつてからの一年間はとても寂しくて、心にぽっかり穴が開いたようだった。

でも、母さんの役に立つために私は母さんから頼まれたことを淡々とこなしていった。母さんからの頼みごとだったということもあったけど、それを行っている間はいろんなことを考えなくて済んだ。

そして、ジュエル・シードを集めるためにこの地球^{せかい}に来て——祐一と再会した。

始めはいろんな感情が込み上げてきて、何にも考えられなかったけど、祐一の声が聞こえたら嬉しかった。

そう思ったら、祐一がいなくなつてからの一年間泣くのはずっと我慢してきたはずなのに、私は祐一の胸に飛び込んで久しぶりに泣いた。

（あのときからかな……私の中で祐一の存在がもっと大きくなったのは）

そんなことを思いながら、祐一の胸で泣いたときのことを思い出
し、私は体温が上がっていくのを感じた。

（あ、あれって、私、とても恥ずかしいことしてたよね……）

今更、私があのかの事を思い出して、恥ずかしがっていると、

「こんな所にいたのか、フェイト？」

「ひゃい！？」

私がびつくりして声がした方向を見ると、件の人物である祐一が
立っていた。

「ゆ、祐一……？ 何でここにいるの……？」

「私もいま……」

私が疑問に思っていると、祐一の後ろからアルフが疲れた表情で
立っていた。

「ど、どうしたの、アルフ？ なんだか疲れてるみたいけど……
？」

「い、いやあゝそれがね……？」

「アルフがふざけたことをやっていたから、俺が説教をしておいた
んだ」

「？ そうなの？ なんで？」

私が首を傾げながら聞くと、

「アルフが相手の魔導師に喧嘩を吹っかけてな……全く、俺の知り合いだと言っただろう」

「だ、だから謝ったじゃないか……」

どうやらアルフが何かいけないことをして、祐一に叱られていたみたいだった。

「それで、なんで祐一はここにいるの？」

「それは正直、たまたまなんだが……知り合いに温泉に行かないかと誘われてな」

祐一が困ったように笑みを浮かべながら話してくれた。

そして、その手に持っていた袋をおもむろに私に差し出した。

「？ これ、なに？」

「フェイトは何も食べていないだろうと思ってな……まあ晩御飯の残り物だが食べるといい」

「うわぁーありがとう、祐一」

私がお礼を言うと、「気にするな」と祐一はいつものように答えた。

小さなことだけど、そんな祐一の厚意が嬉しくて私の心は温かくなった。

（祐一は優しいな……たまに怒ることもあるけど、それには必ず理由があつて、結果として私達を助けてくれる）

私は祐一が持ってきてくれた晩御飯を食べながら、心の中でもう一度祐一にお礼を言った。

（いつもお世話になってばかりだから、いつかは祐一の手助けが出来るようになりたいな……）

隣でアルフと喋っている祐一を見ながら、私はそんなことを考えていた。

s i d e o u t

後編へ続く……

海鳴温泉にて（前編）（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

少し長くなりましたので分けることにしました。

誤字脱字などありましたらご指摘をお願いします。

海鳴温泉にて（後編）（前書き）

投稿します。

後編です。

では、どうぞ。

海鳴温泉にて（後編）

俺はアルフと合流し、アルフに説教をしながらフェイトと合流した。

今は俺が持ってきた夕食をフェイトが食べながら、現在の状況を聞いているところである。

「で、この近くにジュエル・シードがあるのか？」

「うん、間違いなくこの近くにはあると思うんだけど、魔力の反応が不安定で見つけれてないんだ」

フェイトの言葉を聞きながら、俺はなるほど頷いた。

確かにそれらしい反応はあるようだが、いかんせん反応が小さすぎる。

「祐一なら見つけられる？」

「いや、残念ながら無理だな」

俺が首を横に振ると、「そっか……」とフェイトは少し残念そうに頷いた。

「とりあえず、ジュエル・シードの探索なら俺も手伝うから地道に探していこう」

「うん」

「わかったよ」

フェイトが俺の持ってきた食事を食べ終わっただのを見計らって言う
と、フェイトとアルフが返事をした。

「俺が手伝うのはジュエル・シードの探索までだ。発動したらフェイトの手並みを拝見させてもらおう」

「うん、十分だよ」

「それから、白い魔導師の女の子が出てきたらそれもフェイトに任せるよ」

俺の言葉を聞き、フェイトが頷くのを確認した後、俺達はジュエル・シードを探すために動き出した。

あれから数時間が経過した——その時だった——

「……………む？ この反応は……………？」

少し遠くの方からジュエル・シードの反応を感じた。

「発動前に回収したかったが、無理だったようだな……………」

俺は少し溜め息をつくど、すぐにフェイト達に念話で連絡を取った。

『フェイト、アルフ、気づいているな?』

『うん、ジュエル・シードの反応だ』

『私がいるところの近くだよ』

俺の問いかけにすぐさま、フェイトとアルフが答える。

『そうか……なら、ここからはフェイト達に任せる。俺は近くで前達の手並みを拝見させてもらおう』

『うん、わかった。すぐに封印出来るだろうし、大丈夫だよ』

『そうそう、余裕、余裕♪』

『そうか……気をつける』

俺はそう言い念話を終了した後、フェイト達から離れるため移動を開始した。

side 高町なのは

私は今、ジュエル・シードの反応を感じてすぐに反応があった方向へと急いだ。

（祐一お兄さんはどこにいったんだろう……？）

私が部屋から出て祐一お兄さんの部屋に行くと、そこには祐一お兄さんの姿はなかった。

祐一お兄さんがいなくて少し不安になった。

（……いや、祐一お兄さんに頼ってばかりじゃダメだ……私だけでもしっかりやらないと！）

私は考えを切り替えるために、少し頭を振り、レイジングハートを右手に持った。

「レイジングハートお願い！」

『Stand by ready』

バリアジャケットを纏い、ジュエル・シードがあるであろう場所まで行くと、そこには旅館で会った女の人とこの前出会った女の子がいた。その女の子の手には、すでに封印が完了したジュエル・シードが握られていた。

「あゝら、あら、あらあら」子供はいい子でって、言わなかった

っけかい？」

「それを……ジュエル・シードをどうする気だ！ それは、危険な物なんだ！―！」

女の人が言うと、私の肩に乗っていたユーノくんが叫ぶように言った。

「さあ〜ね？ 答える理由が見当たらないね……それにさ？ 私言っただよね……？ いい子でないと、がぶつといくよって……！」

「ッ！？」

女の人があざけたように答えたかと思うと、私の目の前で人間だった女の人がとても大きな犬（？）に変身した。

すると、ユーノくんが驚きつつも、確信を持って言った。

「やっぱり……あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔……？」

「そうさ、私はこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを懸けて守ってあげるんだ」

私の疑問に答えるように相手が話した。

（あの赤い犬さん……とってもあの子のことを大事にしてるんだ……）

少ししか言葉を聞いてはいないけど、その言葉からあの子のことが大事なんだということは伝わってきた気がする。

「先に帰ってて、すぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね?」

「オーケー!!」

相手のやり取りを眺めていると、赤い犬さんが言葉とともにこちらに遅い掛かってきた。

私が驚いていると、ユーノくんが肩から飛び降り、防御結界を張る。

「なのは! あの子をお願い!」

「させるとでもおもってんの!!」

ユーノくんがそう言い、相手もこちらの邪魔をしようと結界を破壊しようとする——だが、

「させてみせるさ!!」

「移動魔法!? マズッ!?」

ユーノくんの足元に一際大きな魔方陣が出来たかと思うと、ユーノくんは相手の犬とともに姿を消してしまった。

「結界に強制転移魔法……良い使い魔を持っている」

「ユーノくんは使い魔ってやつじゃないよ。私の大切な友達!」

私がそう言うと、相手は私を威嚇するように睨みつけ、私も負けないように相手を見た。

すると、相手の女の子が静かに口を開いた。

「で、どうするの……?」

「話し合いで何とか出来るってことない……?」

「私はロストログアの欠片を……ジュエル・シードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら私達はジュエル・シードを懸けて戦う敵同士ってことになる……」

「だから……! そういうことを勝手に決め付けないために、話し合いって必要なんだと思う!」

「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ……何も変わらない……伝わらない!」

相手はそう言うと、すごい速さで私の背後に回りこみ攻撃を仕掛けてきた。

「ッ!」

私は何とかその攻撃をかわし、空へと逃げる。

(このままじゃ、完全に話が平行線だ……だけど)

私は考えながら相手に向かって叫ぶ。

「けど……！！ だからってー！！」

「懸けて、それぞれのジュエル・シードを一つずつ……！」

この子の意思はとても固い。私の言葉じゃ届かないのかな……？

私じゃ何にも出来ないのかな……？

私はどうすればいいのかな……祐一お兄さん……

S i d e o u t

俺はフェイトとなのは達の戦いを上空から傍観している。

皆派手に戦闘を行っているが、周囲に結界を張ってあるので、魔導師でない人間ではこの中に入っていない限り気付くことがないの問題はない。

現在、戦況はフェイト対なのは、アルフ対ユーノといった具合に上手く別れている。

アルフとユーノの戦いはおそらく平行線になるだろうと考えている。二人の能力から鑑みるに、アルフの方が攻撃力の面では優れている。

だが、対してユーノは防御や補助魔法を得意としている。

そのため、何も問題がなければどちらも決め手に欠けるため、この勝負は決着が着かないのではないかと、俺は思っている。

となると――

「やはり、フェイトとなのはどちらかが勝利することによって勝敗が決まるか……」

俺は呟きながら、眼下で行われているフェイトとなのはの戦いを静かに見る。

そこでは、フェイトとなのはが激しい戦いを繰り広げている。

だが、なのははフェイトとの話し合いによる解決を望んでいるので、どうしても後手に回っている感じが否めない。

対してフェイトは、そんななのはの説得に応じようともせずに、激しく攻撃を行っている。

「なのはも上手く状況を把握し攻撃に転じてはいるが、やはり経験不足か……まだフェイトの方に分がある……か」

俺がそう考えていると、

「ほう……？」

フェイトが自身を持つ数少ない遠距離・直射系砲撃魔法である【サンダースマッシャー】を放つが、もはやなのはの代名詞と言っても過言ではないであろう【ディバインバスター】で応戦している。

そして、数秒も経たない内にフェイトの【サンダースマッシャー】はなのはの【ディバインバスター】によって掻き消され、【ディバインバスター】がフェイトを襲った。

「すごい攻撃力だな……遠距離からの砲撃での攻撃力ならこの中では誰も勝てる奴はいないだろうな……」

なのはが放つ砲撃魔法の攻撃力には目を見張るものがある。それに加え、やはり天性の才能とでもいうのだろうか、まだまだ素人であるにも関わらず、戦闘中の状況把握が恐ろしい速度で上達している。

「やはり、なのはの魔導師としての才能は素晴らしいものがあるな……だが……」

なのはの方を見ると、【デイベインバスター】を射ち、フェイトの姿が見えなくなったことで少し気を抜いたのか、見るからに隙だらけになっている——そこをフェイトが見逃すはずもなく——

「決着……か」

俺が視界の先では、なのはの喉元にまるで死神の鎌のようにバルデッシュを突きつけているフェイトの姿があった。

そして、決着が着いたのがわかったのである。レイジングハートが捕獲していたジュエル・シードを吐き出し、フェイトに渡していた。

フェイトはそのジュエル・シードを取り、そのまま去ろうとしたが、なのはに何かを言われて少しだけ立ち止まり話した後、フェイト達は森の中へと消えていった。

「さて、とりあえずフェイト達に連絡しておくか」

俺がそう考えていると、

『祐一、聞こえる……？』

フェイトからの念話が入った。

『ああ、聞こえている』

『無事にジュエル・シードも捕獲出来たから、私達は戻ろうと思ってるんだけど、祐一はこれからどうするの？』

『俺はあの子と一緒に戻る。フェイト達は先に戻っておけ』

『……うん、わかった……』

フェイトの質問に答えていると、フェイトの声が微妙に元気がなくなっているような気がした。

そんなフェイトに少し苦笑した後、俺は言った。

『フェイト……』

『……？』

『よく頑張ったな……お疲れ様』

『うん……ありがとう、祐一』

念話越しではあるが、フェイトが嬉しそうな声で答えた。俺はそんなフェイトに笑みを浮かべつつ、

『では、また連絡する。帰ったらゆっくり休むといい』

『うん、わかった。またね、祐一』

フェイトの言葉を聞き念話を終了しつつ、俺はもう一人の少女の方へと目を向けた。

そこにはフェイトが去っていった方向を呆然と眺めている白い魔導師である少女——高町なのはが立っていた。

「流石に今回の件はなのはには厳しいことをしてしまったか……」

俺は心の中でなのはに謝罪しつつ、なのはの方へと向かった。

side 高町なのは

あの女の子——フェイト・テストロッサが去って行った方向を私は呆然と見つめていることしか出来なかった。

（また、負けちゃったな……）

なんだか、私の心の中にもややもやとした感情が残っていた。

（負けたことが悔しかったから……？）

それは違つと、私は思った。

（私は……どうしたいんだろう……？）

私が呆然と考え事をしていると、

「なのは……大丈夫……？」

ユーノくんが心配そうに私に声を掛けてくれた。

私はユーノくんに上手く笑えたかわからない笑みを浮かべつつ、返事を返した。

「うん……大丈夫だよ。それより、ごめんね？　結局、ジュエル・シード二つも取られちゃって……」

「ううん、いいんだ……なのはが無事だったし、また取り返せばいいよ」

ユーノくんの言葉に私は静かに「ごめんね」と返事を返す。

私とユーノくんは無言となり、気まずい空気が周囲を支配し始めたとき——そこへ——

「ジュエル・シードは取られてしまったか……」

今まで姿を消していた祐一お兄さんが現れた。

「祐一さん……！？　今までどこにいたんですか……！？」

「……上空から戦いを見させてもらっていた」

ユーノくんが声を荒げながら祐一お兄さんに詰め寄るが、表情を変えずに祐一お兄さんは静かに言葉を返した。

「見てたって……何で手伝ってくれなかったんですか……！？」

「すまないとは思ったが……手を出そうかとも考えていたが……なのはの表情を見て手伝うのを止めた」

「え……？　私の表情……？」

ああ、と祐一お兄さんは頷き話を続ける。

「確かにジュエル・シードを集めるという点では、俺が手伝えれば比較的簡単に集まるだろう……」

「じゃあ……」

「だが……それでは根本的な解決にはならんし、気持ちの整理がつかないだろう。確かなのはジュエル・シードを集めることを決意したかも知れないが……今はあの子のことで頭が一杯のようだから」

らな……」

「祐一お兄さん……」

「だから、俺は敢えて邪魔をせずに傍観していたんだ。だから、なのは、またお前に聞くぞ……？ お前は……どうしたい……？」

祐一お兄さんはそう言うと、真剣な眼差しで私をジッと見つめてきた。

（祐一お兄さんは、私の気持ちがわかってたから敢えて手を出さずに見ていたんだ……）

私が自分で選んだ道を歩いていけるように――

私は整理しきれない思考の中で、今の自分の気持ちをゆつくりと祐一お兄さんに話し始めた。

「まだ頭の中がごちゃごちゃしてるし、わかんないことが一杯で自分がどうしたいのかもわかってない……けど……」

私は深呼吸した後、祐一お兄さんの目を見ながら話した。

「自分がどうしたいのか、ちゃんと考えて決めるよ……胸を張って歩いて行けるように……自分の考えに自信を持てるように……」

祐一お兄さんが無言で見つめてくる。それを私もジッと見つめ返す。

数秒経った後、祐一お兄さんは表情を崩し私に笑いかけてくれた。

「そうか。なのは、お前の出す答え……期待しているぞ……？」

「うん……！」

私が笑顔で返事をする、祐一お兄さんは頭を撫でてくれた。少し恥ずかしかったけど、それよりも断然嬉しい気持ちの方が大きくて、私はさらに深い笑みを浮かべた。

「じゃあ、そろそろ戻ろう。流石に疲れちゃった……」

「そうだな。流石に俺も眠い……」

「僕も疲れたよ……」

祐一お兄さんとユーノくんの返事に笑みを浮かべながら、私達は旅館へと向かって歩き出した。

少し前を歩く祐一お兄さんの背中を見ながら――

悩むこともいっぱいあるし、間違えちゃうこともあるけど――

私の想いと気持ちは間違っていないと胸を張れるように――

精一杯悩んで、答えを出すから――

期待しててね——祐一お兄さん

私はそう心の中で、そう宣言した。

S
i
d
e

o
u
t

海鳴温泉にて（後編）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字などありましたら、指摘をお願いします。

わかりあえない気持ち（前編）（前書き）

投稿します。

今回は少し短いです。

では、どうぞ。

わかりあえない気持ち（前編）

俺は最近、休業がちになっていた《便利屋》の仕事を請け、今は依頼を終えて町を歩いている。

（今のところジュエル・シードの反応も無くてなによりだな）

そんなことを考えながら俺はこの前のことを思い出していた。

海鳴温泉での一件から数日が経った。

あの一件以来、なのははよく物思いに耽^{ふけ}るようになった。どうやら、あの日からこれから自分がどうしていくか、また自分がどうしたいのかを悩んでいるようだ。

元気がないというわけではないのだが、少しぼーっとしていることが多くなっているので俺も少々心配している。

だが、俺から手助け出来るようなことは現状では無いに等しいので、少し気にかけてやるぐらいのことしか出来ない。

（なのはには辛い役目を負わせてしまっているな……フェイトにしたらってそうなんだが……）

俺は一人、商店町を歩きながら二人の魔法少女について思考を巡らせていた。

フェイトとなのはの二人は、互いにとっても優秀な魔導師となる素質を秘めている。フェイトは一年間の訓練と実戦から一流と呼んでも通じる実力を持ち合わせている。

なのはも実戦経験こそ少ないが、内に秘めたる魔力量、広い視野、なにより諦めない心を持っている。

今はフェイトの方が実力的には上だが、状況や戦術によっては狂わせもありえるのではないかと俺は思い始めている。

（本当ならば二人が戦う必要などないのだがな……）

俺はそんなことを考えたが、少し頭を振りその考えを振り払った。

（今更だ…… もう後に引けないところまで来ているというのに……）

そう頭の中で考える。

（フェイトとなのはに偉そうなことを言っておきながら、自分の行動に迷っているとはな……滑稽なことだ）

そう考えながら、自嘲的な笑みを浮かべた。

俺がしばらく町を歩いていると背後から声が掛かった。

「あれ？ 祐一さんじゃないですか？」

「ん……？」

聞き覚えのある声に振り返ると、

「「こんにちは、祐一さん」」

そこにはなのはの親友である、アリサ・バニングスと月村すずかが立っていた。

「ああ、二人ともこんにちは。どうしたんだ、こんなところで？」

「私とすずかはこれからお稽古があるんです」

アリサの言葉に、なるほどと頷いた。アリサもすずかもお嬢様だからな、と一人で納得する。

「祐一さんは何してるんですか？」

「ああ、今日は《便利屋》の仕事があつたからな。今はその帰り道なんだ」

俺の言葉にすずかとアリサは同じようになるほどと頷いた。

すると、アリサが俺をジッとこちらを見つめて何かを言いたそうな表情をしていた。

「？ どうしたんだ、アリサ？」

「あ……えっと……」

俺がアリサに質問すると、アリサは明らかに動揺しながら、視線を彷徨さまよわせていた。

アリサの行動に首を傾げていると、隣にいたさすが俺に話し掛けてきた。

「あの、祐一さん。最近、なのはちゃんが考え事が多いみたいで、悩み事とかあるみたいなんですけど……祐一さんは何か知っていますか？」

「……なるほど。アリサが聞いたかったのは、これだったわけか」
俺がそう言いながらアリサの方を見ると、アリサはばつが悪そうに顔を横に向けていた。その頬は少し赤く染まっている。

二人ともなのはのことが心配なのだろう。アリサも口では悪態をついたりしているが、内心では親友であるなのはのことをとても心配しているとてもいい子だ。

すずかも物静かな子ではあるが、とても友達思いのいい子である。

（なのはは良い友人に恵まれているな……だが……）

俺はそう思うと同時に、二人に詳しい話をするわけにはいかないことに心が痛んだ。

「すまない。二人がなのは心配をしてくれるのはよくわかる……だが、本人が話していないのに俺がそれを教えるのはルール違反になる」

「じゃあ、祐一さんはなのはが何で悩んでいるのか知ってるんですか？」

「……完璧にわかっているとは言わないが、大筋は理解していると思っている」

アリサは俺の言葉を聞くと、少し悔しそうに唇を噛み締め俯いた。すずかはそんなアリサを心配そうに見ている。

俺がアリサになんと声を掛けるべきかと悩んでいると、アリサが話し始めた。

「……なんで祐一さんには話せて、私達には何も教えてくれないのよ……！ 私達は友達じゃないっての……！」

「アリサちゃん……！」

「何かに悩んでて考え事してるってのがみえみえなのに、どうして私達には何も相談してくれないのよ……！」

「……………」

俺はアリサの慟哭を聞きながら二人を交互に見つめた。

アリサもすずかもなのはのことを心配している。

魔法のことだからという理由もあると思うが、なのはもおそらく二人に心配を掛けたくないから理由を話さないのだろう。

互いが互いを想っているだけに起こってしまうすれ違いであり、それゆえに解決の難しい問題ではある。

（全く……ままならないな）

俺は心の中でそう思いながら、アリサとすずかに静かに話し出した。

「……確かにアリサ達にはなのは悩んでいることを相談しないだろう。だが、それこそがなのはが二人を大事に想っている証拠だということをおわかって欲しい。おそらく、二人のことだからもうわかってはいるのだろうがな……」

「……そんなことはわかってます。なのはが私達に心配を掛けたくないから、何も言わないってことぐらい……」

アリサは俺の言葉を聞きそう言つと、表情を曇らせ俯いた。

「それに、たぶん私達じゃあの子の助けにならないってことも、待つてあげるしか出来ないことも……」

「そうか……アリサもすずかも辛いかも知れないが、なのはが話すまで待つていてくれないか……？」

「私はそのつもりでしたから」

俺の言葉にすずかが少し寂しそうな笑顔で答えた。

「私は……ずっと怒りながら待ってます。気持ちを分け合えない寂しさと親友の力になれない自分に……」

アリサは俯いていた顔を上げ、表情は少し曇っていたが、その瞳からは想いが伝わってきたように感じた。

俺はそんな二人を見ながら、

「そうか……すまないな、アリサ、すずか」

「いいえ、いいんですよ！」

「そうです、祐一さんに謝ってもらう理由はありませんから」

俺が礼を言うと、すずかもアリサも笑顔で答えてくれた。

「そのかわり、なのはちゃんをよろしくお願いします！」

「あの子、すぐ無茶するから祐一さんがしっかり見てあげておいてください！」

すずかとアリサが逆に俺に対して頭を下げてきた。

俺はそんな二人の言葉に、

「……ああ、任せておけ」

そう言葉を返したのであった。

アリサとすずかと別れた後、ジュエル・シードの探索も兼ねて町を歩いていた。この近辺にジュエル・シードの反応を感じるのだが、まだ見つけられないでいた。

「もうすっかり日が暮れてしまったか」

視線を上げると太陽はほとんど隠れてしっており、町の街頭が光り輝いていた。

帰宅時間となっているので、たくさんの人が駅に向かったり、歩いて帰宅している人がいたりと道を行き来している。

そんな人の流れを見ながら、自分も今日は諦めて帰ろうかと思っていたとき、

「……この反応は……アルフか……？　ジュエル・シードを強制的に発動させようとしているのか……？」

俺はアルフの魔力反応を感じ、少し驚きつつ小さく呟いた。

するとすぐに、その魔力反応に気付いたのか、もう一つの魔力反応を感じた。

「こちらの反応はなのは達か？」

俺が思考しているうちに、ユーノが発動させたであろう広域結界が町を包み込んだ。

「これで町の人達は安全だろう。だが、強制的にジュエル・シールドを発動させるとは、無茶なことをする」

そう呟きつつ、俺はユーノが発動した広域結界が発動し終えた後、フェイト達の居場所を確認するためにビルの上へと飛翔した。

ビルの上から確認すると、ジュエル・シールドが発動しているであろう場所から魔力の光が立ち上っていた。そして、それを境に俺から見て左側にフェイト達があり、右側になのは達の姿を確認した。

そして、俺が二人の姿を確認したのとはほぼ同時に二人共ジュエル・シールドを封印するために杖を構えていた。

そして、二人が叫んだ。

「リリカルマジカル……！」

「ジュエル・シード……！」

「封印……！」

二人の杖の先端から砲撃が放たれ、ジュエル・シードにぶち当たり、魔力の放出も止まり一旦の落ち着きをみせた。

「だが、あれはマズイかもしれんな。二人の魔力を同時に受けている……今は落ち着いているが、何かの拍子に暴走しかねんな。だが……」

俺はそう言いつつも、二人の間に割ってはいえるようなことは出来ないと考えたため、結局は――

「いつものごとく、傍観に徹するしかないか……」

溜め息をつきつつ、俺は壁に背を預け、フェイト達の戦闘を見ることに専念することにした。

（何事も起こらなければいいのだが……）

俺はそんなことを考えるのであった。

後編へ続く……

わかりあえない気持ち（前編）（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

誤字脱字など指摘がありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112u/>

魔法少女リリカルなのは～黒衣の騎士物語～

2011年10月10日03時16分発行